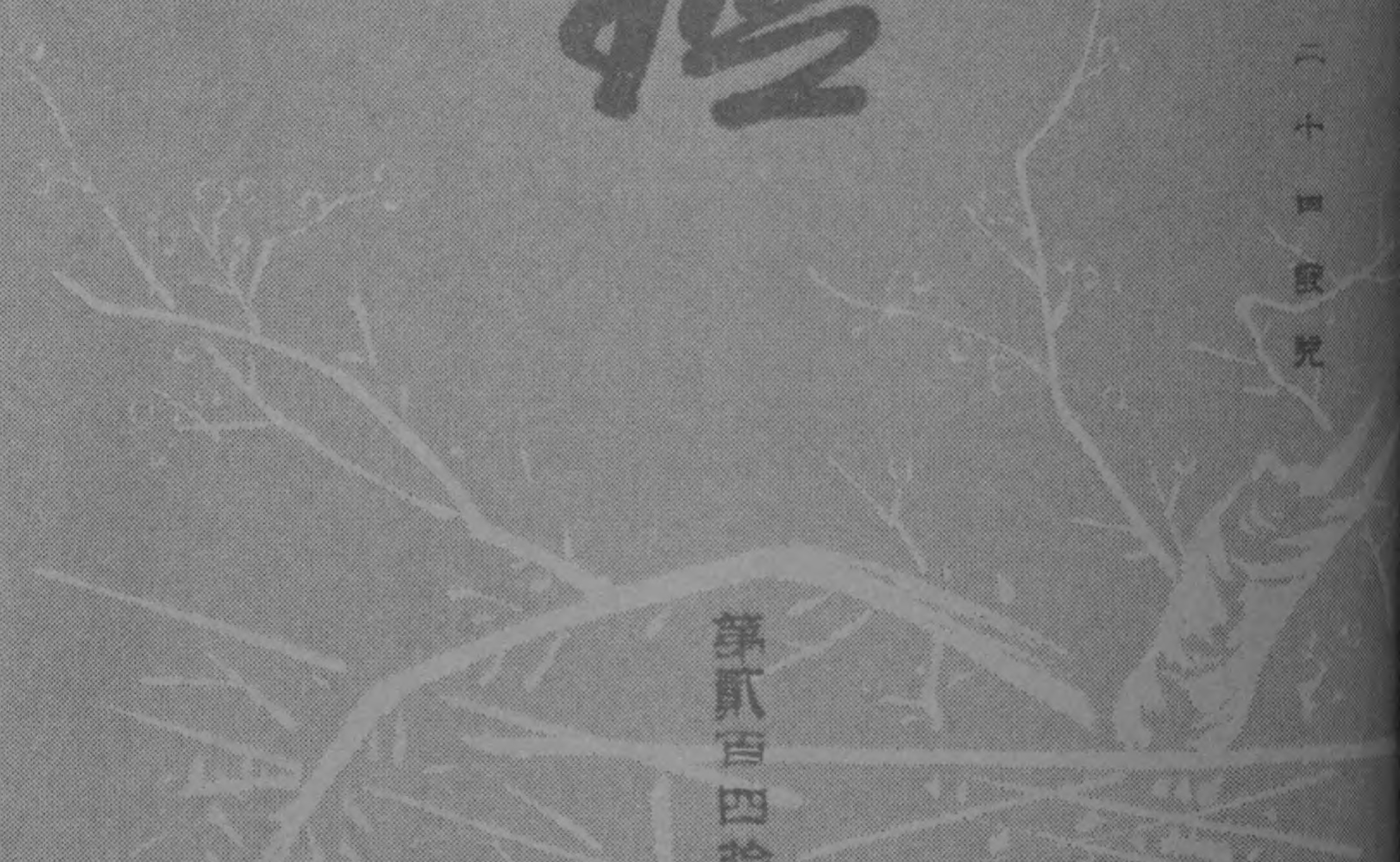
明治三十五年二月二十日發兌

女鑑



第貳百四拾七號

女鑑第貳百四拾七號

目録

社告

○代價は郵便爲替又は郵便爲替銀行爲替及び通運にて本社出版部へ御送金の事
○郵便爲替は東京新富町郵便取扱所へ御振込可被下候事
○郵券代用は一錢、三錢一割增の事
○別に領收證を出さず若し强ひて領收證を要せらるゝ方は別に證書郵送料御送附の事
○未納税の來書は一切受取り申さゝる事

定價
一冊 金拾錢
六冊三ヶ月分 前金五拾七錢
十二冊半年分 前金壹圓拾錢
廿四冊一年分 前金貳圓拾錢
全國無遞送料

廣告料
五號活字廿三字詰一行 金參拾錢
半頁 金八圓
一頁 金拾貳圓
表紙一頁 金拾六圓
色刷は特に御相談に應ず

明治三十五年二月十五日印刷
明治三十五年二月廿日發行

編輯兼發行人 東京市京橋區南八丁堀一丁目十一番地 渉[illegible]一
印刷人 東京市京橋區築地二丁目二十一番地 蟲木眞雄
發行所 東京市京橋區築地二丁目二十一番地 國光社
發賣元 東京市京橋區築地二丁目二十一番地 株式會社 國光社出版部
（電話新橋二六九三番）
（電話新橋特八八番）

稟告

女鑑發賣に關する事務は是迄東京市京橋區南傳馬町一丁目七番地靜思館書店をして取扱はしめ來り候處爾後國光社出版部に於て發賣する事に相改め候間自今代金御送付、御照會、及廣告に關する事件一切の事務は左記宛にて御申越被下度候也

追伸

爾來各所よりの新刊新聞雜誌及圖書等の御寄贈は甚だ御手數ながら必ず**國光社出版部**へ宛て御寄贈被下度此段謹告候也

明治卅五年二月

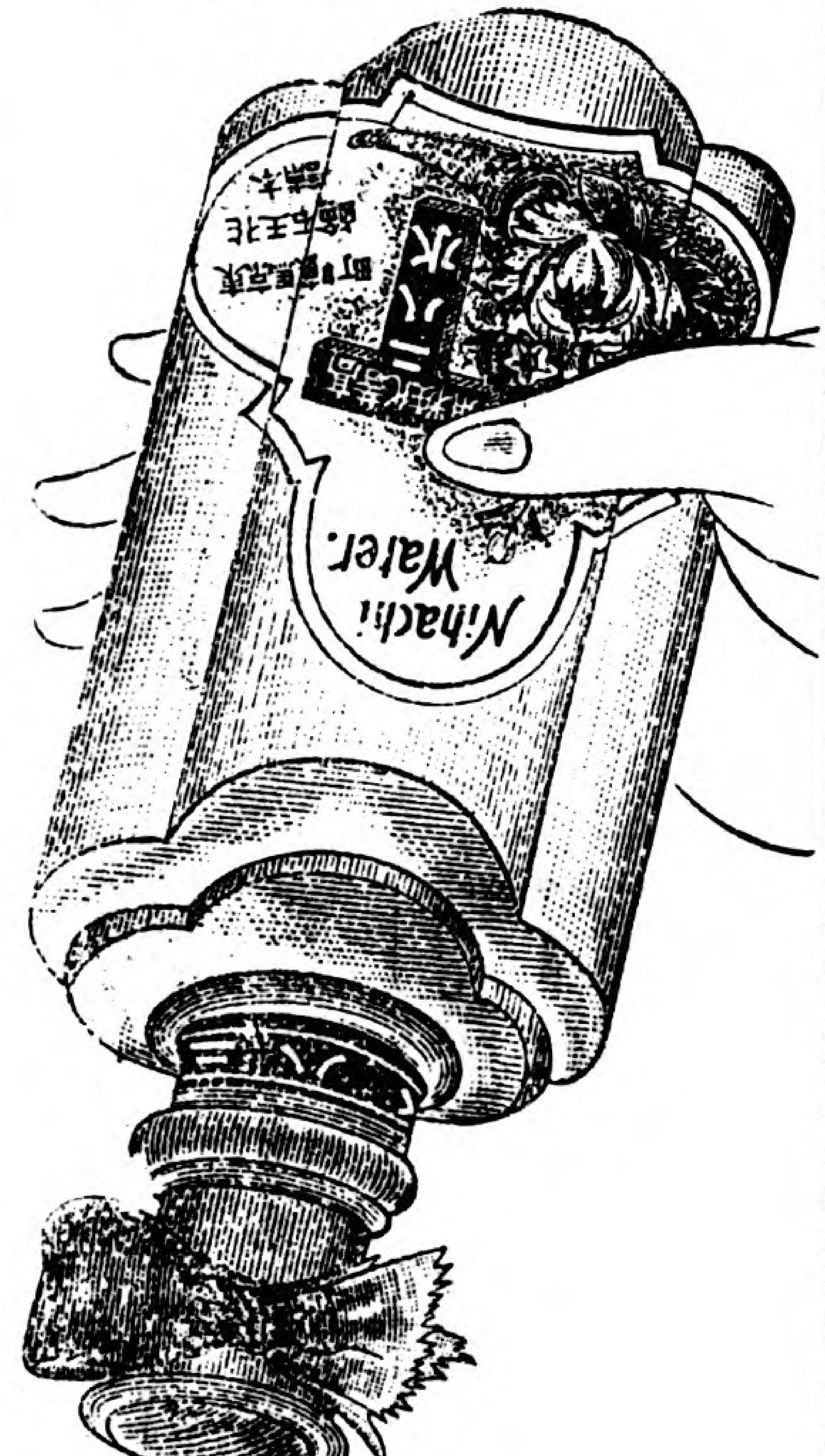
東京市京橋區築地二丁目廿一番地

株式會社 **國光社出版部**

（電話特新橋八八番 電話新橋二六九三番）

二八水は
肌を白くきめを
よくつやをだし
にきび●[illegible]●
肌のあれ●おし
ろい下に用ゐて
尤もよろし

又芳香馥郁として貴孃紳士の愛すべき佳品なり

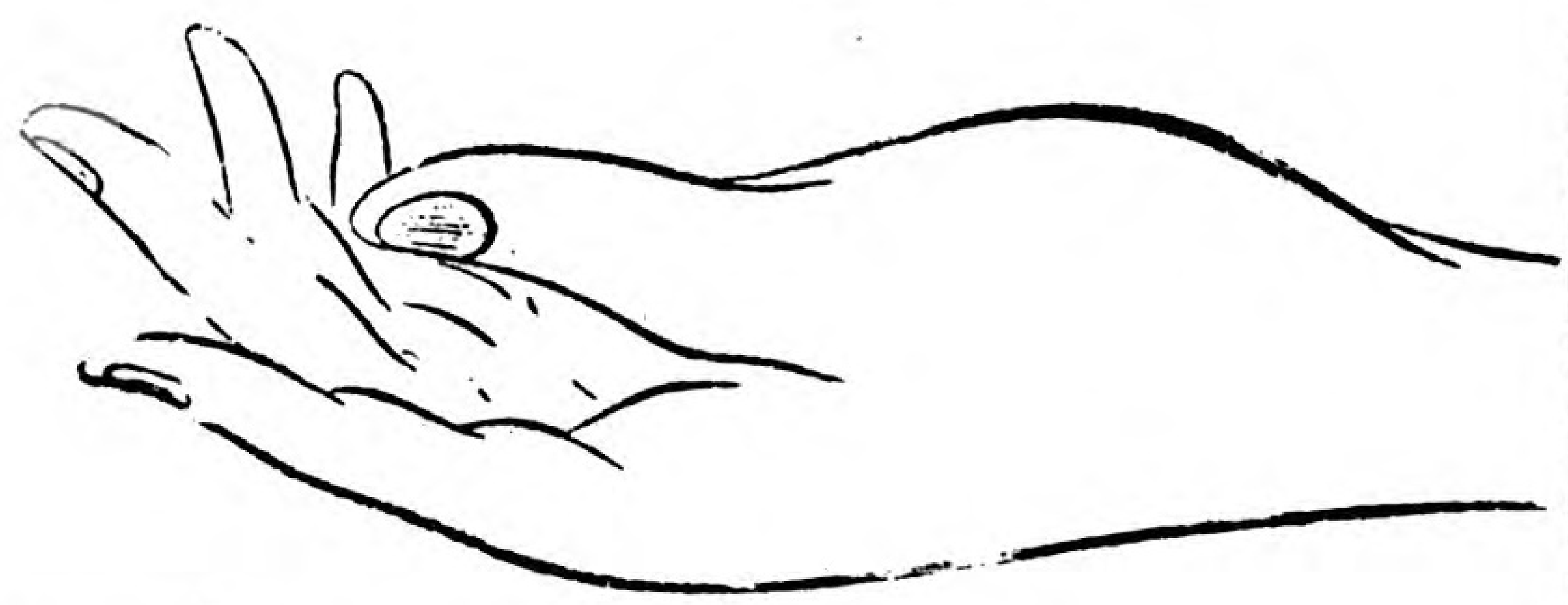


花王石鹸

品質ノ善良ト衛生ニ經濟ナ
旨トシテ製煉シタル佳品ナリ

●賣捌所ハ全國到ル所ニアリ

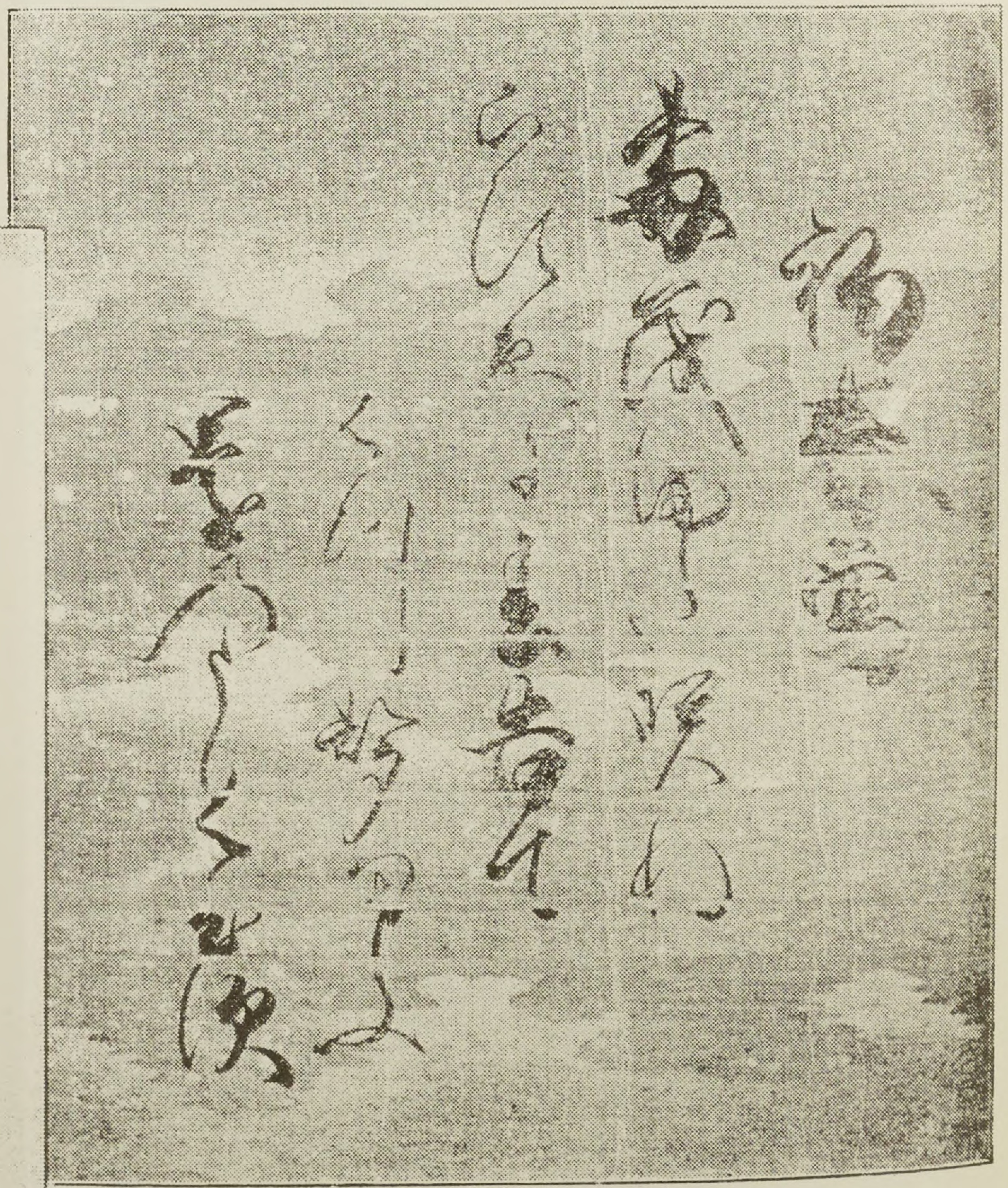




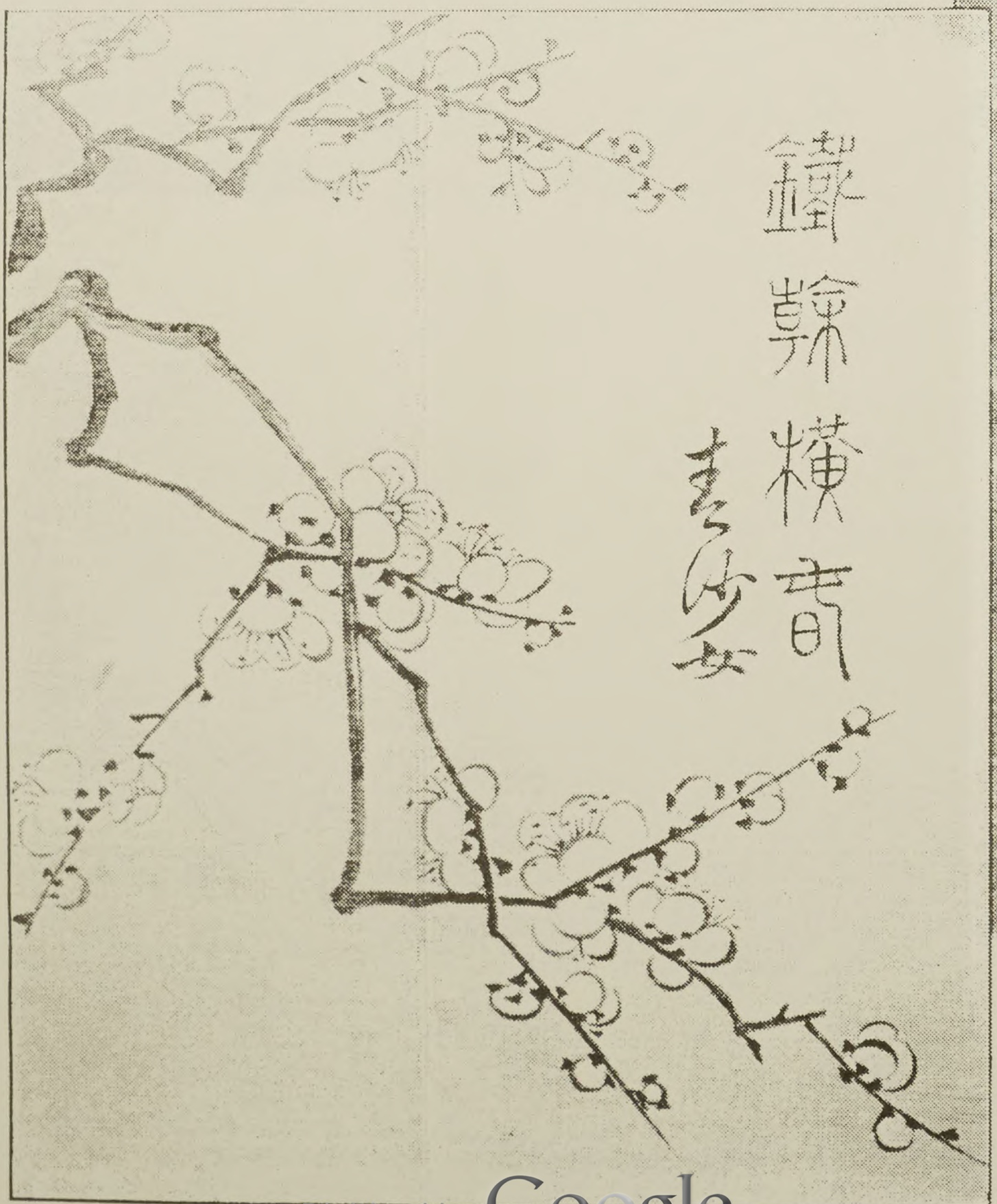
東京
馬喰町二丁目

發賣本舖
長瀨富郎

（特電話浪花九二二）



水戸烈公夫人登美宮御歌



立原春沙女史の圖



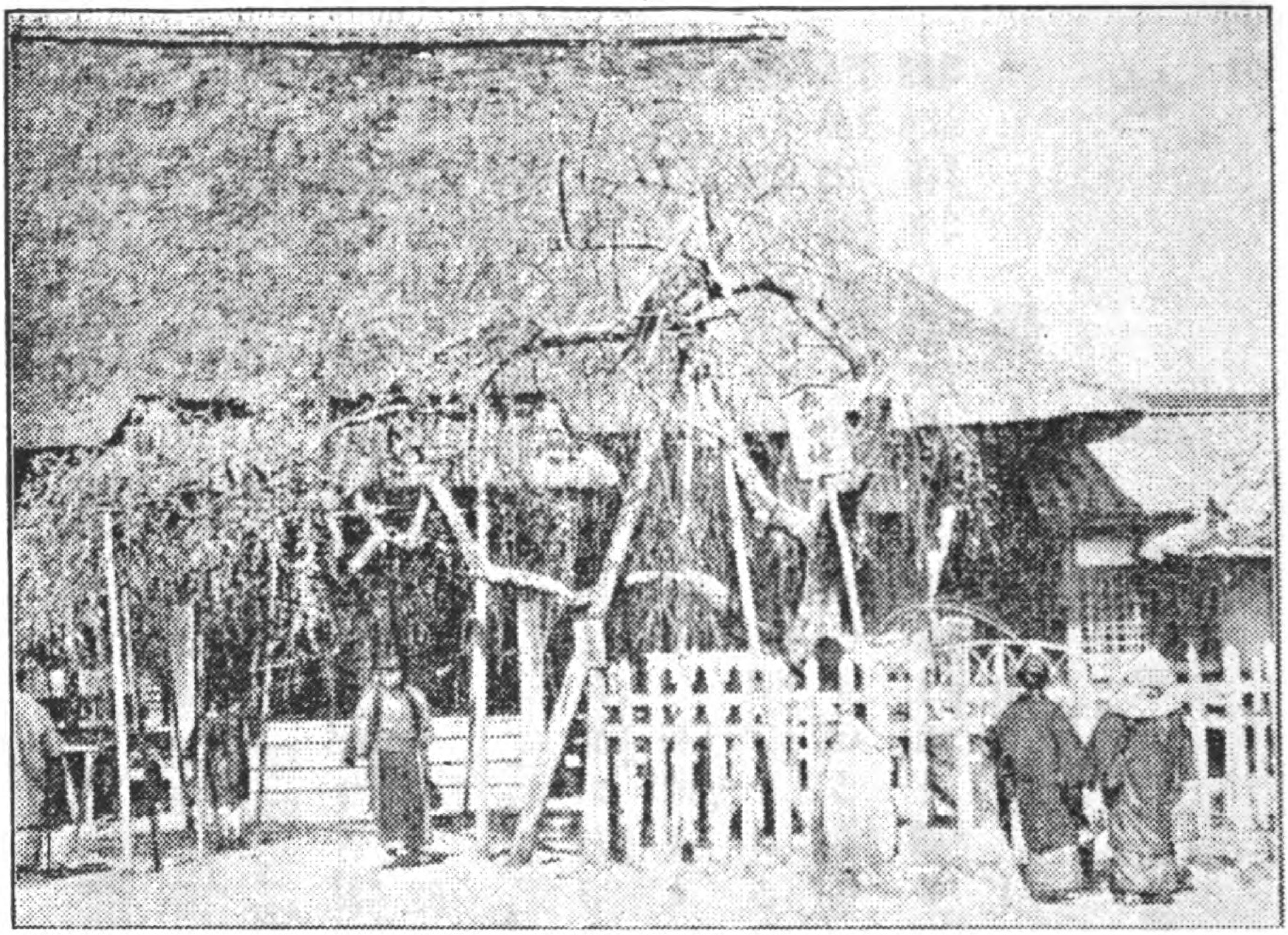
愛敬女學校長棚橋絢子刀自



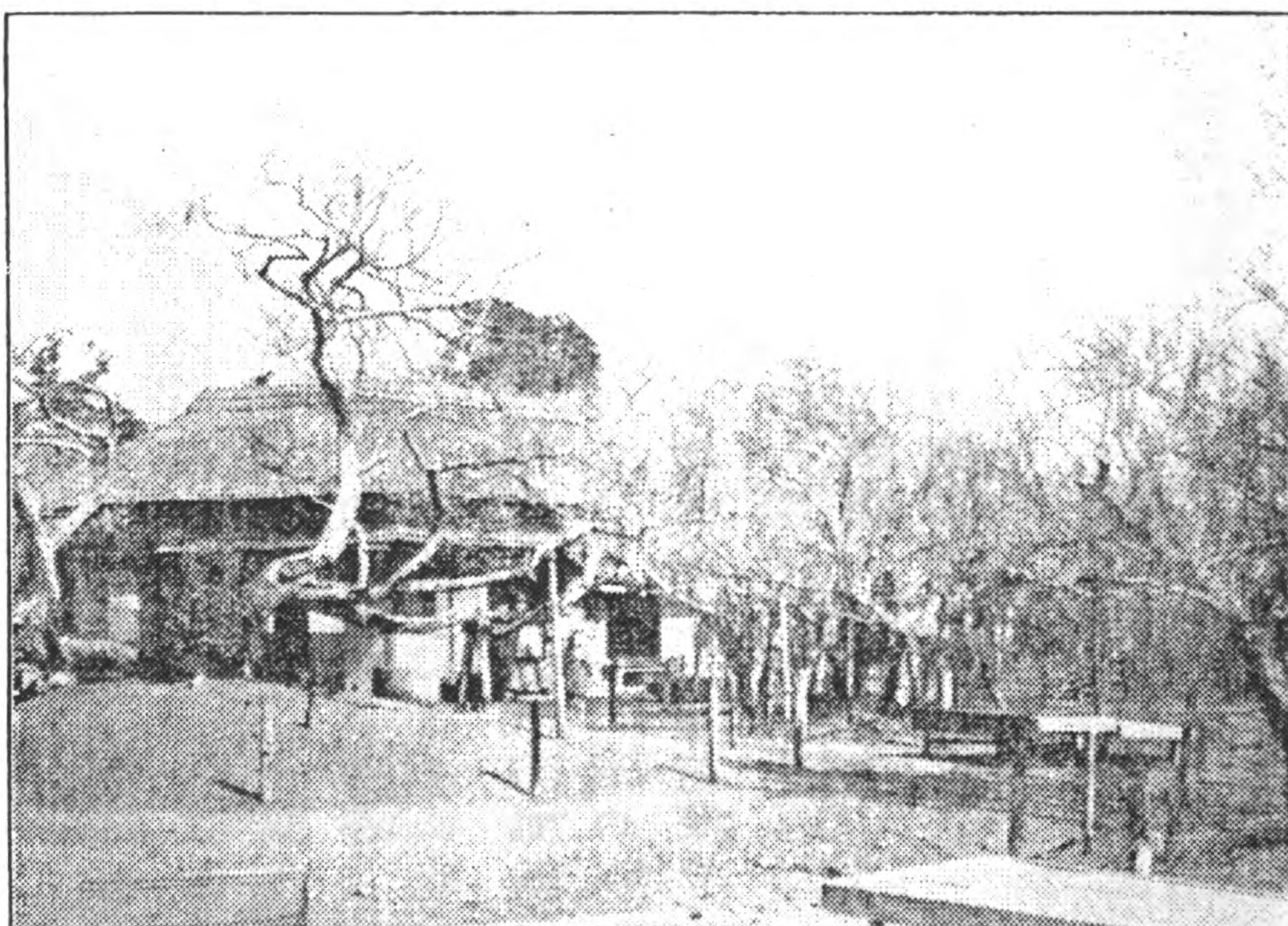
東京女學館講師國分操子刀自



女子高等師範學校教授武出錦子刀自



杉田湘水梅



小村井江東梅園

婦人服の改良に就いて

我邦舊來の婦人服は、衞生上より觀るも經濟上よりも見るも共に不完全にして、斷然改良を施し輕捷便利のものと爲さゞるべからず。但し其形式に就いては、我國古風の上衣下裳の製を折衷すべしと云ふ者あり、全く歐米の新式を採用せよと主張する者あり。其他幾多の區別ありと雖も、速に改革せよと言ふの一事に至つては、萬口一齊復た異議を其間に挾む者なし。抑、斯くの如く人々舊式衣服の不便不利なるを感じ、急に改良すべきことを充分に知り居るに拘はらず、其實行如何を觀察すれば、纔に女學校の一部に筒袖袴の行はれ居るの外一も見るべきあるなく、其筒袖袴も概ね學校に通學する間のみにて、歸宅の後は、長袖緩帶の舊樣に返り、家内に在りても猶新式の服裝を爲し居る者は殆ど之れなし。女服改良の前途茫乎として實に望洋の嘆あるなり。斯く改良實行の遲々として一向に捗取らざる者は、全く社會の上流に居る貴婦人諸氏が實行に熱心ならざるに因る。上流社會は

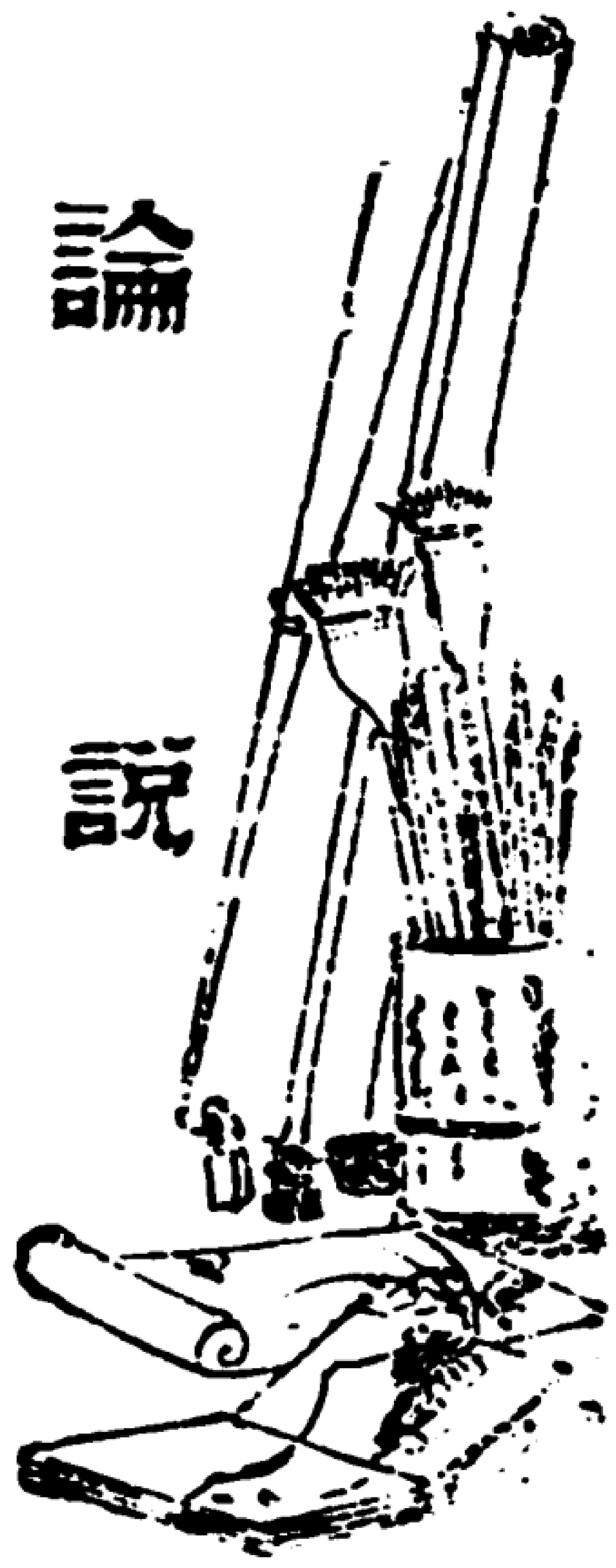
何故に改良服の實行に熱心ならざるか、是も亦故あり、其概略を左に述ぶべし。我國從來の女服が最も不便不利なる點は、兩袖長くして手の働きを自由ならざらしめ、帶の巾廣く且つ其質硬く、腹部を緊しく束縛して腸胃の働きを妨げ、裾長く歩行の際足にまつはりて動作を活潑ならざらしむる等に在り。されば此服の爲めに、最も不利益を感ずるは中流以下の勞働社會にして、彼の終日安座して手も足も働かさず、一切の用事は、左右手廻りの下婢小間使を驅役して辨せしめ、家に在る時は雛壇の人形の如く、外出する場合には一二町の處へ到るにも、必ず馬車人力車に乘る上流社會に在つては格別に其不便不利を感ぜざるが故に、隨つて服制の改良に熱中し玉はぬものと思はる。然れども目今上流社會に最も缺乏せるは身體の強壯にて、之を中以下の社會に比較すれば著しき相違あり。到底同一の動作に堪へ得られざるものを多數と爲す。されば、彼の活潑の精神は強健なる身體に宿ると云ふ論法より推す時は、上流社會將來の運命をトするに難からずして、其健康の不良は服制の不完全なるに由來するもの多し。是に由つて之を觀れば、服制の不良に因つて將來永遠に不利不便を蒙むるの重且つ大なるは、中流以下にあらず

して、却つて上流にありと言ふも甚だしき不當の推定にはあらざるべし。慧敏なる上流婦人の最も深く注意し玉ふべき所ならずや。

此に於いて、吾人は社會上流の婦人に對し、速に衣服改良の大團體を組織し玉はんとを勸告する者なり。惟ふに我國の女服が、今日の如き長袖博帶長裾のものになりしは、一朝一夕の事にあらずして數百年因襲し來れるものなれば、今之を改めんには十二分の注意をなし、内外古今の女服の沿革を取り調べ、猶博識なる學者と深切なる醫士に諮り、衞生上及び經濟上より觀察して遺漏なき迄、周到完全なるを要すべし。是實に非常の大事業にして、中々少數人の智能と寡少の經費とを以て爲し遂げ得べきにあらず、上流婦人大團結の力に依つて始めて成功すべきもの、是吾輩が此に所見を陳じて上流婦人の一讀を請ふ所以なり。且つ今の女服は前にも言ふ如く、數百年因襲の久しき其實質、不良不完全なるに拘はらず、俗眼には優美にも高尚にも見ゆるを以て、今遽に和洋折衷の短かき上衣と袴とを取合せたる如きものに改めんとすれば、其形體の目慣れざるより、奇異の感を作す者あり。隨つて實行の最初に在ては、必ず非難の聲多かるべし。此の大障害眼前に横

はれる時に當つて、難關を排除して彼岸に達するには、中流以下の力のみを以ては成功頗る覺束なし。されば愈々新式の改良服にして適當完全なりとの議論一定せる後は、申すも畏こけれど、九重の上に迄御採用ある樣に願ひ度ものにて、平素皇室の藩屏を以て自ら居る華族を始め、一般上流社會は主として實行の責に任ぜられ度ものなり。上の好む所下之れより甚しきものあるは世事の常態なれば、苟も上流にして此の決心あらば、改良服の一般に行はるゝは至つて容易なるべしと信ぜらる。

和樣女服の改良せざるべからざるは、本誌前號に掲載せる山根醫學士の論説に據て見るも明瞭にして、猶此事に就いては、諸大醫及び有識者の間にも其々意見ありと言へば、其形式の如きは、諸大家の所説を綜合して、討論講究せし上ならでは採否を決し難かるべく、されば此の大事業を成功するの基礎として、先づ上流の貴婦人令孃間に衣服改良實行會といふ一大團體の速に組織せられて、其調査に着手あらんことを望む者あり。



論説

女子教育に就いて（承前）

高等師範學校長　嘉納治五郎

前に述べたやうな譯であるから、女子には、女子にして最も適當に仕遂げられ得べき貴き職分がある。勿論或女子が、普通男子の執る職務に從事するやうな場合のあるも宜からうが、大體に於いては、男子は男子に適する職務を執り、女子は女子に適する職務を執るが宜いのである。女子は內向きの事をするが適當であるからとて、往時男子が、女子を下婢の如く取扱つた時のやうな事をさせるが宜いと言ふのではない。それ故女子は、多く內に居つて職分を盡すからとて、其職分が、男子の職分に比して賤しいと云ふ道理はない。固より女子にも、相應な交際の必要がある。男子の行く所に行く要用も生ずる。其尊卑を論ずるときは、別段に違ひのある譯はない。唯、平素爲す事の種類が、多數の人に就いては違ふと云ふだけである。其爲す事の種類が違ふから、女子のする事が卑しいと云ふことは、甚だ間違つた考である。男子の職業の中にも、學者抔のすることは、稀には飛び廻つて遣らねばならぬこともあるが、大概は家の內に居て、學理を攻究するとか、事實を調査するとか、材料を蒐集するとか、子弟に敎授するとか云ふやうなことであつて、眞に俗眼には花やかで無い。軍人の如きは、多數の人を統御し指揮し、或時には、數萬の兵を率ゐて出陣し、戰勝の時は大人氣で世人に歡迎せられる。その仕事は花々し

く見ゆる。之に比すると、學者のする仕事がミである。左らばとて、學者が多く内に居て仕事をするから卑しくあり、軍人は外に出て兵を指揮し、その仕事が目立つから尊いと云ふ理屈はない。其尊いと卑しいとの區別は、其職分を盡す仕方とその結果如何にある。軍人にして多數の兵を指揮する力が無く、一生少數の兵の指揮者たるに止まつたならば、軍人として其位地は卑しい。學者となつても、唯徒らに書物を見て居るだけで、新しい研究も爲さず、有益なる著述も爲し得ず、學生を敎へた結果も惡るければ、その學者の地位は矢張卑しい。それだから尊い卑しいの區別は、その仕事の結果の大小だの、その仕事に從事する人の責任の大小から生じて來るのである。女子は男子よりも、多く内に居つて仕事をするが宜いと云ふのは、學問をするに適した人が軍人に成らずして、學者となつて内に居つて研究するのが宜いと同じ譯で、多くの女子は、内に在つて仕事をするに最も適當なる性質を持つて居り、斯くしてこそ、始めて、其人にして出來得べき最大の働きが出來るのである。又、一身の眞の幸福も得られるのである。それ故に内に居つても、女子の眞正の本分を盡して居つたならば、其女子のする事は、卑しくない尊い。唯、家には在れども、自分の家の取締も出來ず、子供の母としては子供を能く躾ける事も出來ず、夫の妻としては、能く夫を助ける事も出來ぬ。斯の如き女子は、妻として母として一家の主婦として、雇はれた下婢のする仕事以上のことは出來ぬと言ふても宜い。世の多い女子の中には、日本從來の女子は、卑屈であると言ふて、唯男子の所作を眞似、尋常の男子でも出來得る程の事を得爲さぬくせに、唯男子の眞似をしたばかり

で、女子の位地を高めたものと心得て居る者もあるやうである。さう云ふ女子は、往々、女子にして始めて爲し得べき貴重なる職分を怠つて居る。其結果は自らも幸福は得られず、自分の夫も幸福を得られず、子女の敎育も自然等閑に付せらるるやうな譯で、一家團欒の樂みは到底得難い。夫をして家事に心を勞せしめ、其職業に全力を盡すことを得させない。又、子女に適當なる發達を得させず、其天性に最も適當なる職業を執らしむるやうに指導することを怠る。是は決して一家の幸福を增し、國家の富强文明を進める方法ではない。故に予は、特別なる女子が、普通男子の從事するやうな職務を執ることを非難せず、幾分の女子が、或る種類の敎員、その他特に女子に適する職務に從事するを賛成し、又或る女子が、一生獨身にて暮すも妨げなしとは考へるが、大體に於いては、女子は結婚して夫と共に家を成し、良妻賢母として其職分を盡すを、女子の爲、殊に今日の日本の女子の爲、最も貴きことゝ考へる。隨て女子の敎育上、女子に其天職を知らしめ、これを盡さしむる爲、必要なる心得を授けることを怠つてはならぬ。世の自己の地位を高めんとて、思慮なく徒にさわぐ女子が、却つて自己の不幸を招き、國家の不利を招きはせぬか。從來の女子の狀態を氣の毒と思ひ、女子の爲同情を寄する男子の中にも、深き考もなく喋々し、却つて女子を不幸に陷れるものはないか。眞に女子の爲を思ひ、國家社會の爲を考へるときは、今日より、それ等の點に大に注意を要することゝ思ふ。

（完）

我邦女子教育は如何なる主義方針に據るべきか

新潟縣高田師範學校長　阿多廣介

我國の女子教育の問題に就いては、如何なる主義方針を執つたが宜いか。是は今日の教育社會の問題である。即ち、我が國從來の女德を基にして、社會の進歩に伴ふべしと云ふあり、和洋を折衷すべしと云ふあり、儒教主義は根底より改革し、新主義を建設すべしと云ふあり、又、西洋流義に由つて、教育して往くべしと云ふもあり、或は、全然古風の女子教育主義を持つて居る人もあらう。

我輩が考ふるに、今日の我が邦の女子教育に付いては、先づ小學校の方は、大に就學を奬勵せなければならぬと云ふ事は格別必要であるが、其他は男子の教育と同樣に、教育を實用に適せしむるとか、義務年限を延長するとか、體育を奬勵するとか、云ふ如き問題が必要ありと信ずれども、特に女子丈け、大に改革せねばならぬと云ふ箇條を認めぬ。即、現在の教育法など改良進歩せしめて往つたら、差支無からうと考へるが、茲に第一解決を與へなければならぬ問題は、高等女學校以上の女子教育に於ける、今日の疑問を解決すべき必要ありと信ずる。高等女學校以上と云へば、即、其家庭は中産以上の資産を持つて居つて、體格や能力も中等以上のものでなければならぬ。即、我が邦未來の上中等社會の中堅たるべき婦女子を養成する所である。之れは全國に於いて、各縣に一校以上は設立されつゝあるが、實に今日は、其教育法を確立すべき大時機なるに、校長たるべき人、教員たるべき人に供給が少く、從つて研究の餘力なく、而して、其子女の父兄や社會が學校に需むる

注文は、前述の如く多種多樣であつて、大に手腕ある人物を要するのである。然るに現在の校長教員には、斯る人物が乏しい。大方は五里霧中に進行しつゝあるものであると云ふて宜しからう。されば教育者は、大に研究論難して、此問題を解決せねばならぬ事と思ふ。吾輩は女子教育に付きては、經驗も見識も淺薄のものであるけれども、聊か愚見を述べて見やう。其れに付いては、彼の益軒先生の言はれたる女子の四德、即ち、婦德、婦言、婦容、婦功、此の四つを基礎として論じたいと思ふが、益軒先生の女子教育法を今日實行して適當であるかと云ふに、其れは不適當である。併しながら、女德を論ずる上に最も適切なる分類であつて、其の根本は決して動かぬ事を思ふから、之れを基礎にして、理に當り勢を審かにして、世の進歩に伴つて研究したならば、我が國情に照して尤も容れられ易く、行はれ能ふ事と思ふ。

例へて見れば、婦德と云ふことは、益軒先生の如きは所謂女大學流で、婦人は貞節を第一として靜肅を保ち、決して出過ぎると云ふやうなことの無いのが主眼であらうが、今日に於いても、貞淑でなければならぬと云ふことは勿論であるけれども、女子は二夫に見えずなど云ふ事は、人情に於いて絕對に是認することは出來ぬ。即ち一夫一婦は文明社會の定論と云ふても宜しけれども、夫が早世したる場合、離緣になりたる場合の如きは、穴勝ち杓子定規に二夫に見ゆるべからずとすべきものでもあるまい。又昔の婦人の樣に引込思案をして、只溫順いと云ふばかりが、今日の婦人の性質に適當して居るとは思はぬ。今日は學問もあり、見識もありて、夫の相談對手となり、家事を整理し家業を助け、子女を教育し婢僕を使役し、婦女のなすべき

社會事業に盡力し、交際場裡に立ちても負を取らない丈けに、力量を備へなければなるまい。

婦言と云ふは、言詞を尠くすると云ふことであるだらうが、成程多辯は、多くは人を誹謗したり、己れを自慢したり、誤謬を傳へたりして、輕率の基になることであるからして、人として宜しく無いことで、單に女子ばかりではない、男子でも餘り言詞が多くして輕々しき者は、世の譏を受けることが少からぬのであるからして、女子に於いては、一層言詞を愼まなければならぬことである。併しながら、言ふべきことは謂ひ得るだけの見識と辯舌は、婦人と雖ども備へなければならぬ。即ち交際場裡に立つても、人に負けないだけの談話もしなければなるまいし、又、己れの意見を社會に發表するやうな場合にも、一通りの辯舌は持たなくてはなるまいと思ふ。

婦容と云ふことに就いては、質素にして清潔にし、野卑ならず華美ならずして、以つて夫に愛せらるるだけの容貌を整へ、他人に恥かしく無い、不體にならぬだけの服裝も着けなければなるまい。併しながら、我邦の服裝は、坐作進退に不便にして、體育上不都合なることは世論もあることにして、又、禮服や通常服に差別なきも、大に欠點であつて不經濟であるから、此點は、學校邊に於いて、研究して實行せねばならぬと思ふ。

日本女訓（未定稿）

川崎重陽

五十三、誠の心より、慈善を行はんには、他人の喜を、我が喜とし、本心よりこれを樂みて、いさゝかも、その報を望み、又は世の譽を求むる

ことなかるべし。これ眞の善行にして、陰徳といふも、是なり。古語に、陰徳は、耳鳴の如しといへり。これ他には、表れずして、たゞ、己ひとり、知るより、くるなり。かく、人には知られずとも、己が本心の樂しさ、これにまさるものあるべからず。これ、まさしく、天地神明より受くる褒賞あるべし。常に、心にかけて、之を行はゞ、心中おのづから、ゆたかに樂多くして、一家の慶も、これより生ずべきなり。

五十四、誠を養はんには、常に、言語を愼むべし。七重八重花さく草木は、實のよからぬが如く、人も、言葉多きものには、誠すくなし。さて、女子のことばづかひは、素直に、おだやかにて、心をこめたらんこそよけれ。野鄙なる言語はいふも更なり、耳なれぬ漢語又は、流行の言葉など、ことさらに、用ゐるはよろしからず。言は、德の音なりともいへり。

五十五、誠の道に入らむには、過を改むるを、恥とすべからず。過を改むるたび毎に、次第に、誠に近づくこと、なほ、鏡の磨くに隨ひて、いよいよ、光を増すが如し。もし過を知りながら、之を改めずば、心の鏡、ます〳〵くもりて、誠の光は、つひに、消え失せぬべし。

五十六、我が心の誠を、物に施さんには、勤勉の功によらずばなりがたかるべし。諺にも、蠟燭は、おのが身をこがして、光を傳ふといへり。己一身の勞苦を輕んずるにあらずば、鎖小の事だも、成就することなかるべし。内を治めて、よき家風をたつべき婦女たるものは、常に勤勉の習慣を養はんこと肝要なり。

五十七、誠ある者は、みだりに、人を憎まず。たとへ、人、非理を以て、我にあたることありと

も、我は、わが誠をつくして、その人の心の改まらんことをねがふ心ばへあるべし。女子は、多くは愛憎の念強くして、物事に、偏頗ありがちなれば、常に、心を寛くして、我が、誠を失はざらむことをつとむべきなり。



近古勇婦百譚（一）

黒金子

美世

今回より徳川幕府時代の勇婦、百人の御話を致します。其の第一に申上げまする美世と申す者は、

唯今の東京、元の江戸青山百人町同心某の娘で、本多中務大輔政武殿の奥方附の女中でございます。此の奥方は、備前少將綱政卿の御息女で、心猛く力量も人に勝れて、至極、武張つた事が御好でございました。或時、側仕の女中を御召抱へ遊ばされまするにより、數人御目見えを致しました。中に此の美世が、奥方のお目に留まりまして、あれを抱へよとの仰で、女中頭の局を以て、何ぞ申立てにする藝道にても之れあるかと、お尋に相成りました。其の時に、美世、私は別に何の覺も之れなく、只、元結をあげ申す事より外には御座なく候と、お答を致しましたから、局は、頗るあきれまして、女の元結をあげるは普通の事だから、之は申立てにはなり難いと思ひながら、有の儘に奥方へ申上げますと、夫は善い事である、早速召抱へよとありまして、給金は十五兩に、五

人扶持が、お家の定めであるが、美世は、見處があるからと云ふので、二十兩に七人扶持下されました。一體、御殿女中と云ふ者は、餘り根性のよろしくないものですから、之を聞いて、老女初め、皆々大に笑ひ、世間に藝の申立ても多くあるに、元結をあぐるを申立てに、奉公を働くは、珍敷き事である。夫を又、高切米出して抱へる御主人樣も、お物好の事であると、下々の婢女迄不審を致しました。奥方は一切御構ひなく、美世に支度出來次第に、屋敷へ引越す樣にと、御沙汰がありまして、軈て其の日になると、迎の乗物に、脇添の足輕、中間等を遣された。其の時、道具の品品を書付けて、奥付の役人へ渡した。其目錄は、簞笥一棹、長持一棹、葛籠二荷、小袖櫃一つ、跡付二つ、兩掛、挾箱一荷、長刀一振、其の外、書付に引合せ、役人は之を受取りて、其の部屋へ遣しました。之を見た女中共は、又も口々に、扨々元結の申立てで奉公するには、猿引道具のいるものである。と嘲り、又、長刀持たす事、いらざる僭上者と笑ひました。間もなく美世がまゐりまして、乗物から出る處を見ますれば、下げ髮に衣裝美々敷、徐々と御廣敷へ通る其の後から、兩人の下女一人は、扇子箱、一人は袋入れの兩刀を持ちて、付添ひて參ります。口の惡い下女端下は之を見て、女の入らざる大小を持する事よ、用に立つたる覺えも有るまじきにと、申して笑ひさゝめきました。然るに、元來美世は、發明者でございますから、御奉公に私なく、傍輩の氣性を能くのみ込みまして、程能く勤めて居りました。

扨、或年の夏、女中が、皆衣類の土用干を致します。其の時美世も、御休息の間へ虫干致しました。見ると部屋の間には、小袖を掛け其の脇に蚊

帳をつり、具足を飾り、刀、脇差、小合口、九寸五分、長刀、半弓等が置いてあります。女中共之を見まして、如何樣、稀有な女であると笑ふもあれば、又實に賴もしき心得であると感ずるものもありました。此の事を奥方が聞かれまして、さうあらうと思ふて召抱へたるに、推察に違はず、天晴武勇の女であると、大層のお喜びでござりました。

或時、奥付役人の何野五郎八と申す者、亂心いたしまして、夜半に大刀を拔きて、お廣敷へ斬込み足輕仲間等に手傷を負せ、長局へ入り、奥向へ踏込まんと致しました。元來此の五郎八は、聞ゆる手利でありますゆゑ、婦人の力には及び難く、皆、膽を消し、狼狽へ騷ぐ計りで、捕手の士、足輕等追々集りましたけれど、勝手は知れず、殊に、燈光がありませんで、廊下の挾い所で、身體の働きが思ふ樣に成りませんから、唯、五郎八何くにある、出でよ〳〵と、聲々に罵り噪ぐ計りで、誰あつて部屋〳〵へ踏込み、搦め取るべき者なく、徒に時刻を移して居りました。處へ、奥の方より、美世は、騎馬提灯を腰に差し、長刀を提げ、何者なれば夜中に及んで、御寢間近く切入る事、天命を知らざる大惡人、立去らぬかと叱りました。五郎八之を聞いて、推參ある女もある者哉、只一打にと切つて掛るに、美世は、腰の提灯を廊下に掛け置き、長刀の鞘を脱して五郎八と渡り合ひ、込手、薙手、一文字、水車、廊下は狹く軒は近し。前後を見くばる身の働き、互に打合ふ刄の光りは、暗の螢の亂れ飛ぶ樣に見えましたが、美世は、透間を狙ひ、手早く長刀を取直し、石突で、五郎八が兩眼の間を突きました。猛り切たる五郎八も、眼眩みよろ〳〵とよろける所を、透さず

両足を拂ひましたから、俯伏に仆れる其の時、美世は聲を掛け、狼藉者は仕留たり、折合つて搦め候へと呼はりましたから、足軽數多走り寄つて、繩を掛ける其の内に、夜も明けたる故、表へ申出て役人へ渡しました。此の時、中務大輔殿御夫婦の御喜びは、一通りでありません、我等が目鑑違はず、器量ある女、古の巴、又は義經が情を懸し靜も斯やと賞せられました。其の後、美世をお側へ召されまして、其の方器量ある事を見て、我等迄も悦ばしい。定めて、劍術の心掛けもあるだらうとのお問ひに、初の程は、押隱して居りましたが、段々懇ろなる仰に默止し難く、私、幼少より、無外流の兵法を習ひましたと御答へ申す。さこそあるべしとの事で、益々、首尾がよろしい。

又或時、お馬場に於いて、政武殿御夫婦、責馬をなされました。其の處へ、美世を呼出して、其の方も一馬場乗り候へと仰せがある。畏まつて候とて、馬乗り袴を着し、地道を六七返乗り、夫より驅を追出し、兼ねて用意致したものと相見え、尺長一枚取出し、能程に折疊み、元結に致し、上げ捨て〳〵二三返の驅の内に、殘らず、元結あげを致しましたゆゑ、主人を始め、傍輩の男女一同、偖は云ひ立てにしたる元結は、あれであつたかと、彌々驚き感じました由にござります。其の後、知行百石を賜り、同家中の堀川主水と申す者の妻に相成り、子孫長く榮えたるよしにござります。能ある鷹は爪を隱すと申す樣に、平生は何事も謙遜に致して、扨、緩急の場合には、男も及ばぬ働きを致します、人は、誰も、斯くありたきものでござります。

棚橋絢子刀自の畧傳（口繪參看）

現今女子教育家の第一流として、德望世に高きもの、女史を以つて最となす。溫厚なる容姿、靜肅なる擧止、人に接するや辭を低くして親切丁寧到らざるなく、後進を導くに、專ら女德の涵養につとめ、孜々として怠らず。皆その德風に感化して、うやまひ慕はざるものなし。かつ凡ての婦人會、慈善會等に力を盡し、以て、女子敎育の進步に偉大なる功績を顯す。蓋し、個人として完全なる女德をそなへ、事業として、何れも人人の標準たらざることやある。即ちこゝに刀自の略傳をものし、普く諸媛にこの活きたる模範を示して、一は以て、各自反省の資とし、他は以て諸媛のこれに則らむことを望むや切なり。（記者誌す）

棚橋絢子刀自字は文遠梅香と號し、後梅巷と改む。大阪の人、牛尾田庄右衞門の長女なり。其先北畠氏に仕へ、顯家戰死の後民伍に降り、後、世々酒賈たり。祖八十平幽綾と號し、讀書を越高洲、書法を森祖仙、歌道を有賀長収に學び、父庄右衞門も亦高洲の門下にして、書を能くせり。刀自父祖の性を受け、六歲習字及八算見一を授けらるゝに、習練幾ど大人に異らず、人皆之を奇とす。八歲始めて音曲を習び、傍ら裁縫の業に就く、十三歲心學道話を聽き、孟子無名の指云々に至り、恬然として覺る所あり。窃に思を典籍に馳す。然も京阪の俗女子の讀書に從事するを疾む。父母故を以て固く之を禁じ、數々請ふに及び、僅に大學の句讀を授け、且警めて曰く、女子の書を讀む者、往々驕慢にして人を凌ぐ、最も疾むべしとす。汝能く之を愼み、人をして讀書生たるを知らしむる勿れ

と、刀自因りて昧爽人の未だ起きざるに當り、窃に父に就きて章句を習へり。居ること數月、父繁忙を以て之を謝し、授くるに經典餘師を以てす。刀自則ち毎日昧爽を以て天滿宮に詣で、夜々燈下に就きて之を繙き、畧四書五經を通覽するを得たり。已にして以爲らく、余家政に從事するの傍ら、幸に聖賢の遺訓一斑を窺ひ得たりと雖も、未だ能事の口を糊すべき者を得ず、抑も、俚俗女子は三界に家なしと卑む所以の者は、一般女子に獨立糊口の技能なきに由るのみと、則ち力を裁縫に用ゐて、他日に備へ、又、自から其身一切の事を處理し、上は頭髮より、下布襪に至る迄、一も力を人に借る所なし。是に於て、父母初めて之を異とし、特に弟に從ひて、奥野小山の門に入るを許し、傍ら書道を三瓶信庵に學ばしむ。實に絢子十六歳の時なり。會々美濃の人棚橋大作、其父の二本松藩倉邸の留守たるに從ひて大阪に來往し、小山と善し。大作名は嘉忠。字は伯實松村と號し、洛閩の學を好み、傍ら詩歌を嗜む。不幸壯歳眼疾に罹り、陰に良妻の典籍を代讀すべき者を索む。小山之を哀み、爲に刀自を媒す。刀自時に年十九。亦窃に商賈の事を厭ひ、士人に嫁して讀書の餘暇を得むと欲す。是に於て、父母稍々違言ありと雖ども、事遂に成り、琴瑟調和讀書筆硯に從事すること玆に三年。倉邸の廢絶を以て美濃に移住せり。此時に當り、夫家數々世故を經て、家道大に衰へ、擔石の蓄殆ど空し。刀自都人士の女を以て富家に成長し、薪炊杵舂の務を厭はず、傍ら句讀を地方の子弟に授け、又失明の夫に讀書の樂を廢せしめざりしが、其の一男一女を擧げたる比ひ、世は維新の世變に際會して、夫家の二弟皆な志士の間に往來し、家產益々墜ちて、復如何ともすべから

ざるに至り、家を提げて、尾州高田村の親戚に寄寓し、幾もなく居を同國一宮にトせり。是より先、大作美濃を去るに當り、人に托して餘す所の田宅を賣りしが、不幸にして其の奪ふ所となり、囊底復一錢を餘さず。是に至り、刀自其衣奩を鬻ぎて僅に百餘金を得、以て不時の備へとなし、子弟の教授と、他人の衣裳裁縫とに由り、得る所を以て一家數口を糊するの資となす。適々東光寺の住職、豐田壽湛師大作に過り、其狀を見て、大に之を憫み、人に告げて先に失ふ所の金若干を還さしむ。刀自大に喜び、前の百金と合せて、之を某富商に托せむと欲す。富商累の及ばむことを恐れ、乘馬下し近くべからずと稱して受けず、刀自之に因りて、益々發奮長子を大阪の實母に托し、日夜家政を經營し、傍ら夫に侍讀す。居ること三年。長子祖母の死を以て家に歸り、其翌年苅安賀の富豪關戶某刀自を招致して、村内の子弟を教授せしむ。刀自此時を以て第三女を擧げ、幾もなく苅安賀を罷めて一宮に歸住し、次で人の勸を以て、名古屋巾下の小學校に教授す。かくて一宮に在ると前後六年。零丁孤苦の餘糟糠だも口に飽かざるの時あり。勞役服せざる所なく、辛酸嘗めざる所なかりしが、晏如として人の堪ふべからざるに堪へ、人の忍ぶべからざるを忍び、少暇ある毎に、必らず其夫に侍讀し、闔家の經營兒女の撫育一も之を親戚故舊に仰がず。其の樂む所は、故舊の時に過りて、當世の事務を談論せるを傍聽すると、兒女の成育とに在りき。是に至り、家計稍支ふべきを致し、其後愛知縣の養成校を開き、小學教員の爲に師範科の講習を行ふや、刀自も亦與かり業を卒へ、職を上町の桃天女學校に奉ずる事となりぬ。已にしてその、長子一郎氏をして、東都に遊學せし

めむと欲す。監督の托すべきなく、學資の給すべきなきを以て、因循果さず、陰に以て恨となす。是より先、故ありて、愛知師範學校長伊澤氏と相知る。伊澤氏一日會々之に告げて曰く、今や官、女子師範學校を東京に創め、女敎員を四方に募れり。之に應ずるも亦可ならずやと、刀自大に喜びて、之に周旋を托す。未だ幾ならず、氏任に東京に歸り、刀自の事を小杉女子師範學校長に告ぐ。小杉氏則ち書を愛知縣令鷲尾隆聚に致し、刀自を召さむと欲するの意を陳ず。縣令謝して遣らず、且頗る事を密にす。刀自偶々之を聞き、以て吉川泰次郎氏に語る。氏時に愛知英語學校に長たり。故ありて刀自を知れり。則ち爲に縣令に說き、固く其の必らず遣るべきを論ず。縣令拒む能はず、明治八年十月を以て、遂にその職を解き、東上を許せり。こゝに於いて家を提げて先づ大阪に至り、其末女を生家の姉に托し、其餘と共に東京に來仕し、十一月拜せられて師範學校の訓導となりしが、六閱月にして福澤諭吉翁の周旋に由り、小笠原女公子を其家塾に延くの約を爲し、職を辭して三田に卜居し、公子幷に福澤小幡諸氏の女兒を敎育せり。居ること二年、女公子故ありて家塾を去る。則ち出でゝ學習院の敎官となり、傍ら岩倉家の女公子に侍講せしが、三年餘にして之を辭し、專ら句讀を家塾に授け、又出でゝ福澤、山尾、吉田、富田等諸家の子女に句讀裁縫を敎授せり。此時に當り、長子一郎氏業を大學に卒へて文學士となり、職を豫備門及東京府中學に奉ず。家計復憂ふべき所なし。而も刀自、幼より勞苦に慣れ安逸を喜ばず、明治二十年、富田村田以下十數氏と計りて、金聲小學校を芝公園內に起し、良家の子女を集めて、敎育の責に任じ、傍ら成立學舍、女子部

修身科の教授を擔當せしが、一郎氏の郁文館を駒込に開くに及び、資力支へざるを以て、金聲小學校を閉ぢ、成立女學舍長中原貞七氏の東都を去るや、女子部を改稱して成立女學校となし、任に其校長に就き、専ら其維持發達に盡力せり。已にして明治二十八年刀自、乳癌を患ひ、切解治療の餘、身心疲勞して劇務に堪へず、則ち女學校長を辭して靜養を事とせる者一年。會々名古屋市に高等女學校設立の事起り、聘せられて其校長となり、拮据經營三年に垂んたりしが、紛紜ありて之を辭し、京阪諸地方を漫遊して京に歸る。未だ幾ならず肺尖病に罹り、靜岡鎌倉の諸地に靜養して稍々癒ゆ。一郎氏即ち明治卅三年十二月を以て、爲に還暦の壽筵を駒込千駄木の有尾邸に開きしに、相會する者故舊知友無慮數百人、歌頌も亦數百に下らず、人以て榮となせり。今茲に刀自歳六十四、體力猶は健、愛敬女學校に長として、淑德女學校の修身教員を兼ね、傍ら婦人弘道、大日本婦人教育、愛國婦人、東亞佛教會女子部、東西本願寺の婦人會、福田會女子部等、十數會の間に周旋して倦まず。豁達の性あるに非ずんば、何んぞ斯の如きを得むや。刀自一男二女を擧げ、男は則ち文學士一郎氏家を継ぎ、長女田豆江孃嫁して夭し、少女下枝孃工學士横河氏輔に嫁す。各々成立する所あり。之を要するに、刀自家を治むるに法あり。子を育する私愛なく、嚴を以て主となし、能く舅姑と失明の夫に事ふ。其の夫家に於ける翅に内助のみならざるなり。讀書に至りては、専ら得心行身を以て務となし、記誦を事とせず、傍ら國歌を近藤芳樹、鈴木重嶺二翁に學び、深く風雅の趣味に通せりと云ふ。

故英國女皇ヴィクトリヤの傳（承前）

宮館さだ子

ヴィクトリヤ女皇傳は、博く各種の著書及び雜誌等に據り、數十回に渉りて掲載するの見込なりしも、近時、故女皇に關する史傳逸話等の、本邦人の手に編纂せられたるもの、坊間其種類少なからざるにより、女皇傳は、向後一回を以て終了し、其次よりは、未だ多く本邦人に知られざる泰西閨秀の傳をものし、新に愛讀者の諸媛に見えんと欲す。

女皇の戴冠式

女皇の戴冠式は、千八百三十八年六月二十八日を以つて「ウエストミンスター」寺院に擧行せられぬ。内には貴紳百官綺羅星の如くに列り、外には四民歡呼の聲潮の如くに起り、大僧正恭しく王冠を捧げて、之を女皇の頭上に戴かせまゐらせたるの時、女皇の顏色は半ば蒼白を帶び、惴々焉として之を受けさせ給ひき。嗚呼、一寶冠の重きを怛れたる女皇當日の御心こそ、他日一國の重きに任じて違算なく、遂に克く、今日の隆盛を來したる原因にてありけれ。

參列の貴紳百官交る〳〵起つて、女皇の前に進み、恭しく忠義の誓を爲しぬ。老頽のロール卿亦其中に在り。將に階を昇りて玉座に近づかんとせしとき、誤つて躓き倒れしかば、女皇は倉皇しく起り扶けんとせしも、卿自ら身を正しければ、其儘に止み給ひき。されども、女皇は卿の老體を煩はすに忍びず、御座を離れて卿の前に進み行き、龍顏いと美はしく、其宣誓を受け給ひき。此優しく女らしき德性は、當時の好逸話として喧傳せら

れ、國民をして此妙齢の新女皇に對し、更に一層欽仰の念を深からしめたりき。

英國の史中絶えて見ること能はざりし此莊嚴なる盛儀は、午後三時半を以つて終了し、女皇の鹵簿は、途上歡呼の聲に送られて「バッキンガム」宮に還幸ましまし、折り偶々女皇は、其愛犬の頻りに吠ゆるを聞かせられ、直に走りて之を抱き給ひぬ。「ウエストミンスター」寺院に於いては、新に大英國王の寶冠を戴き、犯すべからざる威容を具へて、貴紳百官の臣從宣誓を受けさせ給ひたるの人は去て、「バッキンガム」の宮裡に、餘念なく其愛犬を愛でさせ給ふ。玲瓏玉の如き天眞の發揮に非ずして何ぞ。

女皇の公生涯　附其結婚

「ケンシントン」宮夢暖かにして、母公恩愛の下いと静けき一處女の生活を辿り來りたるヴイクトリヤ皇女が、俄に王冠嚴めしく、太陽の沒する時なしと稱せらるゝ大英國の王位に即かせ給ひたるは、實に此上なき身上の劇變なりき。女皇は此劇變と共に、直に其地位に伴ふべき十二分の威嚴と、獨立的精神とを發揮し給ひ、其公生涯に於いては、全く前日の優柔に似もやらず、飽くまで剛健の資を持し給ひたるが爲め、間々專斷自恃の弊に陷りたることなきに非ざりき。登位の初、政黨分立の渦中に捲き込まれたるが如きは、女皇の永き生涯中に於ける最大過失なりしも、賢明なる女皇は、忽にして其眞心より悔悟し給ひ、「年若き婦人の天眞を毀ひ、並に、人類自然の感情と愛とを害するものは、黨爭に如くものなし」とて、深く自ら戒めたりき。

然れども、女皇の其公生涯に於いて、勗めて剛健を持し給ひたるは、元より天稟の資性にては非ざり

し也。唯其王冠に伴ふが爲め、抂げて之を努めたるものに外あらざりき。千八百五十二年、ルイ、ナポレオンの佛國帝位に即きたるの當時、女皇は叔父王に書を裁して、「政治上の事は、日増に好ましからず相成申候。善良なる婦人としては此の如く剛健なる男子の事業を嫌忌すべきことは當然と存候」云々の意を洩らさせ給ひき。

即位の後、母公ケント公爵夫人は是迄の如くに、常に其膝下に最愛の皇女を引留むること能はず、國王としては、其母と雖ども之に加ふること能はざることなれば、假に掌中の珠を取り去られたるが如く、轉た寂寥の感に耐へざりし折柄とて、窃に、皇女の餘りに雄々しくなりしを情れなく思ひき。されども、一婦人としての女皇、母に對する子としての女皇は柔順羊の如くにして、母を愛するの念は、終始渝りたること非ざりし也。

女皇の初めて、其從弟「サクセ、コブルグ」のアルベルト親王に會見したるは、千八百三十六年にして、當時親王は「ケンシントン」宮に客寓せしこと一ヶ月許、花晨月夕相携へて賞遊を倶にせしが、會見の當初よりして、此瀟洒たる一少年と淑女との間に、最も切實なる戀愛の情を萌したりき。當時、親王と皇女とは共に十七才の同年にして、親王は、尙修學の時代にありき。翌年、親王の學術的遊歷の途上に在りし時に於いて、皇女の身上は一大劇變は加へられ、處女的生活より、一躍して威望赫々たる國王の位に上りぬ。優柔にてし處女らしき天稟の眞性を抂げて、剛健の態度を取らざるべからざることゝはなりぬ。されば、叔父君白耳義王の、屢々書を女皇に送りて、結婚を勸めまゐらせしも聽き容れ給はず、自今四年の間は、一身上の私を顧みるに遑あらざる旨を回答し給ひき。

唯夫れ、神聖なる愛の心は、總ての他の感情よりも強く、女は國王としてよりも更に大なりけり。千八百三十九年の十月アルベルト親王の再び英國に來りて女皇の面前に立ち給ひけるとき、宛然がら春風の薄氷を融和するが如くに、一切の他の感情と人爲の尊嚴とを壓し悉して、愛といふ無冠の帝王の前に跪拜し、茲にめでたく偕老の契を訂し給ひぬ。

家庭

大婚後に於ける女皇の家庭は、眞に陶然として春の海の如く、一般國民に對して、摸範的家庭の實例を示し給ひき。女皇は、一意皇婿に對して貞順ならんことを期し給ひ、世上幾多の新婦の如くに、唯己れの好尚を主として、獨り重きを一家に致さんとするが如きは、女皇に於いて些かも見ることを能はざりし也。女皇は、其皇婿の母國日耳曼を離れ、其兄弟親朋に訣れ、其邸宅を棄て、飄然として遠く英國に渡來したるは、其結婚に對して過分の犧牲を供したるものと信じたりし也。此厚意に對しては、女皇の出來得る限りに於いて、多く酬ゆる所なかるべからざることを、常に軫念し給ひき。されば、女皇は、皇婿をして毫も其身の異域に在ることを感ぜざらしめ、常に其心を悅ばしむるが爲には、全く其己れを捨て、皇婿の嗜好々尚に投せんことを努めたるのみならず、終には、自からも之に同化し給ひたりき。(未完)





家庭

實驗家庭の教育（三）

東京感化院長　高瀬眞卿

不完全の家庭より出る不良の子供のお話は、大略右の通りでありますが、右は實驗上の二三の例を擧げた迄の事で、數百の例を悉くお話すると繁雜いたします、先づ此位にいたして、今日は、家庭と學校との關係に就いてお話を致す事にします。

さて、小供を學校へ出して置く父母の考と云ふものは、どう云ふ考を持つて居るかと言ふに、只だ、學校へ出して置けば、自然と立派な人物になるものと思ふて居る。またある父母は、小供が學校へ出て居る間は、嚴重なる敎師の前に居て、一日窮屈な思ひをするから、家へ歸つて、少し位吾儘をするのは致し方がない抔と、思つて居るものもある。また學校と云ものは宜しくない處で、自分の子供は學校へ出てから、惡い友達と遊んで、其より不行跡になりましたと言ふものもある。此等は間違つて居る。學校と一口に言つても、良い敎師の揃つて居る處もあり、一向監督の行屆かない處もあるから、一樣には言はれないが、兎に角、學校へ任せたのみで安心して居ると云ふが、親の不心得と云ふものであります。また學校は、子供が窮屈な思ひをするであらうと思ふも間違つた話、家庭に於いて吾儘に育つた子は、規則の下に檢束せらるれば、いくらか窮屈な思ひはあらうが、ソレが、將來の利益になると云ふ事を心付ぬと云ふは、親の了簡が違つて居るのでありませう。また、學校へ出てから惡友と交つて、だん／＼不行跡

棚橋絢子刀自の畧傳（口繪參看）

現今女子教育家の第一流として、徳望世に高きもの、女史を以って最となす。温厚なる容姿、靜肅なる擧止、人に接するや辭を低くして親切丁寧到らざるなく、後進を導くに、專ら女徳の涵養につとめ、孜々として怠らず。皆その徳風に感化して、うやまひ慕はざるものなし。かつ凡ての婦人會、慈善會等に力を盡し、以て、女子教育の進歩に偉大なる功績を顯す。蓋し、個人として完全なる女徳をそなへ、事業として、何も人の標準たらざることやある。即ちこゝに刀自の略傳をものし、普く諸媛にこの活きたる模範を示して、一は以て、各自反省の資とし、他は以て諸媛のこれに則らむことを望むや切なり。（記者誌す）

棚橋絢子刀自字は文遠梅香と號し、後梅巷と改む。大阪の人、牛尾田庄右衛門の長女なり。其先北畠氏に仕へ、顯家戰死の後民伍に降り、後、世々酒賈たり。祖八十平闌綾と號し、讀書を越高洲、畫法を森祖仙、歌道を有賀長収に學び、父庄右衛門も亦高洲の門下にして、書を能くせり。刀自父祖の性を受け、六歳習字及八算見一を授けらるゝに、習練幾ど大人に異らず、人皆之を奇とす。八歳始めて音曲を習ひ、傍ら裁縫の業に就く、十三歳心學道話を聽き、孟子無名の指云々に至り、恬然として覺る所あり。窃に思を典籍に馳す。然も京阪の俗女子の讀書に從事するを疾む。父母故を以て固く之を禁じ、數々請ふに及び、僅に大學の句讀を授け、且警めて曰く、女子の書を讀む者、往々驕慢にして人を凌ぐ、最も疾むべしとす。汝能く之を愼み、人をして讀書生たるを知らしむる勿れ

と、刀自因りて昧爽人の未だ起きざるに當り、竊に父に就きて章句を習へり。居ること數月、父繁忙を以て之を謝し、授くるに經典餘師を以てす。刀自則ち毎日昧爽を以て天滿宮に詣で、夜々燈下に就きて之を繙き、畧四書五經を通覽するを得たり。已にして以爲らく、余家政に從事するの傍ら、幸に聖賢の遺訓一斑を窺ひ得たりと雖も、未だ能事の口を糊すべき者を得ず、抑も、俚俗女子は三界に家なしと卑む所以の者は、一般女子に獨立糊口の技能なきに由るのみと、則ち力を裁縫に用ゐて、他日に備へ、又、自から其身一切の事を處理し、上は頭髮より、下布襪に至る迄、一も力を人に借る所なし。是に於て、父母初めて之を異とし、特に弟に從ひて、奥野小山の門に入るを許し、傍ら書道を三瓶信庵に學ばしむ。實に絢子十六歳の時なり。會々美濃の人棚橋大作、其父の二本松藩倉邸の留守たるに從ひて大阪に來往し、小山と善し。大作名は嘉忠。字は伯實松村と號し、洛閩の學を好み、傍ら詩歌を嗜む。不幸蚤歳眼疾に罹り、陰に良妻の典籍を代讀すべき者を索む。小山之を哀み、爲に刀自を媒す。刀自時に年十九。亦竊に商賈の事を厭ひ、士人に嫁して讀書の餘暇を得むと欲す。是に於て、父母稍々違言ありと雖ども、事遂に成り、琴瑟調和讀書筆硯に從事すること茲に三年。倉邸の廢絶を以て美濃に移住せり。此時に當り、夫家數々世故を經て、家道大に衰へ、擔石の蓄殆ど空し。刀自都人士の女を以て富家に成長し、薪炊杵舂の務を厭はず、傍ら句讀を地方の子弟に授け、又失明の夫に讀書の樂を廢せしめざりしが、其の一男一女を擧げたる比ひ、世は維新の世變に際會して、夫家の二弟皆な志士の間に往來し、家産益々墜ちて、復如何ともすべから

ざるに至り、家を提げて、尾州高田村の親戚に寄寓し、幾もなく居を同國一宮に卜せり。是より先、大作美濃を去るに當り、人に托して餘す所の田宅を賣りしが、不幸にして其の奪ふ所となり、嚢底復一錢を餘さず。是に至り、刀自其衣奩を鬻ぎて僅に百餘金を得、以て不時の備へとなし、子弟の敎授と、他人の衣裳裁縫とに由り、得る所を以て一家數口を糊するの資となす。適々東光寺の住職、豐田毒湛師大作に過り、其狀を見て、大に之を憫み、人に告げて先に失ふ所の金若干を還さしむ。刀自大に喜び、前の百金と合せて、之を某富商に托せむと欲す。富商累の及ばむことを恐れ、乘馬下し近くべからずと稱して受けず、刀自之に因りて、益々發奮長子を大阪の實母に托し、日夜家政を經營し、傍ら夫に侍讀す。居ること三年。長子祖母の死を以て家に歸り、其翌年苅安賀の富豪關戸某刀自を招致して、村内の子弟を敎授せしむ。刀自此時を以て第三女を擧げ、幾もなく苅安賀を罷めて一宮に歸住し、次で人の勸を以て、名古屋巾下の小學校に敎授す。かくて一宮に在ると前後六年。零丁孤苦の餘糟糠だも口に飽かざるの時あり。勞役服せざる所なく、辛酸嘗めざる所なかりしが、晏如として人の堪ふべからざるに堪へ、人の忍ぶべからざるを忍び、少暇ある毎に、必らず其夫に侍讀し、闔家の經營兒女の撫育一も之を親戚故舊に仰がず。其の樂む所は、故舊の時に過りて、當世の事務を談論せるを傍聽すると、兒女の成育とに在りき。是に至り、家計稍支ふべきを致し、其後愛知縣の養成校を開き、小學敎員の爲に師範科の講習を行ふや、刀自も亦與かり業を卒へ、職を上町の桃天女學校に奉ずる事となりぬ。已にしてその、長子一郎氏をして、東都に遊學せし

めむと欲す。監督の托すべきなく、學資の給すべきなきを以て、因循果さず、陰に以て恨となす。是より先、故ありて、愛知師範學校長伊澤氏と相知る。伊澤氏一日會々之に告げて曰く、今や官、女子師範學校を東京に創め、女敎員を四方に募れり。之に應ずるも亦可ならずやと、刀自大に喜びて、之に周旋を托す。未だ幾ならず、氏任に東京に歸り、刀自の事を小杉女子師範學校長に告ぐ。小杉氏則ち書を愛知縣令鷲尾隆聚に致し、刀自を召さむと欲するの意を陳ず。縣令謝して遣らず、且頗る事を密にす。刀自偶々之を聞き、以て吉川泰次郎氏に謀る。氏時に愛知英語學校に長たり。故ありて刀自を知れり。則ち爲に縣令に説き、固く其の必らず遣るべきを論ず。縣令拒む能はず、明治八年十月を以て、遂にその職を解き、東上を許せり。こゝに於いて家を提げて先づ大阪に至り、其末女を生家の姉に托し、其餘と共に東京に來住し、十一月拜せられて師範學校の訓導となりしが、六閲月にして福澤諭吉翁の周旋に由り、小笠原女公子を其家塾に延くの約を爲し、職を辭して三田に卜居し、公子幷に福澤小幡諸氏の女兒を敎育せり。居ること二年、女公子故ありて家塾を去る。則ち出でゝ學習院の敎官となり、傍ら岩倉家の女公子に侍講せしが、三年餘にして之を辭し、專ら句讀を家塾に授け、又出でゝ福澤、山尾、吉田、富田等諸家の子女に句讀裁縫を敎授せり。此時に當り、長子一郎氏業を大學に卒へて文學士となり、職を豫備門及東京府中學に奉ず。家計復憂ふべき所なし。而も刀自、幼より勞苦に慣れ安逸を喜ばず、明治二十年、富田村田以下十數氏と計りて、金聲小學校を芝公園内に起し、良家の子女を集めて、敎育の責に任じ、傍ら成立學舍、女子部

修身科の教授を担當せしが、一郎氏の郁文館を駒込に開くに及び、資力支へざるを以て、金聲小學校を閉ぢ、成立女學舍長中原貞七氏の東都を去るや、女子部を改稱して成立女學校となし、任に其校長に就き、專ら其維持發達に盡力せり。已にして明治二十八年刀自、乳癌を患ひ、切解治療の餘、身心疲勞して劇務に堪へず、則ち女學校長を辭して靜養を事とせる者一年。會々名古屋市に高等女學校設立の事起り、聘せられて其校長となり、拮据經營三年に垂んたりしが、紛紜ありて之を辭し、京阪諸地方を漫遊して京に歸る。未だ幾ならず肺尖病に罹り、靜岡鎌倉の諸地に靜養して稍々癒ゆ。一郎氏即ち明治卅三年十二月を以て、爲に還暦の壽莚を駒込千駄木の有尾邸に開きしに、相會する者故舊知友無慮數百人、歌頌も亦數百に下らず、人以て榮となせり。今玆に刀自歳六十四、體力猶は健、愛敬女學校に長として、淑德女學校の修身敎員を兼ね、傍ら婦人弘道、大日本婦人敎育、愛國婦人、東亞佛敎會女子部、東西本願寺の婦人會、福田會女子部等、十數會の間に周旋して倦まず。豁達の性あるに非ずんば、何んぞ斯の如きを得むや。刀自一男二女を擧げ、男は則ち文學士一郎氏家を繼ぎ、長女田豆江孃嫁して夭し、少女下枝孃工學士横河氏輔に嫁す。各々成立する所あり。之を要するに、刀自家を治むるに法あり。子を育する私愛なく、嚴を以て主となし、能く舅姑と失明の夫に事ふ。其の夫家に於ける翅に内助のみならざるなり。讀書に至りては、專ら得心行身を以て務となし、記誦を事とせず、傍ら國歌を近藤芳樹、鈴木重嶺二翁に學び、深く風雅の趣味に通せりと云ふ。

故英國女皇ヴイクトリヤの傳（承前）

宮館さだ子

ヴイクトリヤ女皇傳は、博く各種の著書及び雜誌等に據り、數十回に渉りて掲載するの見込なりしも、近時、故女皇に關する史傳逸話等の、本邦人の手に編纂せられたるもの、坊間其種類少なからざるにより、女皇傳は、向後一回を以て終了し、其次よりは、未だ多く本邦人に知られざる泰西閨秀の傳をものし、新に愛讀者の諸媛に見えんと欲す。

女皇の戴冠式

女皇の戴冠式は、千八百三十八年六月二十八日を以つて「ウエストミンスター」寺院に擧行せられぬ。内には貴紳百官綺羅星の如くに列り、外には四民歡呼の聲潮の如くに起り、大僧正恭しく王冠を捧げて、之を女皇の頭上に戴かせまゐらせたるの時、女皇の顏色は半ば蒼白を帶び、惴々焉として之を受けさせ給ひき。嗚呼、一寶冠の重きを懼れたる女皇當日の御心こそ、他日一國の重きに任じて違算なく、遂に克く、今日の隆盛を來したる原因にてありけれ。

參列の貴紳百官交る〲起つて、女皇の前に進み、恭しく忠義の誓を爲しぬ。老頽の―ロール―卿亦其中に在り。將に階を昇りて玉座に近づかんとせしとき、誤つて躓き倒れしかば、女皇は倉皇しく趨り扶けんとせしも、卿自ら身を正しければ、其儘に止み給ひき。されども、女皇は卿の老體を煩はすに忍びず、御座を離れて卿の前に進み行き、龍顏いと美はしく、其宣誓を受け給ひき。此優しく女らしき德性は、常時の好逸話として喧傳せら

れ、國民をして此妙齡の新女皇に對し、更に一層欽仰の念を深からしめたりき。

英國の史中絶えて見ること能はざりし此莊嚴なる盛儀は、午後三時半を以つて終了し、女皇の鹵簿は、途上歡呼の聲に送られて「バッキンガム」宮に還幸ましまし、折り偶々女皇は、其愛犬の頻りに吠ゆるを聞かせられ、直に走りて之を抱き給ひぬ。「ウエストミンスター」寺院に於いては、新に大英國王の寶冠を戴き、犯すべからざる威容を具へて、貴紳百官の臣從宣誓を受けさせ給ひたるの人は去て、「バッキンガム」の宮裡に、餘念なく其愛犬を愛でさせ給ふ。玲瓏玉の如き天眞の發揮に非ずして何ぞ。

女皇の公生涯　附其結婚

「ケンシントン」宮夢暖かにして、母公恩愛の下いと靜けき一處女の生活を辿り來りたるヴイクトリヤ皇女が、俄に王冠嚴めしく、太陽の沒する時なしと稱せらる丶大英國の王位に即かせ給ひたるは、實に此上なき身上の劇變なりき。女皇は此劇變と共に、直に其地位に伴ふべき十二分の威嚴と、獨立的精神とを發揮し給ひ、其公生涯に於いては、全く前日の優柔に似もやらず、飽くまで剛健の資を持し給ひたるが爲め、間々專斷自恃の弊に陷りたることなきに非ざりき。登位の初、政黨分立の渦中に捲き込まれたるが如きは、女皇の永き生涯中に於ける最大過失なりしも、賢明なる女皇は、忽にして其眞心より悔悟し給ひ、「年若き婦人の天眞を毀ひ、並に、人類自然の感情と愛とを害するものは、黨爭に如くものなし」とて、深く自ら戒めたりき。

然れども、女皇の其公生涯に於いて、勗めて剛健を持し給ひたるは、元より天禀の資性にては非ざり

し也。唯其王冠に伴ふが爲め、枉げて之を努めたるものに外あらざりき。千八百五十二年、ルイ、ナポレオンの佛國帝位に即きたるの當時、女皇は叔父王に書を裁して、「政治上の事は、日増に好ましからず相成申候。善良なる婦人としては此の如く剛猛なる男子の事業を嫌忌すべきことは當然と存候」云々の意を洩らさせ給ひき。

即位の後、母公ケント公爵夫人は是迄の如くに、常に其膝下に最愛の皇女を引留むること能はず、國王としては、其母と雖ども之に加ふること能はざることとなれば、俄に掌中の珠を取り去られたるが如く、轉た寂寥の感に耐へざりし折柄とて、窃に、皇女の餘りに雄々しくなりしを情れなく思ひき。されども、一婦人としての女皇、母に對する子としての女皇は柔順羊の如くにして、母を愛するの念は、終始渝りたること非ざりし也。

女皇の初めて、其從弟「サクセ、コブルグ」のアルベルト親王に會見したるは、千八百三十六年にして、當時親王は「ケンシントン」宮に客寓せしこと一ケ月許、花晨月夕相携へて賞遊を倶にせしが、會見の當初よりして、此瀟洒たる一少年と淑女との間に、最も切實なる戀愛の情を萌したりき。

當時、親王と皇女とは共に十七才の同年にして、親王は、尙修學の時代にありき。翌年、親王の學術的遊歷の途上に在りし時に於いて、皇女の身上は一大劇變は加へられ、處女的生活より、一躍して威望赫々たる國王の位に上りぬ。優柔にてし處女らしき天稟の眞性を枉げて、剛健の態度を取らざるべからざることゝはなりぬ。されば、叔父君白耳義王の、屢々書を女皇に送りて、結婚を勸めまゐらせしも聽き容れ給はず、自今四年の間は、一身上の私を顧みるに遑あらざる旨を回答し給ひき。

唯夫れ、神聖なる愛の心は、總ての他の感情よりも強く、女は國王としてよりも更に大なりけり。千八百三十九年の十月アルベルト親王の再び英國に來りて女皇の面前に立ち給ひけるとき、宛然がら春風の薄氷を融和するが如くに、一切の他の感情と人爲の尊嚴とを壓し悉して、愛といふ無冠の帝王の前に跪拜し、玆にめでたく偕老の契を訂し給ひぬ。

家庭

大婚後に於ける女皇の家庭は、眞に陶然として春の海の如く、一般國民に對して、摸範的家庭の實例を示し給ひき。女皇は、一意皇婿に對して貞順ならんことを期し給ひ、世上幾多の新婦の如くに、唯己れの好尙を主として、獨り重きを一家に致さんとするが如きは、女皇に於いて些かも見ること能はざりし也。女皇は、其皇婿の母國日耳曼を離れ、其兄弟親朋に訣れ、其邸宅を棄てゝ飄然として遠く英國に渡來したるは、其結婚に對して過分の犧牲を供したるものと信じたりし也。此厚意に對しては、女皇の出來得る限りに於いて、多く酬ゆる所なかるべからざることを、常に診念し給ひき。されば、女皇は、皇婿をして毫も其身の異域に在ることを感ぜざらしめ、常に其心を悅ばしむるが爲には、全く其己れを捨てゝ、皇婿の嗜好々尙に投ぜんことを努めたるのみならず、終には、自からも之に同化し給ひたりき。(未完)





實驗家庭の教育（三）

東京感化院長　高瀬眞卿

不完全の家庭より出る不良の子供のお話は、大畧右の通りでありますが、右は實驗上の二三の例を擧げた迄の事で、數百の例を悉くお話すると繁雜いたします、先づ此位にいたして、今日は、家庭と學校との關係に就いてお話を致す事にします。

さて、小供を學校へ出して置く父母の考と云ふものは、どう云ふ考を持つて居るかと言ふに、只だ、學校へ出して置けば、自然と立派な人物になるものと思ふて居る。またある父母は、小供が學校へ出て居る間は、嚴重なる教師の前に居て、一日窮屈な思ひをするから、家へ歸つて、少し位吾儘をするのは致し方がない抔と、思つて居るものもある。また學校と云ものは宜しくない處で、自分の子供は學校へ出てから、惡い友達と遊んで、其より不行跡になりましたと言ふものもある。此等はや間違つて居る。學校と一口に言つても、良い教師の揃つて居る處もあり、一向監督の行屆かない處もあるから、一樣には言はれないが、兎に角、學校へ任せたのみで安心して居ると云ふが、親の不心得と云ふものであります。また學校は、子供が窮屈な思ひをするであらうと思ふも間違つた話、家庭に於いて吾儘に育つた子は、規則の下に檢束せらるれば、いくらか窮屈な思ひはあらうが、ソレが、將來の利益になると云ふ事を心付ぬと云ふは、親の了簡が違つて居るのでありませう。また、學校へ出てから惡友と交つて、だん／＼不行跡

修身科の教授を担當せしが、一郎氏の郁文館を駒込に開くに及び、資力支へざるを以て、金聲小學校を閉ぢ、成立女學舍長中原貞七氏の東都を去るや、女子部を改稱して成立女學校となし、任に其校長に就き、専ら其維持發達に盡力せり。已にして明治二十八年刀自、乳癌を患ひ、切解治療の餘、身心疲勞して劇務に堪へず、則ち女學校長を辭して靜養を事とせる者一年。會々名古屋市に高等女學校設立の事起り、聘せられて其校長となり、桔据經營三年に垂んたりしが、紛紜ありて之を辭し、京阪諸地方を漫遊して京に歸る。未だ幾ならず肺尖病に罹り、靜岡鎌倉の諸地に靜養して稍々癒ゆ。一郎氏即ち明治卅三年十二月を以て、爲に還暦の壽莚を駒込千駄木の有尾邸に開きしに、相會する者故舊知友無慮數百人、歌頌も亦數百に下らず、人以て榮となせり。今茲に刀自歳六十四、體力猶は健、愛敬女學校に長として、淑德女學校の修身教員を兼ね、傍ら婦人弘道、大日本婦人教育、愛國婦人、東亞佛教會女子部、東西本願寺の婦人會、福田會女子部等、十數會の間に周旋して倦まず。豁達の性あるに非ずんば、何んぞ斯の如きを得むや。刀自一男二女を擧げ、男は則ち文學士一郎氏家を繼ぎ、長女田豆江孃嫁して夭し、少女下枝孃工學士横河氏輔に嫁す。各々成立する所あり。之を要するに、刀自家を治むるに法あり。子を育する私愛なく、嚴を以て主となし、能く舅姑と失明の夫に事ふ。其の夫家に於ける翅に內助のみならざるなり。讀書に至りては、專ら得心行身を以て務となし、記誦を事とせず、傍ら國歌を近藤芳樹、鈴木重嶺二翁に學び、深く風雅の趣味に通せりと云ふ。

故英國女皇ヴィクトリヤの傳（承前）

宮館さだ子

ヴィクトリヤ女皇傳は、博く各種の著書及び雑誌等に據り、數十回に渉りて掲載するの見込なりしも、近時、故女皇に關する史傳逸話等の、本邦人の手に編纂せられたるもの、坊間其種類少なからざるにより、女皇傳は、向後一回を以て終了し、其次よりは、未だ多く本邦人に知られざる泰西閨秀の傳をものし、新に愛讀者の諸媛に見えんと欲す。

女皇の戴冠式

女皇の戴冠式は、千八百三十八年六月二十八日を以つて「ウエストミンスター」寺院に擧行せられぬ。内には貴紳百官綺羅星の如くに列り、外には四民歡呼の聲潮の如くに起り、大僧正恭しく王冠を捧げて、之を女皇の頭上に戴かせまゐらせたるの時、女皇の顏色は半ば蒼白を帶び、惴々焉として之を受けさせ給ひき。嗚呼、一寶冠の重きを懼れたる女皇當日の御心こそ、他日一國の重きに任じて違算なく、遂に克く、今日の隆盛を來したる原因にてありけれ。

參列の貴紳百官交る〳〵起つて、女皇の前に進み、恭しく忠義の誓を爲しぬ。老頽のロール卿亦其中に在り。將に階を昇りて玉座に近づかんとせしとき、誤つて躓き倒れしかば、女皇は倉皇しく趣り扶けんとせしも、卿自ら身を正しければ、其儘に止み給ひき。されども、女皇は卿の老體を煩はすに忍びず、御座を離れて卿の前に進み行き、龍顏いと美はしく、其宣誓を受け給ひき。此優しく女らしき徳性は、當時の好逸話として喧傳せら

れ、國民をして此妙齡の新女皇に對し、更に一層欽仰の念を深からしめたりき。英國の史中絶えて見ること能はざりし此莊嚴なる盛儀は、午後三時半を以つて終了し、女皇の鹵簿は、途上歡呼の聲に送られて「バッキンガム」宮に還幸ましましゝ折り偶々女皇は、其愛犬の頻りに吠ゆるを聞かせられ、直に走りて之を抱き給ひぬ。「ウエストミンスター」寺院に於いては、新に大英國王の寶冠を戴き、犯すべからざる威容を具へて、貴紳百官の臣從宣誓を受けさせ給ひたるの人は去て「バッキンガム」の宮裡に、餘念なく其愛犬を愛でさせ給ふ。玲瓏玉の如き天眞の發揮に非ずして何ぞ。

女皇の公生涯　附其結婚

「ケンシントン」宮夢暖かにして、母公恩愛の下いと靜けき一處女の生活を辿り來りたるヴイクトリヤ皇女が、俄に王冠嚴めしく、太陽の沒する時なしと稱せらるゝ大英國の王位に即かせ給ひたるは、實に此上なき身上の劇變なりき。女皇は此劇變と共に、直に其地位に伴ふべき十二分の威嚴と、獨立的精神とを發揮し給ひ、其公生涯に於いては、全く前日の優柔に似もやらず、飽くまで剛健の資を持し給ひたるが爲め、間々專斷自恃の弊に陷りたることなきに非ざりき。登位の初、政黨分立の渦中に捲き込まれたるが如きは、女皇の永き生涯中に於ける最大過失なりしも、賢明なる女皇は、忽にして其眞心より悔悟し給ひ「年若き婦人の天眞を毀ひ、並に、人類自然の感情と愛とを害するものは、黨爭に如くものなし」とて、深く自ら戒めたりき。

然れども、女皇の其公生涯に於いて、勗めて剛健を持し給ひたるは、元より天稟の資性にては非ざり

し也。唯其王冠に伴ふが爲め、抂げて之を努めたるものに外あらざりき。千八百五十二年、ルイ、ナポレオンの佛國帝位に即きたるの當時、女皇は叔父王に書を裁して、「政治上の事は、日増に好ましからず相成申候。善良なる婦人としては此の如く剛健なる男子の事業を嫌忌すべきことは當然と存候」云々の意を洩らさせ給ひき。

即位の後、母公ケント公爵夫人は是迄の如くに、常に其膝下に最愛の皇女を引留むること能はず、國王としては、其母と雖ども之に加ふること能はざることなれば、俄に掌中の珠を取り去られたるが如く、轉た寂寥の感に耐へざりし折柄とて、竊に、皇女の餘りに雄々しくなりしを惜れなく思ひき。されども、一婦人としての女皇、母に對する子としての女皇は柔順羊の如くにして、母を愛するの念は、終始逾りたること非ざりし也。

女皇の初めて、其從弟「サクセ、コブルグ」のアルベルト親王に會見したるは、千八百三十六年にして、當時親王は「ケンシントン」宮に客寓せしこと一ヶ月許、花晨月夕相携へて賞遊を倶にせしが、會見の當初よりして、此瀟洒たる一少年と淑女との間に、最も切實なる戀愛の情を萠したりき。

當時、親王と皇女とは共に十七才の同年にして、親王は、尙修學の時代にありき。翌年、親王の學術的遊歷の途上に在りし時に於いて、皇女の身上は一大劇變は加へられ、處女的生活より、一躍して威望赫々たる國王の位に上りぬ。優柔にてし處女らしき天稟の眞性を抂げて、剛健の態度を取らざるべからざることゝはなりぬ。されば、叔父君白耳義王の、屢々書を女皇に送りて、結婚を勸めまゐらせしも聽き容れ給はず、自今四年の間は、一身上の私を顧みるに遑あらざる旨を回答し給ひき。

唯夫れ、神聖なる愛の心は、總ての他の感情よりも強く、女は國王としてよりも更に大なりけり。千八百三十九年の十月アルベルト親王の再び英國に來りて女皇の面前に立ち給ひけるとき、宛然がら春風の薄氷を融和するが如くに、一切の他の感情と人爲の尊嚴とを壓し悉して、愛といふ無冠の帝王の前に跪拜し、玆にめでたく偕老の契を訂し給ひぬ。

家庭

大婚後に於ける女皇の家庭は、眞に陶然として春の海の如く、一般國民に對して、摸範的家庭の實例を示し給ひき。女皇は、一意皇婿に對して貞順ならんことを期し給ひ、世上幾多の新婦の如くに、唯己れの好尚を主として、獨り重きを一家に致さんとするが如きは、女皇に於いて些かも見ること能はざりし也。女皇は、其皇婿の母國日耳曼を離

れ、其兄弟親朋に訣れ、其邸宅を棄て、飄然として遠く英國に渡來したるは、其結婚に對して過分の犧牲を供したるものと信じたりし也。此厚意に對しては、女皇の出來得る限りに於いて、多く酬ゆる所なかるべからざることを、常に軫念し給ひき。されば、女皇は、皇婿をして毫も其身の異域に在ることを感ぜざらしめ、常に其心を悅ばしむるが爲には、全く其己れを捨て、皇婿の嗜好々尚に投せんことを努めたるのみならず、終には、自から之に同化し給ひたりき。(未完)





實驗家庭の教育（三）

東京感化院長 高瀬眞卿

不完全の家庭より出る不良の子供のお話は、大畧右の通りでありますが、右は實驗上の二三の例を擧げた迄の事で、數百の例を悉くお話すると繁雜いたします、先づ此位にいたして、今日は、家庭と學校との關係に就いてお話を致す事にします。

さて、小供を學校へ出して置く父母の考と云ふものは、どう云ふ考を持つて居るかと言ふに、只だ、學校へ出して置けば、自然と立派な人物になるものと思ふて居る。またある父母は、小供が學校へ出て居る間は、嚴重なる教師の前に居て、一日窮屈な思ひをするから、家へ歸つて、少し位吾儘をするのは致し方がない抔と、思つて居るものもある。また學校と云ものは宜しくない處で、自分の子供は學校へ出てから、惡い友達と遊んで、其より不行跡になりましたと言ふものもある。此等はやゝ間違つて居る。學校と一口に言つても、良い教師の揃つて居る處もあり、一向監督の行屆かない處もあるから、一樣には言はれないが、兎に角、學校へ任せたのみで安心して居ると云ふが、親の不心得と云ふものであります。また學校は、子供が窮屈な思ひをするであらうと思ふも間違つた話、家庭に於いて吾儘に育つた子は、規則の下に檢束せらるれば、いくらか窮屈な思ひはあらうが、ソレが、將來の利益になると云ふ事を心付ぬと云ふは、親の了簡が違つて居るのでありませう。また、學校へ出てから惡友と交つて、だん〳〵不行跡

になつたと思ふも間違、惡い朋友は、學校には比較的少ないと言はねばならぬ。却つて、學校へも出さずに遊んで居る窮民の子に、惡い者が多い。惡い友達と遊ばせるは、つまり親の不行屆と云ふもので、學校の罪にのみは歸せられぬのである。一體今日の學校と家庭とは、甚だ親密でない。家庭と學校とは、親しく連絡を付けねばならぬと云ふ事は、明治廿年の頃より、私が度々演説致して居る。近年諸學校にて、懇話會と言ふ樣なものを設けて、年に何回か父母を招集して、談話をする樣になつて來ました。併し親と云ふものは、存外に斯いふ事を重じない。最初は珍しそうに多く集つても、追々に出る者が少くなつて來ると云ふ話であります。甚だ不熱心な事で、ソレで只だ、子供の善くなる事をのみ希望して居ると云ふは、自分勝手と申すものであります。ソコで私が、家庭と學校との關係について、先年群馬縣の教育會で、お話をした事がある。ソレを左に述べませう。

學校と家庭とは、極めて親しき關係を以つて、双方心を合せて、教育と云ふ大任を盡さねばなりませぬ。例へて申しますと、教育と云ふものは、恰ど駕籠の樣なものであります。若いお方は駕籠と云ふものを御存知ありますまい。私なども駕籠の時代には、幼年で、一向乘つた事はないが、只今病人が乘つたり、葬式の時に棺を入れて擔いで行く、アレが昔大名や士分が乘つて歩いたので、先棒と後棒とあつて、二人で擔ぎます。尤も大名などは、四人でも六人でも、身分に寄つて大勢で擔ぎますが、普通のは先ニ人です。さて、此の駕籠を教育と云ふものに譬へますと、此教育をだん〱進行させますには、誰が擔いだらよいので有ませうか、この駕

籠の中には、吾が可愛い子供が乗つて居ります。子供を教育の駕籠に載せて立身出世の都へ進ませると云ふ其教育の駕籠は教師と親が擔がねばならぬのであります。先棒は即ち學校の先生、跡棒は父と母と二人で擔ぐ。教師先生が右の肩ならば親も右の肩を入れまして、調子を違はぬやうに互に聲をかけ合つて、子供の乗つた駕籠を擔いで行かねばならぬ。これが即ち學校の教育と家庭の教育と、相待つて教育の任を盡すのであります。然るに學校へのみ任切りて、家庭では一向無頓着で居ると云ふ事になると、駕籠の先棒ばかり教師が擔いで後棒を擔ぐ者がないから、教師は大きに骨が折れる。只骨が折れる許りではない、駕籠を引摺つて行かねばならぬ。引摺られては進みが惡い駕籠の中で子供がゴロゴロ轉げて居ねばなりますまい。處が、學校へも出さずに、親の手で教育すると云ふ人があつたならば、どうでありませう。親がひとりで後棒許り擔ぎ上げたとて、教育の駕籠は一歩も歩きません。今の時に、そんな馬鹿な眞似をする者はないに極つて居りますから、それはよいと致ませうが、兎に角に教育と云ふものは、學校の先生に計り任せ切りでは、完全の結果は見られない、是非とも家庭に於いて之と相應じて、互に力を協せねばいけません。

どう云ふ塲合に、家庭にて教師を助けて、教育の手傳をするかと言ひますと、其の仕事は澤山あります。眞卿に言はせると、三日四日饒舌續けても足らぬ程ありますが、今日は二ッ三ッお話を致しませう。先づ斯う云ふ樣な調子に致したい。親が子供に向つて、コレ悴、親と云ふ者は尊い難有い物だぞよ。口を利くにも丁寧にいたせ。

孝行もせねばならぬぞと言つては、なんぼ自分の子でも工合が悪い。また教師も、そもそも教師と言ふ者は、人倫の道を教へ智徳を啓發する者であります。諸君は、拙者を尊敬致さねばなりませぬと、言ふてもどうも變なもので有ませう。ソコデ家庭と學校とは、互に手段を交換して、コレ伜、お前は先生を大切にして、能く命令をきかねば成りませんぞ、先生は、お前の爲には大恩のあるお方である、お辭義をするにも丁寧にして、何事でも能く仰る事を守らねばならぬと、家庭に於いて、親々が常々言つて聞かせます。また教師の方では、あなた方は、お父さんやお母さんを大切になさいよ。父母の恩と云ふものは、大さうなものであります。親の言ふ事ならばどう云ふ難儀な事でも、子供たる者は聞かねばなりません。口を利くにも丁寧になさい。

朝起きるにも寢るにも、丁寧に禮儀をなさるやう。と斯う互に教へて置く様にする。また時々は兩親を教場へ呼んで教授のさまを見せたり、遊んで居る所を見せたりして、學校の事情にも能く通じて居る様にさせる。ソコで親の方では、自分の家へ教師を呼びまして、御馳走などをせずに、子供が家に居る時の行狀を話し、また、學校内の事も聞き、子供の事に就いては、互に奥意なく話をして、親類の様に交際をせねばならぬ。斯うすれば、學校の教育も活きて働き、教師もまた張合があると云ふもので、ソレを家業が忙しいのなんのと言つて、學校などへは、一度も行かぬ親がある。此等の人と云ふものは、子供の可愛いのを知つて、子供を善い人にすると云ふ考のない、詰り犬か猫見たやうなものであります。教師とても、父兄の家へ行くのを面

倒に思ふ樣では、敎育の任を盡す人とは言はれません。只だ月給計り貰へば宜しいと言ふやうでは、一向に頼母しくない。多數の生徒の家へ然う度々ゆかれるものではない、と思ふ人もありませうが、自分の受持の生徒だけならば、心懸次第で隨分行はれ樣と思ふ。只今行はれる懇親會の如きは、父兄姉妹を集めて、只だ演說を聽聞させるだけで、打解けて話をするのでもなし、吾子の行狀に就いて、先生に相談するのではない。ホンにお役目の心持で、學校へ行つて話を聽く、これが何の効能がありませう。眞卿が申す樣に、親と敎師が度々逢ふ樣になれば、子供が嘘をつく事が出來なくなる。其上家庭に於いての行狀を、悉く先生へ話されると思ふと愼しむやうになります。少年が不良になる初りは嘘をつくのが初歩でありますから、子供の時分には嘘をつかせぬ樣に、敎師も親も心懸ねばならぬ。次には、學校の月謝を「クスネ」たり、內證で遣つたりする樣になる。斯うなると、學校へ行つた振をして、途中で遊んで歸つて來る。此等が不良になる端緒でありますが、親が學校へゆく事もあり、先生が自分の家へ來ると思ふと、子供はさう云ふ惡い事をしても、直露顯すると思つていたしません。學校の事情の親に分らぬ程、敎育上の不利益はなく、家庭の樣子の敎師に分らぬ程、敎授上の不利益はないのであります。(下略)

家庭と學校との關係は、右に申した通りであります。大概は誰も知つて居ますが、さて知り拔いて居ても、行はれぬが家庭の敎でありまして、どうも、此問題程實行の六づかしいものはありません。私はこれより、子供を育てるに就きて、兩親

の日常心得べき事をお話申しませう。家庭教育と言ふ書物は隨分澤山ありまして、成程御議論はいかにも立派であるが、さて、どれも行はれさうでない。疊の上で水練の講義するやうなもので、併し私は、卑近の極々行はれ易い處を申します。決して理論の上より割出した事は申さないつもりであります。

育兒衛生談（四）

久利軍醫

●●●●●小兒營養法（續き）

●●●●●小兒の沐浴　小兒の皮膚を清潔に致しますのは、營養法に次で肝要であります。何故に之を要するかと云ひますに、若し小兒の時、皮膚を不潔にすれば、發育機能を妨げて不良ならしむるからであります。且つ皮膚が不潔になりますれ　體温にも關係し、また新陳代謝にも影響するからであります。それ故に小兒には、實驗上左の標準に從ひ、入浴せしむるを可とする。

年齢	一歳未滿	一歳乃至二歳	二歳以上	入浴時間
回數	毎日一回	一週二回乃至三回	少なくも一週間一回以上	長さは不頁なり三分乃至五分時にして長さも十分以上を越ゆべからず

●●温度　小兒は、低温高温共に感じ易きものでありますからして、入浴の際、温度には頗る注意を要します。若し低温なれば寒冒し易く、高温なれば疲勞嗜眠を來し、回數を重ぬるに從つて不眠症を起し、漸次衰弱を來すやうな虞があるからです。小兒を入浴せしむるに適當の温度は、三十五度を可とするけれども、早產兒又は薄弱兒には、三十六度五分乃至三十七度位を可とします。而して生後六ヶ月間は、此温度の規則に從ひ、其後成長

するに従ひ、温度を低減するが宜しいのです。以上の法則により全身浴を行ふの外、時々拭除を試み、特にフランネルの如き柔かき布片にて、汚垢の着き易き部分を拭ふに怠らざれば、自然皮膚病を防ぐことも出來ます。

●●衣類　衣服は温暖なるが可いけれども、温暖も其度に過ぐれば、却つて發汗して害があります。又衣服は、狹少に失するものは尤も不良でありますから、十分濶大なることを要します。且つ、尤も直接に影響を及ぼすものは冷濕でありますから、常に注意して、乾燥せる衣服を與へ、尿、汗等の浸潤せるものは、其都度速かに交換するを可とします。又衣服の種類に因りて、皮膚を刺戟するものであります。たとへば、疎雜なるフラネル、綿ネルの如きものは、使用せざる方が宜しいのです。兎に角注意を要するは、小兒の身體を刺戟せぬ柔軟なるものを着用せしめ、且つ呼吸や、血液循環を害せぬやうに仕立てることであります。彼の筒袖よりは、從來の日本流の襦袢を用ゆるが宜しくあります。

●●●●小兒の寢床　成るべく新調するか、若くは清潔なるを可とします。母子同衾することは、我が國從來の習慣であるが、之は甚だ宜しくない。なぜかと申すに、小兒は寒冒し易く、母の床内空氣は清潔でありませず、又、睡眠の際等に、種々危險を來すやうな憂があるからであります。之に反して、獨り寢床に就かしむるときは、啻に以上の危憂なきのみあらず、母在らざるも自ら寢に就き、特に母の手を早く離れ、此時よりして、自然獨立の思想を養成することが出來ます。

●居所　床は、顔を窓に向はしむるときは安眠を妨げ、又一方よりするときは、斜視を起す害があ

りますからして、光線は、必ず後部より受けるやうにするのが肝要であります。而して、頭部は稍や高くし、就眠中寢衣にて身體を卷纏するときは、睡眠中の隨意運動を妨ぐるに因り、注意せんければなりません。且つ小兒の居所は、最も淸潔にして光線十分に入り、空氣の流通よき室にして濕氣なき所を可とします。小兒寢室の溫度は、初生兒は攝氏十九度乃至二十度、生後四週より二歲までは、十九度を適良とします。

●●筋骨　小兒の筋骨をよく發育せしめんには、第一營養、第二運動を妨げざるやうにせんければなりませぬ。さりながら運動を爲さしめんとして、未だ歩行し得ざるに、妄りに襟を引き又は手を捉へ、强ひて立歩せしむるが如きは、實に有害の至りにして、小兒の歩行は、自然に任ずるを可とします。又、西洋人と日本人との姿勢に大差あるは、既に此時分より原因すること、思はれます。故に一般に形を造るには、小兒の時分より姿勢に注意せねばなりません。日本の諺に、屈み女にそり男と申すことがありますが、今日の狀態にては、屈み女に屈み男が澤山あるやうに見受けられます。是れ男女共に宜しくない現象である。私は、どうかそり男そり女といふ樣に改良したく思ふて居る。さてかくそり身になすには、小兒生後六ヶ月までは仰臥せしめ、足を直伸せしめて、身體の運動を妨げぬやうにし、又、小兒を抱くにも、六ヶ月後は身體を直伸せしめて、仰臥のまゝ其下に手を送りて抱くを可とします。日本流に脊負ひをなすは宜しくありません。何となれば、之が爲め胸を壓迫して、其發育を妨ぐるのみならず、呼吸に支障を來し、且つ足や脊骨の彎曲を惹起するからであります。

小兒が成長して步行するやうになつたならば、隨意運動を爲さしめて、之を妨害しては不可ませぬ。此時は、實に筋骨發育の時期であるからであります。

就學齡に達すると、漸次机に凭らんければありませぬ。之は筋骨の發育上には惡しきことでありますけれども、敎育上に於いては止むを得ざる處置でありますからして、其代り十分運動に重きを置き、精神、身體、共に發育せしむるやうに養成するは、實に其父母並に敎師たるもの丶一大義務と信じます。兎に角育兒の要訣は、身體精神共に、不具者ならざるやうに注意して、養育するにあります。

產所式

有住常子

先、しめ繩は左繩になひて、所々にわらを下ぐ。三筋五筋七筋わらを下ぐる也。其間には、紙にてしでをきりてはさむ也。しめ繩の兩はしを切りそろへる事なし。其儘置事故實也。すべて、しめ繩のこしらへ方如斯也。產棚の繩は、向の眞中にて兩方とり合せて結ぶべし。四本の柱に折釘を打ちて、しめ繩をかくべし。但し、しめ繩の結目產棚はかたわな也。すべて、ひらき物はかた輪な丶り。

是より產所入用の道具一通りしるさん。

一、燈臺の事　榎の木にて作り、胡粉にてぬり、雲母にて松竹つる龜をかく也。寸法定なし。但、大方高さ三尺六寸計也。柱は、三寸五分通り計　丸柱

也。くもて徑三寸五分計、下の臺一尺五寸四方計、あつさ五分計、角のめんを取る也。燈臺の數十二、是も壬月有年は十三用ゐる也。此燈臺は、產屋に用ゐる也。油火をとぼす也。すべて油火本式あり。其上ろうそくは、ちら〳〵して產婦には忌む也。

だいどころ 豆腐料理

石井湧太郎

包豆腐の拵へやう

生の豆腐を摺盆に入れて摺るべし。是は布に包みさて絞りて、後に摺盆に入るゝなり。さて美濃紙に包みて、湯の中へそつと入れて湯煮して、紙ごとあげ、紙を取りて、青菜などとりあはせて、汁の實に用ふべし。

○又中へ黒胡麻、きざみ胡桃、木耳せん、摺生姜などを入れて、右の如く紙に包みて、煮ても用ふあり。是は吸物につかひたり。

○又右の如く包みて拵へるなれど、水氣を絞らず切方して、豆腐堅めに造り包む也。包むとき、中に豆腐をらくに入れて、口を紙捻にてしかと結ぶべし。

板にはしたる灰を厚さ四五分に敷きて、其上に乾たる布をしき、又其上に紙を一邊しきて、包みたるをのせて、暫くおくべし。かくて水の切れたる後に、鍋に胡麻の油を入れて、其中へ金杓子にてそつと入れておくべし。

○紙をとりて、うす醬油に、かくし葛とて葛粉少しをときているゝあり。かくして煮て、上にわさびを摺りておくべし。

○又包みて煮たる方をば、胡麻味噌にても食すべし。

○又一丁を三つに切りて、まん中をえぐりて胡桃味噌を入れて、又豆腐にてふたをして、美濃紙にて包みて、湯煮し、其上にて味をつくる。胡桃みその拵へかたは、胡麻と胡桃をおなじ位づつ擂盆にてすりあはして、又みそを擂盆にてすりて、馬尾篩にてうらごしゝて、味淋酒、砂糖にてかげんをなし、鍋に入れてねるべし、胡麻は黒ごまにても白ごまにてもよくすりて、胡桃をも別にすりて、みそのねりのなかばに入れてねりあはすべし、かやうの拵へかたもあり。

○豆腐は常のよりかたくつくらすべし。

○又右の如くなさずして、豆腐の中へ、にんじんをおろし金にておろしたるを眞に入れて、紙に包みて湯煮する仕方あり。これを卵どうふといふ。

田樂は冬のもの、今は春のものとなりぬ。

たかあしを、ふみそこなへる、めんばくを、
灰にまぶせる、ふゆのでんがく。（夢庵）

是は田樂の曲に、竹馬の如き物を一本たてゝ、是にのりて藝をなすを、高足の曲とかやいふによせて、豆腐の田樂のことによみなせるなり。宗長筆記、大永六年十二月の處に、夜もふけ爐邊にひざをならべ、田樂どうふの盃 たびかさなり、是も冬のものゝ證なり。

だいどころ

デセル製方

メリケン粉一斤「バタ」半斤、砂糖半斤の割合にて、砂糖を裏漉にて漉し、鶏卵二個を割り、能くかきまはし、メリケン粉バタと共にこねませ、か

たき時は牛乳を加へ　能程になし、それを好みの形にきり、「ブリッキ」の器にならべ、天板にいれて、二十分間焼くときは、味よきデセルは出來るなり。

マデラケーキ

鶏卵四個、バタ半斤、砂糖大コップに四杯、タバと砂糖を能く交せ、鶏卵は黄と白身を前の器にとり、黄身ばかりを擂鉢にて能く擂り、夫れに「レモンピール」をこまかにきざみ加へ、(これは香をつけるものなれば、レモンピールなき時は柚子の皮をこまかにきざみ、いるゝも宜し。)又「ペキンホーダ」、小匙二杯をいれ、前にとり置きたる鶏卵の白身を、茶せん又は箸にてかきまはし、能く泡の立ちたる時、各　交せ合せ、牛乳を加へ、ブリキにて製したる形にいれ、前の如く天板にて一時間程焼き、焼けたる時天板より出だし、形をぬき、器に盛りて出だすべし。

焼付鶏卵

鶏卵を割り能くかきまはし、鰹節の煮汁を鶏卵の倍程いれ、醤油と味淋の煮きりにて、程能に鹽梅し、鍋に油を引きたる中へ前の味をつけたる鶏卵をいれ、火を上下にして焼き、焼けたる頃、鍋より出だし、好みの大きさにきりて器に盛り、別に煮汁にて鹽梅したる汁をかけてすり、生羗を添へて出だすべし。又、鶏卵の中へ種をいるゝには、鳥、牛肉、三つ葉、筍、椎茸、きくらげ杯下煮をなし、三つ葉は生にているゝをよしとす。



學藝

家計簿記講義（承前）

磯部武者五郎

是迄にて日記帳、元帳の記入は濟みましたが、まだ一つ、諸勘定帳の記入が殘つて居ります。此の勘定帳は元帳の補助簿でして、元帳へ記入のできぬ細目を記入するのです。しかし元帳は、科目毎に口取をして分けます故、大概は細目迄を記入して、補助簿を設けずして濟めば、是れに越したることはないけれども、賄費の科目に至りては、細目が殊の外に多き故、補助簿を設けて、元帳にては支出した現金丈を記入し、補助簿に細目を記入するが、混雜しないで善くあります。故に賄費だけは、補助簿即ち賄費勘定帳を作りて、細目を記入することにします。其記入したる例は左の如くであります。

但、賄費勘定帳は、補助簿でありますけれども、家計簿記の中で、最も多額の金錢を支出します故、元帳同樣に、決算を爲し置くことが善くあると思ます。

（賄費、勘定帳、決算の結果が、女鑑第貳百四十壹號、元帳賄費の決算と相違します故、次號にて、元帳賄費の部だけ修正します。）

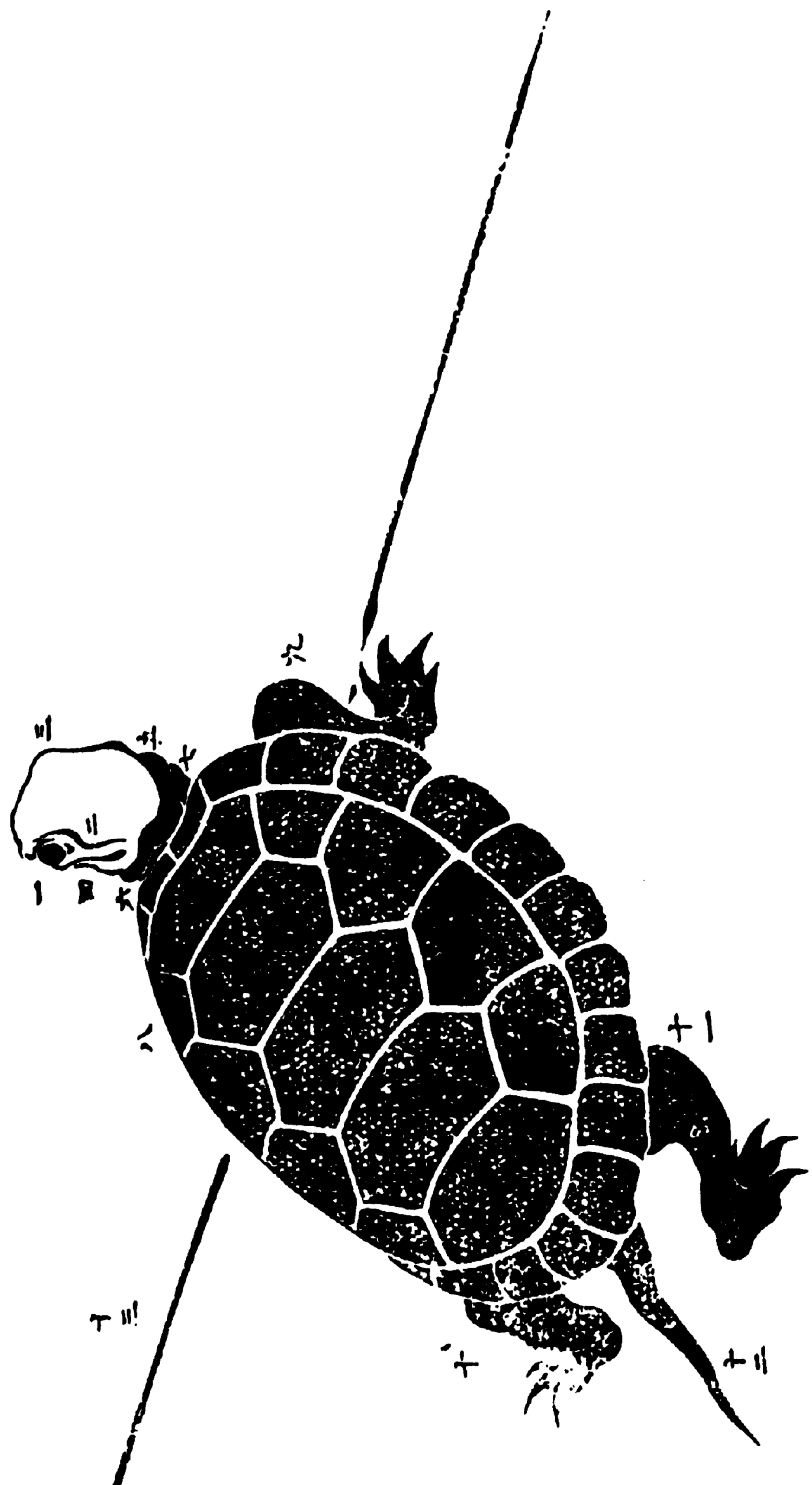
34年		摘要	拂	
月	日		圓	十錢厘
10	17	前葉ヨリ繰越	10	370
〃	18	石鹼一箱		400
〃	19	桶屋拂手桶直し		150
〃	20	バター一罐		800
〃	21	菓子		100
〃	22	乾物類		200
〃	23	ランプ丸心三本		60
〃	24	白砂糖二斤		300
〃	25	豆腐		60
〃	26	果物		150
〃	27	蕎麥		200
〃	28	靴墨		60
〃	29	煮豆及漬物		200
〃	30	挿花		250
〃	〃	米屋拂通帳の通り	16	000
	〃	魚屋拂同上	9	500
	〃	八百屋拂同上	8	000
	〃	炭屋拂同上	7	000
	〃	牛肉屋拂同上	2	500
	〃	酒屋拂同上	8	670
		決算高	64	970

學　書

34年 月	日	摘要	拂 圓	十錢厘
10	1	玉子十個		300
	〃	菓子		200
	〃	砂糖二斤		300
〃	2	火止石油壹罐	1	400
	〃	葡萄酒一瓶		800
〃	3	果子類		250
	〃	豆腐		60
〃	4	茶一斤	1	600
〃	5	鰹節三本	1	000
	〃	牛肉		600
〃	6	雨傘一本		800
〃	7	土瓶一個		200
〃	8	菓子		100
〃	9	玉子十個		350
〃	10	珈琲一斤		600
〃	11	メリケン粉一斤		70
〃	12	鰻飯二ツ		600
〃	13	客茶碗五個		700
〃	14	ビスケツト一罐		600
〃	15	食パン二斤		120
〃	16	玉子十個		320
		次葉へ送る	64	370

賄　費　勘　定　帳

明　治　三　十　四　年　十　月

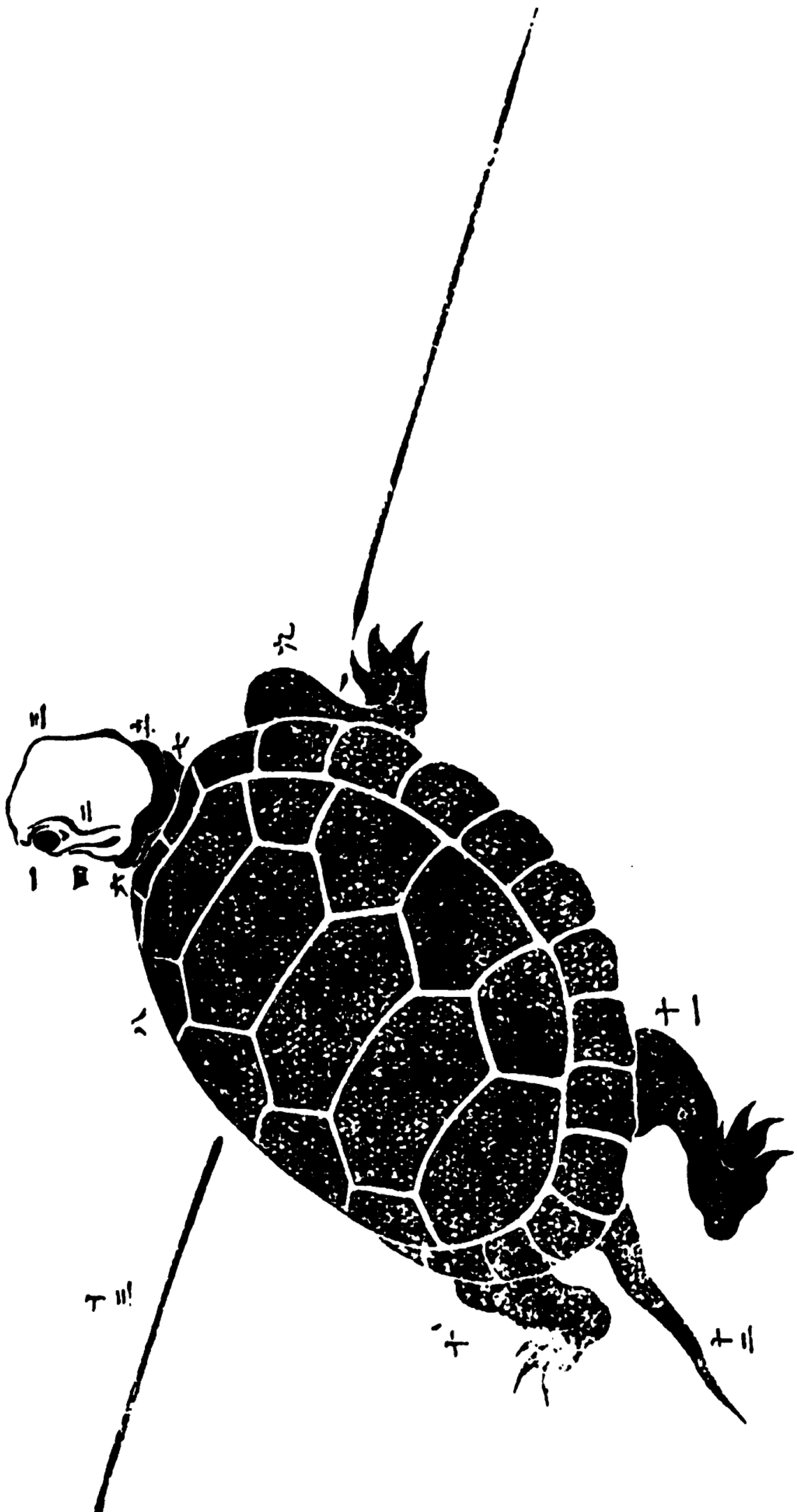


34年		摘要	拂	
月	日		圓	十錢厘
10	17	前葉ヨリ繰越	10	370
〃	18	石鹼一箱		400
〃	19	桶屋拂手桶直し		150
〃	20	バター一罐		800
〃	21	菓子		100
〃	22	乾物類		200
〃	23	ランプ丸心三本		60
〃	24	白砂糖二斤		300
〃	25	豆腐		60
〃	26	果物		150
〃	27	蕎麥		200
〃	28	靴墨		60
〃	29	煮豆及漬物		200
〃	30	挿花		250
〃	〃	米屋拂通帳の通り	16	000
	〃	魚屋拂同上	9	500
	〃	八百屋拂同上	8	000
	〃	炭屋拂同上	7	000
	〃	牛肉屋拂同上	2	500
	〃	酒屋拂同上	8	670
		決算高	64	970

34 年		摘要	拂	
月	日		圓	十錢厘
10	1	玉子十個		300
	〃	菓子		200
	〃	砂糖二斤		300
〃	2	火止石油壹罐	1	400
	〃	葡萄酒一瓶		800
〃	3	果子類		250
	〃	豆腐		60
〃	4	茶一斤	1	600
〃	5	鰹節三本	1	000
	〃	牛肉		600
〃	6	雨傘一本		800
〃	7	土瓶一個		200
〃	8	菓子		100
〃	9	玉子十個		350
〃	10	珈琲一斤		600
〃	11	メリケン粉一斤		70
〃	12	鰻飯二ッ		600
〃	13	客茶碗五個		700
〃	14	ビスケット一罐		600
〃	15	食パン二斤		120
〃	16	玉子十個		320
		次葉へ送る	64	370

賄費勘定帳

明治三十四年十月



和畫通信講義（第廿三回）

山崎彩峨

墨畫にこれを畫かむには、まづ、淡墨にて眼球を畫き、次に、通常の墨にて頭頸を畫き、それより淡墨を含めし筆先に、濃墨を附して、濃墨の附きたる方を外側になして、甲の周圍を畫き、通常の墨にて手足尾を描き、濃墨にて甲線を入るゝあり。彩色のときも、龜は、墨畫とさしたる相違なく。濃墨にて眼球を畫き、淡墨にて、頭部、通常の墨にて頸部を畫き、次に、墨がちの赭墨を含めし筆先に、濃墨を附して甲を畫き、（畫法墨畫と同じ。）手足尾と畫き、濃墨にて甲線を入るゝあり。（但し、甲に小量の藍か、赭黄か、もしくは草色かを點ずるもよし。）



詠史百首（加藤千浪作）評論

海上胤平

柴田勝家

露はかりのこさぬみつのいさきよき
心はかめのかゝみなりけり

水は清きなどこそいへ、のこさぬ水のいさぎよきなどつゞけいふべからず、かめのかゞみとは、龜鑑といふ熟語を強て詞にいひなせるものか。杜撰ならずや。さて此詞は、俗歌者流の井上文雄などが、いひはじめたるならむ。かれが敎をうけたる人々の歌にをり〳〵見えたり。此作者も、文雄がをしへ子なればにや。さて東國の歌

のさま、殊更にわろくなせしは、文雄らがしわざなりとやいはむ。熟語を詞となせる、むかしよりある事ながら、そも詠みなしによりてよきもわろきもあれば、口にまかせていひがたきものぞかし。近きころ、水鶏を水のにはとりとよめる人ありて、さは木兎を木のうさぎとも詠むべきか



と、笑草にいはれたり。いはゆる龜鑑とは、龜と鑑とを合せていへる熟語なれば、龜の鑑と詠むべくもあらず。これも前の猿とおなじく、瓶といはまほしくて、事實を辨へざるものなり。

加藤清正

鬼とのみおもひの外の情さへ
われはや人もなひきよりけむ

鬼とのみ思ひの外などいとつたなし。見るにたらず。

明智光春

からさきの松の木陰にのりすてし
　心の駒もよにすくれけり

からさきの松の木かげになどくだ〳〵し。はた乗捨てし心の駒もとはいかに。かくては駒のすぐれたるに、光春が心もすぐれたりといふになりて、主客たがへり。

佐久間盛政

ものゝふは鬼こそよけれみたれたる
　世には佛も何にかはせむ

鬼佐久間といへるにつきて詠めるなるべし。さて、四句佐久間によしなし。はた盛政ごときいはゆる匹夫の勇なるもの、何の稱美かあるべき。

眞田幸村

いくたびかよせくる波をうちかへし
　なにはのあしの花と散りけむ

かくいひては、幸村が浪をうちかへしたるになりて、あやしきいひざまなり。あら浪のよせくる敵をなどあるべきか。さてまた、幸村をあしの花にたとへたる、似つかはしからず。

吹きすさふあらしに咲いていさぎよく
　難波のはるにほふこの花

石田三成

しばらくは石田の水もおちさらむ
　うら切こぼす人なかりせは

四句、うら切こぼすとはきゝとりがたし。田にうらといふべき縁語なし。戦にうら切といふ詞あれば、かくもてつけたるなめれど、こゝにはいひがたし。

もえそめし心しらねど難波江に

わしとはかりはおもはさりけり

木村重成

いまはにも心をこめしたきもの丶
　香くはしき名は世に匂ひけり

初句いまはにもとあるは、句勢なし。今はとてといふべし。一首のうへ、冑といふことなくては叶はず。この歌のごとくいひては、いつもたきものにのみ心をこめし人のやうにきこえて、重成とはしられがたし。

今はとてかふとにこめしたきもの丶
　その香も高く世にそしらる丶

（完結）

大和めぐり

井上頼文

六日（午後の記者は宗村氏なり）

晝飯後、笠置の山嶺を廻る。巨岩峻崖多く、道いと険し。行宮の遺趾といふ處に至る。繞せる棚も無くて、竹木しげりに繁れり。峰高く、谷深く、一歩を誤らば、千仞の底にまろびなむとす。徑にそひて登れば、龍樹虎岩、其の間に横れり。其の奇、其の景寫さむと欲すれども、筆力なきを如何にせむ。颯とふき下す松風に、誰かは、其のかみの鬨の聲を思ひいでざらむ。忠臣義士の熱血をそ丶ぎし跡、今もちしほの紅葉散りしく。誰かは、あはれを催さ丶らむ。まして、山かげ深う霧たちこむるあたり、天つ日影の小暗きは、其のいきどほり今に晴れざるにや。（評、懐古の情、何ぞ堪へむ）

太平記、笠置行幸の條に、

忝くも、十善の天子、玉體を、田夫、野人にかへさせ給ひて、そこともしらず、迷ひ出で給ひける、御有さまこそ、あさましけれ。いかにも

して、夜の内に、赤坂城にと、御心ばかりを盡させけれど、かりにも、いまだ習はせ給はぬ御歩行なれば、夢路をたどる御心地して、一足には止み、二足にはたちとまり、晝は青塚の陰に御身を隠させたまひて、寒草の跡なるを御座の茵とし、夜は人も通はぬ野草の露わけ迷はせたまひて、羅穀の御袖をほしあへず。

とかくして、夜晝三日に、山城多賀の郡なる、有王山の麓まで落ちさせ給ひけり。

とあり。おのれ此の文を讀むごとに、凄然として、



膚に粟を生ぜざることなし。誰か、亦こゝに至りて、巻を掩ひて嘆かざる者あらむ。

そも〳〵、元弘の帝よ、金剛の峯にかゝる白雲の、八重一重に頼みし赤坂の城は、つれなき嵐にふき破られむとは思ひたまはず。この草繁き黒木の宮に夜な〳〵、御夢おだやかならで、苔深き巖の白露、おきふし毎に、御心を碎かれ、軒ふく風を、玉だれのそよぐ音にきゝなしたまひしもあはれやな。やよ、藤房。こゝも豺狼の、人食まんずるけはひ。よしや。柴てる賤のむぐらなれ。楠とやらん、多

聞とやらんに、露のたづきをしばし求めむとて、火焔の皇居をのがれ出で給ひ、この幽谷のこゝしき岩根を枕としたまひて、如何なる、御夢をか結ばせ給ひけむ。松の雫の御袖は、いかばかり露けくまし〳〵けむ。(評、字々血涙)さても九重の雲深くおはしける、萬乗の御身をして、あめが下には、隠れ家もなしの御あ



げきあらせまつりけむ、虎狼北條が心よ。見上ぐれば、鬱たる老松、風無くして峯に聲あり。木の間のましら、聲さびしく、下行く木津川は恨を今に流すらむ。瀬音、いとすさまじ。笠置村、字有市、大川原村、字大川原など過ぎて、四時三十分ばかりにや。三重縣下、伊賀の國に入る。行く〳〵、上野まではと草刈る農夫に問へば、二里には足らざるべしと答ふ。又道ゆく小童に、こゝよりはと聞けば二里半なりと告げぬ。いづれまことあらむ。島が原村につきしは、六時頃ありけり。此の里よりは、一里なりと聞けば、月の光に道をたどりて、また歩を進めたり。やう〳〵上野の旅舍、白銀屋につきしは、七時四十分とぞ覺えし。此の日、行程凡十二里。

賴文曰く。賴山陽翁の笠置山詩に。

巨靈手拔地骨起　怪巖萬尺爭層累

横者爲樓豎爲堞　天作高城淹天子」
元弘之元秋八月　龍旂漂飖事草卒
黥賊蟻附緣間道　一敗蒙塵遂播越
率土何人非王臣　誰趨急難來謁
唯恃祖宗在天誘帝心　擎天一木眞良
君在臣敢死　臣在賊亡可指
唯願君心終始一」
笠山南指芳野山　再狩之駕不復還
九仞一簣終天憾　惜君忘却此時難」
吾來攀巖不敢履　時認梁柱鑿基址
藤公傳敕楠公跪　此處不知非邪是」
居民爲我指村墟　當時導賊實由渠
至今猶不交婚嫁　覥面唾罵視僕奴
嗟哉乎豈氓有眼讀何書。
寄聲人間士大夫

と謡はれしは實にうべありけり。

居民爲レ我指村墟　當時導賊實ニ由レ渠ロ
至レ今猶不レ交ヘ婚嫁　覥面雖爲視ニ僕奴ー

と、いはれつる如く、今に至るまで、その不忠をにくみて、あすかせ村とは交通を斷じ、婚嫁はさらなり、言語をだにまじへずといへり。まだかの、敵を嚮導せるは、この村なる桶屋の老婆なりきと、いまも傳へて憎みあへりいふ。

鶯の歌、梅の畫

鐵軒居士

本誌の卷首に寫眞銅版として揭げし鶯の歌は、天保嘉永の間、海内三百諸侯の中に、賢夫人の名高かりし贈從一位水戸烈公の夫人、有栖川登美宮殿下の御眞蹟なり。宮は故有栖川織仁親王殿下の姫君にて、文化元年甲子九月廿五日御誕生あらせ玉ふ。御幼少より御學問の才あさ〳〵からず、御歌と云ひ御筆道と云ひ、御師範申し上げる人々、常に舌を捲く計りなりしと。文政十三年十二月、水戸家と御緣約整はせられ、天保二年三月關東へ御下向、同十二月三日御結婚遊ばせられ、男女五人の子を擧げさせらる。御長男は水戸の御世嗣にて權中納言慶篤卿、次は二郎麿殿とて御夭死。次は七郎麿と申す。征夷大將軍德川慶喜公の御事なり。此宮水戸家へ御輿入の頃は、内外他事を極め、殊に藩中は甲乙兩黨に分れて、紛爭軋轢に血を流し、又幕府の有司は、只管烈公の剛果明察を忌み嫌ひ種々に讒搆せしかば、公は遂に兩度迄嚴譴を蒙り、幽屛せられ玉ひぬ。宮は元より御心雄々敷ませしかば、此間に處して外柔に、内剛く内助の功多かりき。されば、公常に、此人丈夫ならんには共に國政を料理して、天朝幕府の爲め、一廉の御役に

も立つべきものをと宣ひしとか。公薨去の後は貞芳院と號し、水戸に在せしが、國難頻りに打續きて、朋黨彌益烈しうなりゆき、權臣跋扈して、幼冲の君主をあるかなしに振舞ふ折にも、此宮をば畏れ憚かりて、仰せ言あれば謹んで遵奉せしとかや。明治維新後は、東京小梅の邸に引移り在せしが、廿五年一月十七日風邪に罹られ、氣管支加答兒とあり、醫藥効を奏せず、終に廿七日午後一時逝去せらる御年八十九歳と聞えぬ。御病中、皇后陛下皇太子殿下より、御見舞として御菓子を賜はり、又逝



(4)

去の趣叡聞に達するや、兩陛下より特に吊祭料五百圓を下賜せられたり。御遺骸は水戸に送り、常陸國久慈郡瑞龍山なる水戸家代々の墓地へ葬らる。此宮御學問御器量の勝れ玉へることは、今に至つて水戸士民上下の齊しく稱揚し奉る所にて、和歌に堪能にして筆蹟の優美なりしことは、寫眞に依つて其一斑を窺ふを得べし。

同じく本誌の卷首に掲げし梅の畫は、立原春沙女史の筆なり。文政天保の間、繪畫を以つて世に聞えたる者指を屈す

るに暇あらず、而も關東に在つては、谷文晁、渡邊華山、立原杏所を以つて巨擘となす。女史は杏所先生の長女なり。名は栗、字は沙々春沙と號せり。母は松平氏(尾州の人)文化十二年二月生る。立原氏世々水戸藩に仕ふ。杏所先生文武の才幹あり。最も深く烈公に信任せられ、身要職に居り、書畫鑑定に長ず。女史幼より穎悟、好んで書籍を讀み、長ずるに及んでは、博く經史に通じ、又書畫を善くす。先生之を愛し、客の法書名畫を持ち來りて鑑定を請ふ者あれば、女史を呼で之を示し、彼處は好し此處は惡しと一々說聞かせし故、其技日に月に進みしと云ふ。杏所先生交道甚だ廣く、名流英才の往來虛日なく、女史の才學を愛して娶らんと請ふ者多かりしも、皆拒んで應せず、其心終身嫁せず、文墨を以つて一家を爲さんとせしに在りしが如し。年二十五、加賀侯の夫人に仕ふ。

一日命に應じ、屛障へ大着色にて花卉翎毛を畫きしに、丹碧燦爛として姿致生動す、見る者嘆賞せざるはなく、是より恩寵益渥し。女史性謙厚、

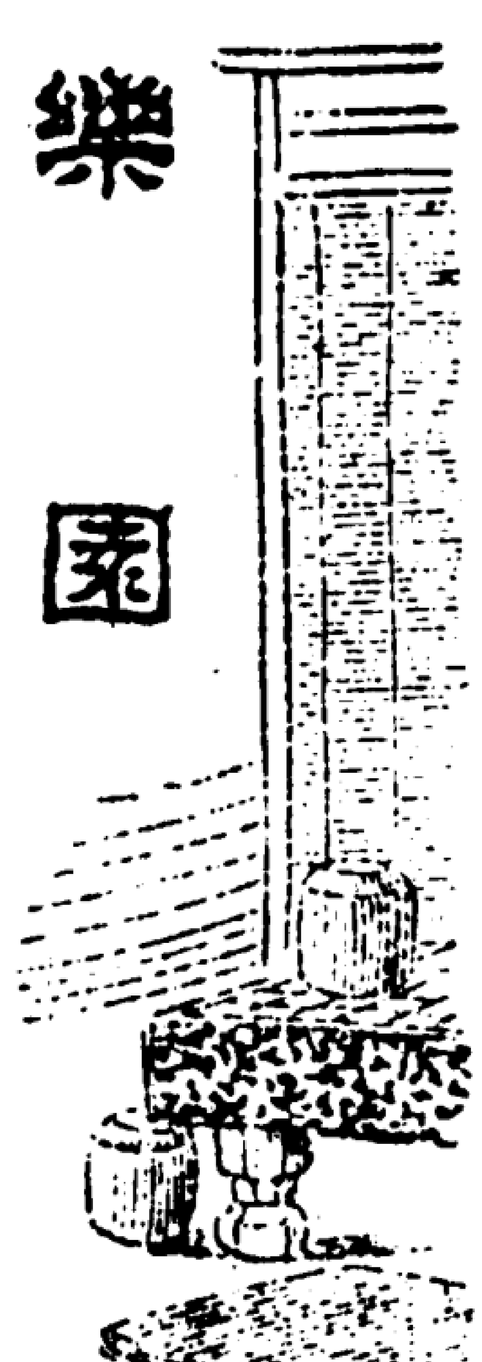


奉仕十七年の久しき、未だ嘗つて一日も其職を曠廢せしことなし。安政二年十一月二日、俄に胸痛を患ひ、翌三日遂に歿す、享年四十一、駒込海龍寺先塋の側に葬る。嘗つて杏所先生と親しき書家某、女史を娶らんとて、其意を致し、先生之を許さんとせしに、女史肯かずして、妾不敏と雖も、書家者流の妻となるを欲せず

とて拒絶せり。又烈公一日其家に就き、女史をして月琴を彈せしめ、久しく耳を傾けて聽聞し玉ひしが、軈て歸殿の後多く物を賜ひ、猶出仕して一曲を彈せよとの命ありしも、固く辭みて遂に參らざりしかば、或人何故左程頑固には辭し玉ひしと問ひしに、女史色を正うして、書は先人より傳へられし技なれば、是にて召されんには喜んで參殿仕るべきも、月琴は我儘に學びし遊藝にて、屢貴人の聽を汚すべきものにあらず、殊に武士の女が遊藝にて主君に召されんは、何とやら後めたく、且先人の心志にもあるまじと思ひ込みたれば、懇の御召憚り多かりしかど、固く辭み參らせしなりと語れり。此事いつしか公の御耳に達せしに、流石は任太郎の娘程ありて、中々の剛情者なりとて打笑せ玉ひしと云ふ。任太郎は杏所の通稱なり。

因云ふ、駒込海藏寺には、翠軒杏所兩先生の墓あり。翠軒先生の碑は自身の撰文にて、杏所先生之を書し、杏所先生の墓は、鹽田隨齋の撰文、卷菱湖の書なり。又女史の碑文は、山形鼎三の撰文にて、表面には、春沙女史立原氏墓と記せり。

樂園



小説　雪の梅（下）

饗庭篁邨

細川賴忠の娘梅子は車夫良藏が扶けたる老女を訪ひて慰んとまた良藏の車にて萬年町に來たり車より下りれば良藏は心得膝掛を肩にして先に立ちながら、隨分狹い路次でございますから雪解の雫が

まだ兩方の庇から垂れて御衣が汚れます御肩掛をモット上から……夫ではお先へと路次へ入りしが立歸り、お孃樣昨夜先に助けました奇特な車夫が見舞と見えて丁度參つて居ります旦那樣も是非其人の宿所姓名が知りたいと仰者いましたが幸ひでございます……ハイ成たけ眞中をお通りなさましと案內して間邊お吉の家近く來れば、夫はお前さん方仕合せであつた本所で細川さんといふ方か御主人が夫ぢやサァお抱への車夫も自然と能い人になる譯だ、と聲高なるに中へは入りかね梅子良臧は顏見合せ此方に彳みて其の言の終るを待ては、斯くとは知らず家の中には晴々しい笑ひ聲、ナニ私かエ私は直近い田島町だ是でも名はあるよ田島町で伏屋松太郎といふのだが左樣な面倒臭い事をいふより太郎松といふと直に分かるよヂウ足かけ五年も居るから用が有たら何時でも左樣云てお出なさい今日も朝早く一寸見舞に來やうと思つて居ると平生お世話になる旦那場から向島までと雪見のお供よお晝を御馳走になつて歸つてから來たのだから遲くなつたがマァお前さんも大した事もなくつて結構だ……ナァニ禮になんぞなら冗だが用があつたら遠慮なく左樣云てよこしなさい此方等は足手の働らきで濟む事なら何でも賴まれてあげるから家は交番で聞けは直知れるお前さん方も年を寄つて斯うして居るのは不仕合のやうだが左樣いふ慈善の方に惠まれたのは、また幸福サ明日は嬶をよこすから何でも遠慮なく用を云なさいオ、誰かまた來たやうだ大事になさいよ、と力を付けて戶外へ出で、ヤァお前さんは昨夜の方だネ昨夜は有難うございましたと良臧に挨拶するうち梅子は傍に立てわれば、夫と察して、今朝も旦那樣が御見舞下すつたそうで二人とも大層悅んで居ります

サア貴孃雨垂が掛ります中へお入りなすッてと會釋して足早に去るを梅子はしばし見送りけり

オイお爲今歸ッた悦びねヱ二人の婆さんは方々から惠み金や見舞物で大悦びだその嬉しい勢ひで病氣もズット能いとよ夫に聞ねヱ昨夜助けて呉れた車夫の旦那がまた能い人で今朝自身見舞で五圓置いて行たとよ今もまた昨夜の車夫が供で奇麗な孃さんが……左樣よ此方等の所より汚ない所へ來なすッて世には優しい心の人もあるものだトキニ是で休んぢやァ勿体ねヱ御馳走の腹こなしだ一丁塲やッて來やう……ナァニ此樣な時が車夫の稼ぎ時だナと土間の隅より草鞋を出すところへ、モシ伏屋松太郎さんと仰有るのは此方かネと古袍を提げた五十ばかりの男、ハイ松太郎は私ですが何の御用ですネ仕事なら今出がけのところですから何方へでも參りますと云ながら不思議そうに顏を見れば、彼方も不思議そうにソコラを見廻し、夫ぢやァお前さんが伏屋松太郎さんですかネ私は善報社の者ですが懸賞小說の賞金を持て參りましたがと云かけて何は顏を見る、松太郎はヤァと云さま草鞋を投げ出し、何ですか夫ぢやァ私の書て出したのガ御採用にあッたのですかと眼を睜れば、善報社員は福々しく打笑ひドウモ伏屋さん捜しましたせ御投稿の雅號が此君園主とありましたので建仁寺垣でも折廻した奇麗の御家かと失禮だが此等を幾遍も通り過て仕舞ましたと內に入りて腰を掛くれば、イヤ夫は濟ませんでしたナニ雅號でも何でもないのですが若し當選したとき俗名でも可笑いので出鱈目に付けたのでトンダ御手數を掛けましたお蔦お茶でもあげなと手をはたいて家へ上り座に請ずれば善報社員は袍より紙幣の封じたるを出し、まづ是は懸賞の十圓でございます就まし

ては編輯員が御目に懸つて御相談致したい事もございますし今後も尚は續いて御投稿を願ひたく甚だ恐れ入りますがお次手の節社へお立寄を願ひたう存じますと詞を改めて述ぶれば、松太郎は頻へ手を加へ、夫は有難うございます明日にも早速御社へ伺ひますと云へば是へ御認印を願ひますと善報社員は請取を取りて立上りながら、伏屋さん此御住で此君園主は小説ですぜと打笑へば、夫では今度は是と立派な名で驚かしませうと共に笑ふて送り出る夫の姿を竊に見て嬉しいながら、女房は悲しくホロリとするを袖に拭ひ、マア何時そんな書物をおすつたの些とも知りませんでしたよ懸賞小説の當撰とはエライ事ネエ、と笑顔ながらも底には涙、イヤお前に隱してこんな事をしちやア訝しく思ふだらうがマサカ字華に錢を取られたより能からう實は斯ういふ譯よ己も斯うして朽果ても

と少しの暇にはお前も知てる通り新聞雜誌を氣をとめて讀んで腹の中ぢやア小説でも書て見やうと野心をおこして居たところ仕合と車夫といふ題が出たら此で一番と實地經驗のところを符牒入で書上げて密と出したのよトコロが素人にしちやア車夫仲間の事情に委しいぐらゐで當選したのだらう此積りで外の題でやりやア沒書は知れた事だ……何處で書いた……家でも書た外でも書いて淸書は新屋の二階をかりて仲間の規則を書くと云てやらかした……是をお前に隱したのを變に思ふだらうが當にもあらねエ事で紙筆を持ち出せばまたお前が昔の事を云て濟ねエ〳〵が始まるから其の心配をさせない爲とまた沒書になつたときナンボ夫婦中でも極りが惡いからナ……夫がサ手心のある事なら何も隱してやりもしねエが小説は始めてだからな……ハイ〳〵是からは度胸で稽古半分にお

前の居る所で書ます……ソラ〳〵其のお氣の毒だの濟ねヱのと愚知が出るから隱したのだナ是が緣で善報社へ職工にでも入れるやうならまた元の貧書生に變ッて大勉强をやるよ前途を祝して大に祝ふべし國旗でも揭げラッパでも吹くか太郎は道の惡いのに何處へ行たオイ是は臍の緒切てはじめての潤筆だ悅んでお前の方へ納めておきな先づ斯うなつて見るとお前の云ふ通り今日は一仕事濟んたのだから休むとしやう……ヘン直斯う尻が暖まると惰けるから協はねヱと夫婦悅び語り合ふとろへ御免なさいましとまた丁寧なる案内にヲヤまたお客樣だが左樣は悅びの當はねヱがと松太郎が障子を明ければ、戶外に良藏のニコ〳〵顏、ヤア是は先刻お目に懸ッたが如何してまた……兎も角もお入んなさいてんな汚ない家だが御同業だオイお蔦昨夜の慈善車夫君のお出だ、オヤマア能くサア此方へと車夫同士と思へば遠慮なく辭をかければ良藏はモヂつき、誠に突然でございますが主人が是非御目に掛りたく參りましたが、ヱお前さんの御主人、ヘヱ、私の所へカネと驚くうち早や細川賴忠、御免下さいと入り來るに、夫婦はマゴ〳〵、突然出まして甚だ相濟まぬが昨夜此の良藏が御出合申したを御緣に推參致しました決して〳〵お構ひ下さるなと慇懃なるに尙ほ困じ、誠に汚ない所で……夫ならお前さん其の膝掛でも此へ敷いてと良藏に云へど是も如何致しましてと辭義ばかり、據なく松太郎は初對面の口誼を述ぶれば、賴忠は座を進め早速ながら伺ひますが貴方の母御は伏屋お吉殿とは仰有らぬかと問つゝ顏を打ち守れば、松太郎は驚きてヘヱ其の通り申しましたが如何して貴方は御存じと、云ふ間も遲しとシテ母御は御健勝か拙者は母御に大恩を蒙りし者、と忙しく問

はれていよ〳〵疑ひ、母は疾に歿しましたが細川様と仰有る方にお近付が有るといふやうな事は、仰有らぬでござつたらう噫御存生のうち御目に懸つて一言御禮申さぬが遺憾千萬、と是より三十五年前に奥州白川にて危急を助けられし事其後尋ねたれど行方の知れざりしを云へば、松太郎は今さら母の昔懐しく且つ其の奇遇を感じ偖其身の上を語りぬ、白川の布施屋の姪お吉は白川兵火にて焼失せしのち伯母とは別れて上州の知邊を便り養蠶工女となりて暮すうち繭買の竹作といふ者と夫婦になり一旦横濱へ出て可成に暮し松太郎をも儲けしが松太郎が七歳のとき病死し父は内助を失ひて家計も日々に傾ぶきこれも松太郎十二歳のとき亡せたればあとは雇人等のほか親戚もなく松太郎は十四歳にして家もなき者となり諸方漂泊中にも學問に志し廿歳より朝は新聞配達して晝は學校へも通ひしが夫にては學資續かずつひに新聞配達は止め夜は人力車夫となり晝は相變らず學校へ通ふうち或雪の夜に道に惱む老婆を見かけ無賃にて宿所へ送り届けしが今の妻お蔦の祖母にて孫と二人の貧しきを見兼ね訪ひ慰めて力となるうち祖母は重病に罹り終りに臨みての賴みに終にお蔦と夫婦となり間もなく太郎の出來しより學事も廢して只の車夫となりしなり、賴忠は始終を聞て亡母御への報恩にいかにとも力となるべし先づ母御の追善をといふを松太郎は押し止め母のこと我事の知れしもお吉といふ名によりてなれば彼の老母は幸ひ斯る心あたりもあればと善報社の事を述ぶ二人の養ひを母への追善となして玉はるべし此方れば、賴忠は膝を打ち其の善報社は我も出資者の一人なれば萬事都台よかるべしと是より直ちに善報社との相談整ひ松太郎は雜誌編輯の助手と宿直

人を兼ねて社の一隅に引移る事とあり、薄命の老女二人は松太郎の住し家に移されて細川家より養はれしが是も盲目の方は昔左る屋形の老女役にて病に罹りしは其の召仕にて零落の後も主従艱苦を共にせし者なりしとぞ、斯くて松太郎は梶棒を捨て筆を握り文界へ突進すれば妻はまた夫を扶け子を育み常盤の色に色添へん爲の錦の栞の秋を喜び望む身となりしとぞ。

（終）

維新の女傑 村岡勤王談

森林黒猿

艶色を以て世に傳はりましたるは、衣通姫、勾當内侍で厶いませう。文才を以て世に稱へられまするのは、紫式部清少納言で厶いませう。されども婦人にして、皇國の爲に力を盡し、生きて祿を賜はり、死して位を贈られました者は、實に近衛家の老女、津崎村岡を以て始めとします、斯る傑女は果して錦の褥の上から生れ出でましたか、そもそも又、破れ疊の上に人と爲りましたかと云ふに其實雨洩に卑屋の中に生れいで丶、貧しき生計に身を碎いたのであります。

村岡の父は、大覺寺の宮さまの諸大夫にて、津崎筑前守と云ひ、村岡の幼名を梅子と稱して、幼き時より至つて怜悧でありましたが、家が極めて貧困なので、思ふ樣に敎育をする事が出來ませんから、兩親も殘念がつて居ると、適ま近衛家の老女小牧と云ふ婦人が、筑前守方へ用事あつて參りました時、此の梅子の怜悧なるを觀まして、是は慾して置くは惜しきものゆゑ、近衛家へ御奉公に差上げるが宜しからうと勸めますするので、兩親も大に喜びまして、小牧を賴んで御奉公をさせたので

ありまず。之が村岡の十三の時でありまして、それより安政五年、井伊大老が京都へ手入れとして、大獄を起すまで、凡そ六十年の間、則ち村岡が七十二歳の高齢になるまで終始一日の如く近衛家に仕へ奉つて、忠勤を勵んだのでありまず。其間に此の女傑の言行にして、婦人の摸範となるべき事は澤山にありますが、先づ其の一事を擧げますれば、十三代將軍家定公の夫人天璋院殿が、關東へ御輿入の時でありまず。天璋院夫人は、元と島津家の息女なるを近衛家の養女と爲して、そうして關東へ御輿入れになつたのでありまするが、其の御祝言の時も、村岡は座に列なつたのです。尋常の者ならば、斯る大禮の席にては顔も容易に上げ得ないのですが、大膽不敵にして男勝りの村岡ゆゑ、さながら我が室にでも居る時の樣な面色で、七汁二十一菜の手厚き御料理に、盡く箸をつけて、ムシャ〳〵と喰べますから、傍らに居た人が、

「村岡殿、却々よく召喰れますな。」

と言つたら、村岡は平氣な顔にて、

「御意にござりまする。折角上樣から下し置かれた御料理、箸をつけねば御志を無にすると申すもの、其故一菜毎に箸をつけて賞翫仕りまする。」

と申しましたので、並居る人々舌を卷いて驚いたそうでありまするが、是を以ても、村岡が小事に頓着せぬ雄々しき婦人と云ふ事が知れるのであります。

又右の御儀式が相濟んで京都へ歸ると云ふ時になつて、將軍家より、

「何なりとも望の事あらば申し出よ、外ならぬ其方の願は、聞届けて遣はさん。」

と仰せられると、村岡は恭しく兩手を仕へ、
「主持の身にござりますれば、願ひの義とては少しもござりませぬ。」
と御辭退申上げると、將軍家が、
「如何に主持の身とて、又老の身とて、苟も此世に在るもの望みなき者はあるまじ、何なりとも遠慮なく申せ。」
とあながちに幾度か仰せられたので、村岡も餘儀なく、
「されば仰せに任せて、願ひの筋申上げませう。我儘なるお願ひながら、近衞家には天下の大事にたづさはりて、殿下を助け奉る程の家臣一人もなく、甚だ心細く存じまするゆゑ、御旗下但しは御家人の内からでも、天晴れ一大事のお役に立つべき賢者一人を下し置かれませうならば、有難き仕合せに存じ奉りまする。」
と申上げたので、人々も打驚き、將軍家も憫れて、暫時はお詞もなかつたそうです。村岡が身の私を思はず、義を重んずる氣質は、此にて明かに分りまする。其性質氣象彼樣に氣高き女ゆゑ、己に忤ふ者あれば少しも容赦せず、又人より頼まるれば、決して後へは引きませぬ。故に頼三樹三郎、梅田源次郎、梁川星巖など云ふ當時の勤王愛國の有志は、概ね此の傑女村岡に憑つて、各自の意見を近衞公へお聞きに達する事を得たのです。村岡も亦好んで、此等の勤王諸浪士と交りを結び、大いに君國の爲に盡すと云ふ美談は、次回に詳しく演じます。

（未完）



文林

春雪散風　高崎正風

うら〳〵と霞みし空のいつくより
　雪をさそひてかせのふくらむ

江上霞　大谷光偉

たつか音はかすみの奥に聞ゆれと
　入江のまつは見えすなりぬる

橋邊柳　前田利鬯

青柳のなかにかゝれるかけはしは
　いともてつりし心ちこそすれ

森鶯　水野忠敬

かけしらむほしか岡へのもりの中に
　鳴くうくひすの聲そきこゆる

新年梅　宮地嚴夫

ほきことの詞のはなもさきそひて
　年のはしめに匂ふうめかな

霞添山色　北郷久政

松かせもしつまりはてゝ萬代の
　かめの尾山にかすみたなひく

朝鶯　植松有經

松の戸のあくれはなきて花見にと
　いつるもをしきうくひすの聲

石　本居直臣

さもあらはあれ石とありてもなからへん
　玉みかくへくつるきとくへく

岡若菜　鎌田正夫

岡のへのゆきわけくれはゝつ若菜
　早くも摘みしあとそみえける

春松　内藤存守

さく花はまたほと遠しわか岡の
小まつか原にはる日くらさむ

野春風　岩崎勝従

白妙のそてさむからすなりにけり
すみれつむ野の春のゆふかせ

女學校　近衛貞子

榛木になりあむのちはみとり子の
おくれすおふる蔭にやあるらむ

竹雪有聲　前田朗子

ぬは玉のよやふけぬらむふる雪の
うちに聲あるにはのたかむら

白馬節會　柳原愛子

あさみとり霞めるそらのあを馬を
雲井のにはにけふやひくらむ

艦隊操練　小池道子

軍ふねいますゝむらし朝しほの
みちひくはた手動きそめたる

春鶯呼客　松平健子

人しれぬわかかくれかもうくひすの
こゑをしるへにとはれぬる哉

海邊霞　日野西廣子

貝ひろふをとめか袖も見えぬまて
かすみこめたるたけ芝のうら

谷春氷　坂田泰子

うくひすの聲はふるすに聞ゆれと
たにのなかれは猶こほりけり

水雷艇　田中瀧子

いろくつの波をくゝると見るか内に
仇のふねこそくつかへりけれ

賴山陽　小川直子

つくしかた雲の山かとたとりけむ
言のはひろく世にのこりけり

柳風　　中島歌子

ふくかせになひく柳のいとまなく
　見ゆるものからのとけかり鳬

本居宣長　　國分みさ子

敷島の道のしをりと咲きにけむ
　山むろ山の山さくら花

春の夜友がりゆきてかへるさ
たはむれによめる　　下田春興

梅か香かすむ夜半のみち　おぼろ月夜をたよりにて
たとりて來れは瓦斯燈も　やなきの蔭にはのくらし
つしのくるまも音たえて　ゆきゝの人のあともなく
あんまかみしも五百もん　横町はるかにきて行く

即興漫吟　　山崎紫紅

かぎりなく桑植ゑられて
　麥の蘖青きが灰見ゆ
目のかぎりこの有様の
　續けるは遠山までとぞ
我家の北の竹籔
　その節は常盤なからも
その細き葉は黄を帶びて
　折からや西風に戰る
八重椿盛りを過ぎて
　その花の形もかへず
落ちたるは髮美はしき
　美婦の首に似たるは

河柳堤に生ひて
冬空の芽差かたさは
悲しみて浮世を捨つる
尼御前のしほらしきかな
鵯の梢に集ひて
實をわさる擧動にくし
鳥獵や手に石とりわげて
なげうてば珊瑚を散らせり

かくてもつまか

思出の多き夏草
めぐり行く水の流を
いにしへに返すよしもが
森の鳩二人の宿世

清水橋村

さてもわが美くしき家
いつしかの風にくづれて
君遠く寂しき山に
追れたる今日の哀しみ
わたゝかき神のためしか
うらわかき戀の嫉みか
東西わが身はひとり
草澤の水にさすらふ
梓弓春立ちくれど
幽禽の鳴音かなしく
わりなしや胸は秋の日
紅葉の風に散り交ふ





懸賞和歌

伯爵東久世竹亭先生撰

都立春

天

讃岐坂出町 鎌田光惠子

にきはしきみやこのそらの朝けふり
かすみと立ちてはるは來にけり

評、いとあたらしくておもしろし。

地

東京本郷區駒込西片町十番地 三浦とき子

きみか代の花のみやこにはるたちて
まつさくら田やかすみそむらむ

評、調工みにいひおはせたり

人

東京本所區仲之郷竹町十一番地 宮内千代子

みやこ人ゆきみくるまをひきかへて
うめ見もよほすはるはきにけり

評、これもいと工におもしろし

秀逸

肥後國鹿本郡 野口靜子

大きみの千代田のみやこうらうらと
かすみそめつゝはるはきにけり

伊豫宇和島町 吉良貞子

あへて世の春のひかりはきみのます
ひかしのみやこはしめあるらん

伊豫宇和島町 小田操子

君のますひかしのみやこかすみたち
めくみあまねきはるはきにけり

青森上北郡 野坂みね子

野に山にかゝるかすみもこゝのへの
みやこよりこそたちそめにけり

東京赤坂區 川村作子

たから田の大城のまつのこすゑより
　はるのすかたは見えそめにけり
　　長崎市西山　日高かす子

しら雪のつくはのやまもかすみつゝ
　みやこのそらにはるは來にけり
　　東京下谷區　椎野清子

あけわたるそらにも春のいろみえて
　かすみたなひくこゝのへのみや
　　甲斐甲府市　上田おほ子

うち日さすみやこの空そかすむなる
　くも井よりこそはるは立つらめ
　　三河隨園社　河合縫子

こゝのへもひとつに霞むふた重はし
　はるたちわたるしるしあるらむ

懸募和歌一千三百餘首に上り紙面の都合上、遺憾ながら悉く掲載すること能はず。いづれ機を見てのすることあるべし。（編輯者）

二月廿日兼題

朝鶯

天　東京四谷大番町八十三番地　山本梓子

あをやきのいともてぬける朝つゆを
　たまとめてゝやうくひすのなく

評、朝露の玉の光り、いと〳〵うるはし。

地　廣島縣安佐郡戸山村　衣笠澄子

梅か香にそみしこゝゑもうくひすの
　はつ音にうつるあさはらけかな

評、すぐれて高き初音に選者も心うつりぬ。

人　四谷本村町三下田方　篠田圓子

あさはらけかすむ川邊のあをやきの
　いとものとけきうくひすのこゑ

評、とりたつるふしもなけれど、またすてがたし。

甲之部

東京　吾妻ちか子
うくひすのけさなく聲にうめもまた
　にほはぬやともはるこゝちせり

肥後　仁保しま子
あさおさなふみよむ窓のうめに來て
　われおとらしとうくひすのなく

大阪　桝田益子
おほろよのおこり霞めるうめかえに
　こゑもにほひてうぐひすのなく

東京　名木山勝子
めつらしや宿のうくひす二つ三つ

また咲きそめのうめをたとりて
名古屋 鷲尾米子

手まくらのゆめはよふかき朝まとに
日とくいてぬとうくひすのなく
讃岐 鎌田光恵子

文つくゑのちりうちはらふあさな〳〵
まとのとちかくうくひすのなく
大阪 中舘やう子

ゆきはらふおとのみきゝし竹むらに
けさめつらしくうくひすのなく
肥後 佐々冨枝子

朝日かけのとかにのほるはなの枝に
にほひかはせるうくひすのこゑ
神奈川 上田ゆき子

あさな〳〵さきそふ梅のかをとめて
なくねゆかしきうくひすのこゑ
秋田 古瀬りく子

とくおきて朝きよめするはなそのゝ
はなにおとらぬうくひすのこゑ

乙之部

あさまたき清き音しめてうくひすの
うめのはやしのおくになくかな
松下かすの子

あさ戸出の空ものとかにはろめきて
かすむをかへにうくひすのなく
荒野たに子

うくひすもけさゝく梅におくれしと
ふるすはなれてはつねなくらむ
野瀬ます子

朝またきのきはにきなくうくひすは
そのふのうめそやとやしめけん
春岡しげ子

賤か屋のゝきはのうめにやとしめて
なくうくひすのこゑのゆかしさ
臼井ひさへ子

朝かすみまたをくらきにうくひすは
うめかゝをりをとめてなくらむ
蒲生鶴子

春かせのうめか香おくるたにの戸に
あさ日にほひてうくひすの鳴く
谷口房子

さき匂ふはなゝきさともうくひすの
はつねのとけきあさほらけかな
青木たま子

まちわひし梅やさきけんあさな〳〵
こゑものとかにうくひすのなく
藤野保子

朝とこのまくらとひくるうくひすに
ゆめのなこりもおもはさりけり
池田松枝子

うくひすはとくこそ来なけ此ころの
あさいはひとのならひなれとも
村上操子

朝ほらけかすむのきはのあをやきの
いとよりかけてうくひすのなく
矢野浪子

朝な〳〵まなひのまとのくれたけに
ふしものとかにうくひすのなく
小田操子

あさかすみ立かくしたるをかのへに
なくうくひすのこゑそきこゆる
岩間種子

あさ日さす垣はのうめにうくひすの
山田よね子

こゑさへはなとにほひ出にけり

朝ほらけおきいてゝみれは長閑にも
にほへるうめにうくひすのなく　服部充子

うくひすは竹のはやしをねくらにて
よをこめてなくこゑのゝとけさ　鏡山増代子

まとちかきのきはの竹にふしなれて
あさことになくうくひすのこゑ　岡田春子

夜をこめて谷のふるすやいてにけん
けさうれしくもきなくうくひす　瀬戸ゑい子

けさゝまたなくうくひすに夢さめて
身のおこたりそおもひくらるゝ　林環子

うれしきは梅もかをれるまとの戸を
あくるあしたのうくひすのこゑ　永井さい子

をす近くうめか香にほふあさほらけ
こゑをゆかしくうくひすのなく　三好珍子

うき臥もしらすやあるらむ朝またき
たけのはやしにうくひすのなく　伊勢村花子

朝かゝみとるてもよそになりにけり
なくうくひすにこゝろうつりて　宮内千代子

いきたなき我身なからもうくひすの
なくうれしさにあさいせられす　石川類子

あさまたきまなひの窓のうめかえに
こゝろありけにうくひすのなく　椎野濟子

をこたりをいさめかほにも朝な〳〵
まなひのまとに來鳴くうくひす　山田婦美子

なか〳〵によひさまされて嬉しきは
はるのあしたのうくひすのこゑ　宇高松子

くれたけの根岸のさとをおとつれて
ふしおもしろききけさのうくひす　椎野ぬき子

まとちかき軒端のうめにやとしめて
けさのとかにもうくひすのなく　椎野秀子

うくひすの聲をしきけはひとりねの
春のあさともいそかれにけり　本多きさ子

うくひすの聲をきかすはひとりねの
はなのあさとこおきうからまし　三宅中枝子

あさ日かけさすかのとけき竹むらは
ふしもよにゝぬうくひすのこゑ　竹尾みえ子

うくひすのねくらはなれてなく聲に
おのかあさいのはつかしきかな　綠友子

あさ戸出の風のまに〳〵うくひすの
こゑこそなひけにはのたかむら　名取正代子

朝日かけさすやまかきのくれたけに
ふしおもしろくうくひすのなく　木下鶴子

おく霜のこほろあさけにのとかにも
うちとけてなくうくひすのこゑ　佐野ふじ子

丙之部

朝な〳〵まつかひありて我かにはに
はやくもきなくうくひすのこゑ　泥堂きくよ子

うくひすの聲をねさめのともとして
あさいのとこをおきいてにけり　大村八代子

梅か香にゆめはさめにしねやの戸を
ひらくやかてにうくひすのなく　細谷まつ子

朝またきのきはのうめにうくひすの　林くに子

かなりゆかしときてやなくらむ

朝またきまとのとあけてなかむれは
うめのこすゑにうくひすのなく　長谷川まき子

山さとはあさほらけこそうれしけれ
なくうくひすにめをさましつゝ　長谷川初枝子

花ならはなりてかへらむこのあさけ
ゆきふるたにのうくひすのこゑ　木村木様子

梅たにもおもひかけぬをあさほらけ
ゆきの木の間にうくひすのなく　木村田鶴子

朝な〱おきわつらへるねやの外に
いさめかほにもうくひすのなく　田尻保代子

やま住のまとのとちかくこのあさけ
なくうくひすのこゑきこゆなり　久世眞子

あさほらけふく春かせのゝとかにて
はなをもさそふうくひすのこゑ　岩橋花子

のとかなるあさ日にゝほふ梅か枝に
はるをしめたるうくひすのこゑ　大塚小黑子

かほあらふ筒井のもとのあをやきに
今朝も来てなくうくひすのこゑ　大木光子

やまさとにすむかひありて朝な〱
きくものとけきうくひすのこゑ　千知波橘子

朝またきうちいて見れはうくひすの
はつれうれしきうめのしたみち　松村あさ子

うくひすは何にこゝろやとまるらむ
わかやとに来てあさな〱なく　岡田とも子

この朝けふしなれてなくうくひすに
たけを植ゑてしかひそしらるゝ　小林てる子

思ひねのゆめよりやかてきゝつきぬ
そのふに来なくうくひすのこゑ　岡田猶子

わか門のうめのはなみにひとくなり
あけよとつくるうくひすのこゑ　服部萬子

ふみくはる人にはあらてあさまたき
うれしきものはうくひすのこゑ　河合縫子

とくおきてみむとおもひし梅かゝに
はやくもなのるうくひすのこゑ　服部正子

窓ちかきひとむらたけにきこゆなり
あくるあしたのうくひすのこゑ　早川たれ子

朝またきあくるつま戸のひまもれて
まくらにゝほふうくひすのこゑ　奥山花子

おほつかないつこなるらんあけそむる
かすみのおくのうくひすのこゑ　椎野薫子

年ことにはるをしらせてやまさとの
あしたのとけきうくひすのこゑ　野口靜子

朝またきおきいてゝ見れはわかにはの
なさゝかくれにうくひすのなく　佐藤そう子

結ひてしゆめもおほろのあさまたき
まくらにちかくうくひすのなく　竹村竹里子

梅はやし木のまにかすむあさつくよ
狎れんとすれはうくひすのなく　横田音羽子

きく人もかはらさりけりあさな〱
おなしところにうくひすのなく　横田秋子

朝な〱ねさめのともとたのむかな
まくらのやまのうくひすのこゑ　阪本榮子

かせさむみあさしもこほる梅か枝に　山根久子

はやくも来なくうくひすのこゑ

のどかなる春のねさめのあさことに　牛山棠子
ゆめおどろかすうくひすのこゑ

朝かすみうめのこずゑは見ねれとも　大阪谷信子
なくねさやけきうくひすのこゑ

あさまたき梅のこずゑにうくひすの　伊勢村春子
目さめうながすこゑのゝどけさ

朝な〳〵おのかねくらをたちいてゝ　坂本登子
われよりさきにうくひすのなく

春のよのゆめはさめけりうくひすの　和歌きみ子
こゑよりあくるしのゝめの空

咲かぬ間の梅か枝つたふうくひすの　福原茎子
こゑもゆかしきはるのあさかせ

けさもまた霜のふるのにうちとけて　萩原季子
くりかへしなくうくひすのこゑ

起わひてしはしためらふ手まくらに　池田梅子
うれしくもきくうくひすのこゑ

あなうれしこゝろ有けにまとちかく　石川久子
あさいゝさむるうくひすのこゑ

あさまたきおきて聞かまし梅かねに　石川なゑ子
なくこゑたかきにはのうくひす

とくおきて聞そたのしきわかにはに　石川楽子
なれ〳〵しけのうくひすのこゑ

朝ことの目さましくさとなりにけり　田代綾子
のきはのうめにきなくうくひす

いきたなきあさゐの夢をさましつゝ　田代艶子
のきはのうめにうくひすのなく

あさかせはまたさむけれと梅か枝に　坂本光子
はるたちぬとやうたふうくひす

朝日かけかすみそめたるまとの外に　田中嘉鶴子
なくうくひすのこゑをきくかな

しはしたゝ朝戸なあけそうくひすの　福田よし子
なくなるこゑのたねもこそすれ

うくひすもこゝろありけに唱ふなり　椎野鋭子
あさひのとけきうめのこずゑに

あさきよめまたせぬ庭をはやとひて　日下徳子
わたらしきまてうくひすのなく

うれしくもとくおきいてし此あさけ　眞鍋直子
まとのとちかくうくひすのなく

うくひすのねくらの梅やさきつらん　山田登子
にほひこほるゝけさのはつこゑ

うら〳〵とあさ日にほへる梅か枝に　中島信子
ふしおもしろくうくひすのなく

朝きよめ〳〵はてしにはのうめかねに　林ひさ子
こゑもさやけくうくひすのなく

よの塵もまたゝちやらぬあさまたき　林まとか子
こゑもさやけくうくひすのなく

うくひすのなくねに夢をやふられて　太刀川貞子
まとのとおせはうめのかそする

うめさきてかすみたなひく朝ことに　阪元たか子
木つたひてなくにはのうくひす

このあさけ又おたらしくきこゆるに　三浦とき子
きのふもなきしうくひすのこゑ

うれしくも初音もらしゝうくひすに　岡田美寿子

今朝のさむさもわすれはてつゝ

さきにほふ梅をとひくるうくひすの　佐藤玄子
あさなく＼のこゑのゝとけき

軒ちかくなきおとつれてやまさとの　瀬木せき子
あさ縦ゆるさぬうくひすのこゑ

朝なく＼たけのはやしをおとつれて　高澤れき子
ねさめうれしきうくひすのこゑ

文まなふまとにあさひのさしそひて　高澤やす子
かけうるはしくうくひすのなく

朝またきめさめてきけはまとちかく　武田龜子
さへつりかはすうくひすのこゑ

朝なく＼きなくうくひすあさことに　北島功子
ふしおもしろくなりまさりつゝ

くれたけのねくらをいてゝ朝なく＼　新　之子
ひとまちかほにうたふうくひす

うゝひすのこゑはにほへと心ちよき　石井豊子
あさいのとこそおきうかりける

窓ちかくうゑしはかりのたけにきて　稲垣政子
けさうれしくもうくひすのなく

うくひすの初音をきゝてこのあさけ　山田いね子
はるのこゝろになりにけるかな

今朝きけはいとも長閑にうくひすの　徳永廣子
うたふはうめのはなをめつらん

朝日かけのとかにゝほふうめか枝に　徳永萬壽子
こゑあたらしくうくひすのなく

朝ほらけたによりいてしうくひすの　徳永桃子
なくはつこゑにゆめはさめけり

朝戸なはあけなははにけんいかにせん　河田いし子
のきはのうめにきなくうくひす

うくひすにおとろかされてあさ床の　長尾小榮子
ゆめものこれるうすつき夜かな

我やとのそのふのたけにふしなれて　吉眞貞子
ねやのあさとにうくひすのなく

さく梅の香にあくかれてうくひすの　高森かし子
ゆかしきはつねけさはきゝけり

うめの花また香もあさきあさ戸出に　岩間ちゐ子
はつうくひすのこゑをきくかな

あさいしておこたる人にきけとてか　吉濟たき子
まとのとちかくきなくうくひす

あさ日かけ匂へるのきのうめか枝に　梯たけ子
こゝちよけなるうくひすのこゑ

朝かすみ小くらきまとにうくひすの　宮田けい子
さゝなくこゑのきこゑくるかな

友とちにとはるゝよりもうれしきは　早川のぶゑ子
あさうくひすのはつねなりけり

あつさ弓春のたよりとうれしきは　内田とく子
今朝きゝそめしうくひすのこゑ

朝いするひとにきけとかうくひすの　平尾あさ子
ひとく＼となきわたるなり

またさかぬ梅のこゝろやうらむらむ　川村松子
あさことになくうくひすのこゑ

くれ竹の一夜のやとにふしなれて　片山あや子
あくれとさらぬうくひすのこゑ

あさことに来なく軒端のうくひすの　三井眞子

こゑなれさめのともとこそきけ

巳か巣をおしあけかたに出て來つゝ　三井松子
あさ戸いそけとうくひすのなく

梅かをるまくらのやまに來鳴きつゝ　日高かす子
あさいゆるさぬうくひすのこゑ

うくひすの聲をこゝろのあさきよめ　上原のふ子
ちりはみゝにもかゝらさりけり

朝なくくなくそたのしきのきはなる　田村多豆子
うめに來てなくうくひすのこゑ

のとけしなあさなくくにみやしろの　齋藤駒尾子
うめかゝさそふうくひすのこゑ

うくひすの朝なくこゑのゝとけさに　高橋つた子
さめにしゆめはおしけくもなし

あさひさす竹のあみ戸をおとつれて　河原芳子
のとけさそふるうくひすのこゑ

ふかみとり幾代へぬらむくれたけに　平井つれ子
ふしよくうたふけさのうくひす

けさもまたにはの梅か枝たつれきて　萩原とく子
うれしけになくたにのうくひす

としことに春をかされてうれしくも　平井澄江子
けさまたきゝつうくひすのこゑ

賤の男かあさきよめなすたまはゝき　角田ともゑ子
おとにもなれてうくひすのなく

朝日さすのきのすたれをまきあけて　四木しけ子
なくうくひすのこゑをきくかな

うくひすの初こゑきゝてこのあさけ　四塚まき子
とこを出つるもうれしかりけり

花になくこゝろゆかしみれやの戸を　鈴木秀子
あけさしてきくうくひすのこゑ

いきたなきひとにきけとか朝なくく　多河かずよ子
まとちかく來てうくひすのなく

ほゝゑめるのきはの梅にうくひすの　松尾ます子
あささらすなくこゑのさやけさ

こゝちよき春のあしたもうくひすの　横手なよか子
こゑきくやかておきいてにけり

羽かせにも梅か香おくるうくひすの　三上みき子
あさなくこゑのきよくもあるかな

うれしくも今朝はのきはの梅か枝に　伊藤滿江子
うくひすの來てはつ音なくなり

朝戸てにまつうれしきはうくひすの　八尾いへ子
こゑまちわたるはしめなりけり

しのゝめのれさめしつけき窓の戸を　内田さた子
あくるをまちてうくひすのなく

かのをかの杉むらふかくかすみこめ　坂巻よし子
けさのとかにもうくひすのなく

うくひすの今朝鳴く聲に目はさめぬ　三上みさ子
木つたふさまもいさ出てゝ見む

あさまたきひとりふみよむ窓のとを　古瀬とよめ子
あくるおそしとうくひすのなく

朝ゐせしみなみのれやのまとちかき　大神かつ子
うめにきてなくうくひすのこゑ

けさもまた節おもしろきうくひすを　高石と代子
あさいのとこにきくそうれしき

八へかすみ遠きなかめはわかれとも　村田まき子

なかの松はらうくひすのなく

けさも又暗くれゆかしきうくひすの
すかたもはなもかすむうめか枝　山口ふしゑ

あさおきて梅のこすゑなかむれは
はなさきそめてうくひすのなく　田口のぶ子

ほのほのと花みねそむゑうめかねに
うくひす來なくあさぼらけかな　村田よし子

とくおきて庭のくま〳〵さまよへは
おいきのうめにうくひすのなく　秋永ゆきゑ子

朝かすみこめて小くらききにはのおも
うめか香とめてうくひすのなく　筒井とし子

うるはしき聲はきこねぬうくひすは
むめのほつねのあさひなのかけ　坪内りき子

いつこにか宿はしめけんあさまたき
にはのまかきにうくひすのなく　武谷長榮子

さしのほる朝日もにほふうめか枝に
はつ音うれしくうくひすのなく　武谷雕子

窓ちかくなのりわたりてなか〳〵に
あされゆるさぬうくひすの聲　田村米子

朝またきふしおもしろきうくひすに
見はてぬゆめはさまされにけり　田村道子

うくひすのこゑにあしたのゆめさめて
さけはまくらのやまになくなり　水木とも子



二月廿日兼題

餘寒見舞の文

天

東京神田錦町一ノ二〇　名木山勝子

みつよつふたつ匂ひいで候梅が香にさそはれて、南の窓打ちあくれば、朝日のかげも何となう春めきて、四方の山の端うちかすめるも、嬉しうおぼえ候。今日しも、ゆかしき姿は見え候はねど、ほのかに、花のかほりと共に、賤が窓のほとりあつかしき鶯の初音こよなう嬉しう候ひき。かく、世はきさらぎのころほひとはなり申候へども、折々に、天つみ空よりひら〳〵と六つの花ちりしき候事の御座候まゝに、吹きかふ風のはだへおぼさむく候ところ、み齢高うおはせらるゝ祖母の君、さては、いとけなうましませる弟妹の君達など、いかに、おはしまし候やらむ。まづ〳〵、その御わたりには、いよゝみけしきうるはしう、敎へのくさぐさ言葉の花など、みてにつませ給ふらんと、喜ばしうぞんじ候。きのふけふは、實に、寒中のほどにもまして、寒さいとはげしう覺え候まゝ、學びやの御ゆきかひに、風などめさせ給はぬやう、御

養生專一に候。降りて、私方も、相かはらずに皆皆くらし居候まゝ、憚りさま乍ら、御安神下され度候。就いてはこの品、まことに粗末なるものには候へども、このほどさるしるべよりおこせ候まゝ、御目にかけまゐらせ候。先は、右、餘寒の御見舞まで。返すぐも、みなぐ樣御すぐやかにおはしまさんことをいのり申候。いやしらぬ賤が身の、なめげなることの葉のふしぐは、日ごろの御心やすさにまかせて、幾重にもゆるさせ給へや。あなかしこ。

評、思想ゆたかに文章流暢なり。書簡文として、まさにその体を得たりといふべし。

地

伊勢國宇治中之切　河原芳子

春とは名のみにて、冴え返りたる風の寒けさ。ほほゑみそめたる軒端の梅も、また根にかへるらん心地して、いと詫しう引籠り勝ちなる此頃、叔父上、叔母上、さては、秋様、夏雄様にも、いさゝかのお恙なうわたらせられさふらふや。伺上まゐらせさふらふ。まいて御地は、布引颪常にいみじう吹雪さへ少なからぬ程なれば、御老體のならはしいかゞさふらはんとて、案しわづらひはべり。例のやうにもあらねど、お心にかなへるが嬉しうて、殘んの雪のいさゝかながら、お目にかけさふらふ白魚の罐詰、しかるべうお賞味下されさふらへば、こよなきほいと存じ參らせさふらふ。先は、御見舞のしるしまで、雁のたよりにまかせはべるになむ。あなかしこ。

評、簡潔にして情味あり。

人

東京四谷大番町八十三番地　山本梓子

ぬば玉のやみのいづくに、など問はまほしきまで、さえかへりたる空のけしきのうたてさよ。武さし野の野末の宿は、わきて身にしむ甲斐がねおろしに、老もわかきも埋火のほとりさらず、冬こもりにたるきのふけふ、都もおなじやうになん承り侍るを、御わたりこぞりて、事なうおはしますらむ。君には、去年の御あつしさもはや名殘なうおはすと承りぬれど、雁の使もほどへぬれば、いともいともうしろめたうなむ。隅田の川風ぬるまぬ程は、御心せさせたまへや。この葛の粉は、吉野なる里のしるべよりものし侍りしにて、七種の數にはあらねど、すゞなすゞしろ、そともの畑に土かひしなれば、いさゝかながら、老いたる君のすゝろぎ給

はむ料にとて、見せたてまつるになん。田舍女のいやなきしわざとな、とかめ給ひそ。かすみの衣ぬぎもみださぬ頃ともならば、れいの親しきかぎりそそのかして、とぶらひ給へ。去年のかたみのちり打はらひて、侍ちまゐらするにこそ。あなかしこ。

評、文字よくとゝのひてなか〱におもしろし。

（以下原稿到着順）

宇高松子

衣更着の名もしろく、冴ねかへりぬる昨日今日の寒さには、やうやうひらきそめし柳の眉も、打ひそまりぬべう覺ね侍るを、いかに過させおはしますらむ。こゝもとには、幸にいづれも事無う侍れば、御心安うおぼしたまへかし。さて今朝しも、幼きもの等が、うしろの岡の雪消のひまより、やう〱あさりいで候はつわかな、いと少うは侍れど、老い給へる君達の御こゝろなくさめのよすがにもと、たよりにつけて贈りまゐらするを、よきにとりなし給ひしてよ。かしこ。

日高かす子

春たつとはこよみの上のみにや。冴ねかへりたる空の寒さ、一しほ身にしみ侍るは、暖かなりし此頃に、心ゆるみたる故のみともおぼへぬを、年老いたまふみかぞいろの君をはじめまゐらせ、うらわかき撫子たち、如何に凌がせおはすらん。かれて契りおきつる若菜摘む日々、今日明日とこそ樂しみおもへりしが、雪氣の空の空だのめなるも恨みになむ。されど、軒端の梅の獨り春をしめたるに來鳴く鶯の聲のみは、またなく長閑に聞ね侍り。山近き庵と見捨てたまはで、とぶらひおはせかし。さてもこの嬢子は、あるじが去年の落葉をふみ分けて、山狩りの得ものに侍れば、たゞ一羽ながら、あつものゝ料にもとまゐらするになむ。かしこ。

日下錦子

春たつときゝしより稍へにけれど、なか〱なる此頃のさむけさ、いかにすぐし玉ふらむ。わかきものどもゝ怠りがちにて、埋火のもとにのみ居より侍るを、老い玉へる御身にけましていかにとおぼつかなくてなん。例の御行ひもさることながら、風さゆる日は、少しはのどめ玉へかし。まめだち玉へる御心に、佛もさばかりはみゆるし玉ふらんとこそ、今朝とりよせつる蕨餅一皿、またるゝものにはなぞらふべくも侍られど、御つれ〱なぐさむることもやと參らするなれ。折ふしことしげく侍るを少し過しておどろかし侍らん。まづは御ありさまうけ玉はらまほしうて、とりあへすかくなん。かしこ。

篠田圓子

あれたる庭の梅すらも、さすがに春を忘れず、ふくらかにほころびそめ候を、此の一日二日は、更に又逆さかぬるばかり、空ふく風もさねかへり、蕾もしぼみはつるやうに覺ね候を、其の御やかたにては、御祖母樣を初め、御方々樣にはいかに御すごし遊ばされ候か。みけしき聞かまほしうぞんじ候。かゝる有樣にては、かれて御約束致し置き候ひつる梅見も、猶おくれ候へくと、いとおぼつかなくこそ存じ候へ。御家の御祖母樣などには、常に御すこやかに入らせらるゝ事故、さることもあるまじく候へども、私方の祖母などは、尤も七十路の高齢にも達し居り候事とて、今朝などは寒さの爲にや。少しく風の模樣にて、一同大に心をなやまし申候ひしが、只今にては、やゝ元に復し候やうにて、大に安心仕り候へども、御許樣にても、くれ〱御心用ゐ遊ばされ度、さらに申上げ候。扨このカシハ、御めづらしうは候はねど、先程、宿にてつぶし候ものにて、やゝやはらかきやう覺ね候間、餘寒御見舞の

こしろしにとて、御覽に入れ申候。御祖母樣の御口にあひ候はゞ、御の上なう嬉しう存じ候。みぎ取いそぎあら〳〵。かしこ。

林　くに子

寒中よりも餘寒のかた、兎角はげしき樣存ぜられ候得共、本年は殊の外にて、水のこゝろもいとゞ結ぼゝれて増さり候のみ、いと凌ぎ難くおぼへ申候ところ、御地あたりは、別けて北地に候へば、一しほの、寒威ならんとおしはかられ申候。御兩親樣始じめ、あなたさま方には、如何に御すごしあそばし給ふらんと、陰ながら御あんじ申上候。こゝもと、皆々時候にもあてられ申さで、無事に相暮し居申候まゝ、なめげながら、御心やすう思召給はり度候。随て、眞綿十把、生椎茸三斤、粗末ながら、當地の産物に候まゝ、御尋れの印までに、進呈いたし候間、御笑納なしたまはらば、こよなき幸に存候。烈寒の折柄、随分御いとひあそばされ候樣、祈上まゐらせ候。末ながら、御隠居樣へ、御見舞よろしく御傳へ願ひ上候。先は、餘寒の御見舞まで。あなかしこ。

高森　かじ子

寒中は過ぎしといへど、山の端にまだとけやらぬ雪見れば、餘寒のほどぞ思ひやらるゝ。此の御寒さを、母上樣にはいかにすごさせ給ふらん。つれ〴〵すぐれさせられぬ御身ゆゑ、雪のあしたかぜのゆふべも、思はぬ日とてなはきものゝ、日々のつとめにまぎれつゝ、みけしき伺ひまつらざりしつみ、御許したまはれたく候。御養生なほしばし、寒さもはげしかるべければ、御身御大切に、一に專遊ばされん事をねぎまつるになん。先は拙なき筆もて、餘寒御見舞まで。かしこ。

眞鍋　直子

春立し日より、一と日ふたひは、いとのどかなりし故にや。又々さゑかへりたる此頃のさむさ、冬にもまして一しほしのぎがたう思ひ給へらるゝを、そこもとにはいかにしごさせ給ふらむ。御祖母君をはじめ奉り、かぞいろの君にも、ちとの障りもあらせ給はず、いと平らかに入らせ給ふ御事ならんと、いと〳〵嬉しうは思ひながらも、久しうたいめん給はらねば、いと心もとなくて、一度さぶらひて、親しうみけしきをもうかゞひ、御話をもうけたまはらばやと思ひ侍れど、あやにく先つ日より、風の心地にて打ふし侍るにはあられど、そと出などゞめられ侍れば、此ほどをすごしてと、先は、文して御ありさまうかゞひ奉るになむ。かしこ。

西木　しげ子

寒梅も、はや咲きそむる折には侍れど、今年は、餘寒常にもまして侍れば、こゝにても、朝の霜夕の氷たゞならで、人々いたく、なやみ侍り。まして、寒さもて聞ゆ高うをはする御地にては、いかばかりにか侍らん。野や眞垣は、未だ消殘りし白雪の、時ならぬ卯の花の咲きし如く、長閑に埋火のあたりにて、日頃好ませらるゝ書ども繙かせ給ふらんと、故鄕の空のみ打眺めらるゝ折から、學びの窓近う御文下され、とる手遲しと拜し參らするに、御二親の君には、何の御變もあらせられずとの御たより、よろこばしき御事になん侍る。されど、氣候の不順なるはとにかく、病もおこり易う侍れば、常々御まめやかに渡らせらるゝ御身も、よくよく御心し給りたく候。遙より御伺ひ參らせんと存侍れど、何かと心せわしきまゝ、なそなたり候つみ、ひろきこゝろに御ゆるし給はれかし。妾事には、御陰を以て、いつも〳〵健かにて、及ばずながら螢や雪を集め居り候へば、御心安う思召し給ひてよ。さて涙に袖を分ちしより、指を數ふれば、三年の長きを經ぬ。然れども、學の道は進まじ。いつまでも御年の上の御心を、わづらはせしとがいと深けれど、やがて業卒へ、御なつかしき、御膝近うまつりて、風の朝雨の夕、月雪花も諸共に眺め奉らんと、それのみ樂

みまゐらするになむ。かしこ。

桝田益子

さえ返るききさらぎの空の習ひとて、朝の風の身にしみ侍るを、如何渡がせ給ふらむ。雪げの雲のいと覚束なさも、立そはり侍りてなん。御かぞいろ幼けなき方々にも、平らかにあらせ給ふや。中に冬にも増る此頃の寒さを、能くかしづかせ給へ。山かたつける伏やの軒も、さすがに春の光はやぶしわければや、籬の梅もゑみ初め侍れば、まして、天つ日影のさし添ろ御邊りは、如何斗りにやと、いと〳〵床しうこそ覚え給へらるれ。兼て告げこさせ給へる千本の梢も、白妙の雪と見え、散り方はしき風に誘はれて、谷の戸出づる鶯の聲の匂を、朝にけにま袖にしめ給ふらん静けき御住居こそ、中〳〵に羨しう思ひ侍らるれ。いで此程過さでまう昇り、御そのゝ雪の光りある御音の栞も承り、且は、積りし御物語も聞え侍らばやと思ひ給ふる物から、浪花堀江の何ッと芦分小舟にてなん。いかで東風の便りに、色香うるはしき御園の梅の匂ひを、ふきおこせ給ひれかし。鶯の初音よりもと待ち侍べるぞかし。あなかしこ。

鶯の初音より猶中〳〵に
ゆかしき梅のたよりをぞまつ

作塲きせ子

春といふは名のみにて、まださはかへる寒さのいやまして、雪間の風はいとゞ身にしみ渡り、凌ぎかね候ふところ、御許様には、如何に渉らせ給ふらむ。御障りもなくおはしまし候はむといはひあげまいらせ候。私事、あまりの寒さに怖ぢこもり、火桶としたしむのみにて、坪の内のけしきさへ得しらで過しゝに、今朝しも、ふとまどのひまよりふき入るゝ香のゆかしさに、心まとはれ、寒さをば打ちわすれ、戸をおし上げて見候へば、紅梅はものかは顔にて、雪まじりに咲きそめたるに驚き、げに心なき草木ながら、清く高き操かなと、そゞろにうらやまれ候まゝ、最も色こき方の一枝手折り、例の腰折れ一首相添へ、御覧に入れまいらせ候。筒に御うつし遊ばし、文讀み給ふ窓の御なぐさみにもなし給はらば、私はもとより、この花も栄えあることに御座候。先は御機嫌御伺ひまであら〳〵かしこ。

ものかはと雪の下よりさくはなの
こをはいかてか手折らさるへき

近藤孝峰子

春とは只だ名のみにて、四方の山々かすみの氣あひもなく、日毎日毎の雪模様、却つて寒中よりも、堪へがたく侍るを、君にはいかに過させ給ふらむ。わけても〳〵祖母君には、御老衰の御身ゆゑ、一入凌ぎかたく思召さるべき事と推しまつり候。次にこゝ許、老も若きも打ち揃ひ、かはりなう起居致し居り候まゝ、恐れながら御心やすめ給ひてよ。いさゝかながら菓子一折、御見舞のしるしまでに、御覧に入れ候。
よろづは、次の日曜日に、さぶらひてと存じ、わざと書きのこし申候。あら〳〵かしこ、

片山綾子

衣さら着とやら、いとも〳〵寒さの身にしみて覚え侍り。ほゝゑみ初めし軒端の梅も、かけひの水とゝもに、又つよふむすぼゝれ侍るを、まいて御わたりには、いかゞおはしますらむ。去年の雪だに消えなくにと、かこち給ひし昨日より、まさり侍るを、ゆめおろそかになしたまひそ。月影さゆる夜もすがら、御机にのみ親しみ給ひて、いたづきせさせ給はぬ様、せつにいのりまつるになむ。やがて、若菜の下もえ初むる頃は、かすみを分けてかのなれし野にと、たのしび侍るを、そが折にはうぐひすの初音、おしげ

なうもらし給ひてよ。あなかしこ、

蒲生鶴子

寒のあき侍りしより幾日か經ぬに、降りつゞきしみゆきをやみなく、隙もる風の身をきるばかりなるに、心のゆるみ候爲か、一入身にしみ、裁ち縫ふ業もねせで、たゞ〳〵埋火の許さりやらず、誠に淩ぎにくき昨日今日、御わたりには、いかゞ暮させ給ふらむ。最も御住ひは、建物の結構なるが故、私宅の如くは感じたまはねなめれど、御としめされし御老父様、ならびにお子供様方などの、私共に比べ候ては、いかに御困りの御事と御推察申し、只今も、母との物がたりに、御寒さを淩がせ給ふ料に、何かなど考へ候も、埋火をおきて、外によき料とても候はれども、一夜作りの甘き物、御見舞のしるしまでに、さし上候間、御うけとり下され候はゞ、此上もなきよろこびになむ。先は御けしき御うかゞひまで。かしこ。

千葉卓子

餘寒とは申しながら、未だ、きびしきさむさに候折から、其後、御兩親様始め、御許様には、如何に御すごし遊ばされ候はむ。伺上候。次に私方、皆々無事に暮し居候まゝ、余事恐入候へども、御心安う御思召下され度候。扨今年は、未だ覺ねなき餘寒ならむと老人より承り候。其爲にや。此頃は、わけて『インフルエンザ』流行の由に候へば、かれて御兩親様には、御弱きさがと承り居り候まゝ、別して、御寒さ御いとひ遊ばされ候様、かげながら祈居候。猶御許様にも、學びの道を御はげみには候へども、何卒、御身の上御大切に遊ばし、此上ともに、御勉學の程一偏に願ひ上候。筆末失禮に候へどし、御兩親様へよろしく御傳言願ひ上候。先は御見舞まで。かしこ。

高石登代子

年ごとに今年の寒さはと、いひならひ候へども、げに、ことしの寒さはいみじう、ことに餘寒になりてよりは、一しほ淩ぎがたくおぼね候折から、御全家様には、御かはりもあらせられず候や、御うかゞひ申上候。こなたにては、幸ひ打そろひ事なうくらし居候まゝ、御こゝろ安う思召くだされ度候。昨日今日の寒さは、近年になく身にしみ候を、まして山ふかき御わたりは、如何にはげしかるらむ。年老い給へる御祖父母様には、さこそと推しまゐらせ候。このひとかごは、けさ、弟の打ちとめたる鴨にて、さしてめづらしくはこれなく候へども、御あつものになり御用ゐあそばし、いさゝか御寒さの忘草とも相成候はゞ、こよなう、うれしく存じ上候。先は、御見舞まであら〳〵。かしこ。

中島信子

春の若水ぬるみ初めしも、さねかへるあらしは冬よりも堪ふまじくなんはべるを、御もとさまにはいかゞはしのがせたまふらん。とくより御たづれまゐらせたくはべれど、此のさむ風にとぢこまれ、いとさびしくはべりしを、昨日今日の長閑さは、心もすがすがしう爽やぎ侍りて、小庭の梅も二つ三つさき匂ひ、いともうるはしくはべりぬれば、御心をなぐさめたまはん御料にもと、おもほてるわざも顧みず、御見舞のしるしまでに、一枝をりそへ候まゝ、御てすさびにめされば、うれしき極みになん。なを〳〵、申さまほしきこともかず〳〵なれど、いづれ過さで參りはべりて、こまやかにきこね上げまゐらするにこそ。あなかしこ。

福原蓋子

春ながら空はなほ霞みもやらず、さねかへるあらしの、冬よりも中々に耐へがたく侍るを、君には、いつもながら健やかに渡らせられ、御愛たく存じ侍り。こなた事なうしのぎ侍れば、たね〳〵しけれど、御心安くおぼし玉り度、まづは折からのおぼつかなさに

みありさまうけたまはらまほしうて、かくなん。なほ、此淺草海苔、いさゝかながら、きのふ東京の伯母よりおくりこし侍れば、ごらんぜさするな、納め玉ひてよ。かしこ。

新之子

はや匂ひいづべき梅花さへ、またつぼみのくちびるかたくとざしつるに、今年の寒さもおしはかられ申候。暖國の當地さへかくなるに、まして、昨日よりの餘寒に、御地はひときは御さむさつよからむと、すゐし參らせ候。常々御多病の御許様には、いとゞきびしく感ぜさせ給ふらん。かぜども召さぬやう御大切にあそばされ度、ねんじまゐらせ候。明後日より、躮れて御承知の熱海なる姉の許へ、用事かたく〳〵避寒に參り、十日間ほど滯在致すべく定め候が、御許様にも、御都合よろしくおはし候はゞ、何卒御出でねがひ上候。御存じの通り、姉も常時は、主人留守中の事とて、とかくにもの淋しき折柄、御同行致しなば、さぞやよろこぶべく存ぜられ候。幸ひ彼の地は、氣候もよほどやはらかく、湯も自由のことゝて、御病後の御保養にはよかるべくと、かくは御さそひ申上候。御用もおはすべけれど、なにとぞ御くりあはせ、御出でくだされ度、御すゝめ申上候。あなかしこ。

三好珍子

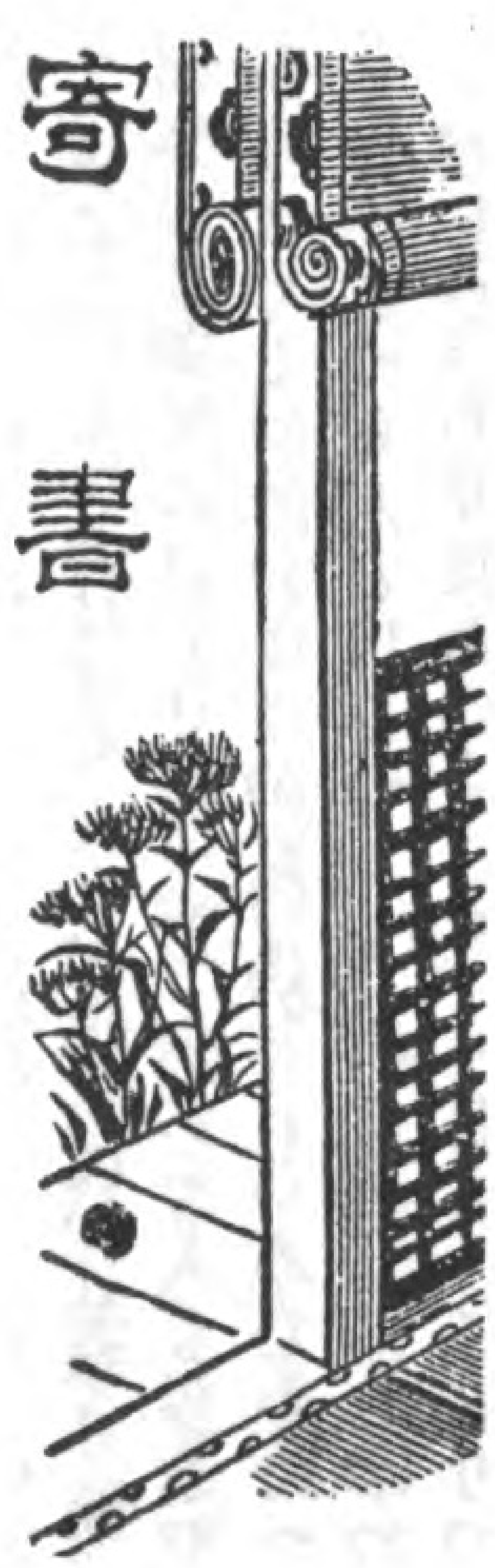
このころ寒さの猶も去りやらず、風さへいみじう吹すさぶ此日頃な、皆の君には、いかに過させ給ふらむ。いとも御床しうなん。年若き者だに、終日火にのみ寄そへつゝ侍れば、まいて御老母様などには、さこそわびしうおはすらんと、推しはかり參り候。殊にことしは、例年より御氣はげしき故にや。病める人も多きやうきゝ侍れば、常にすくよかにおはす御身ながらも、みし心給へよ。さてとくより伺ひまつらんと思ひつゝも、何くれと世の事わざのしげきにかゞづらひ、あすはあさてはと、一日〳〵に怠りつる頭、例のひろきみ心にゆるし給へてよ。されば、けふこそば御無音の御詫事かたく〳〵、御伺ひ申さむと心がけ侍りしに、又しも、ゆくりなく去りがたき用事のいでき侍れば、いともなめげなるわざとはぞんじながら、使もて參らすべければ、惡しくなとり給へそ。この一籠は、やからのもの、獵に參りしつとにとて、えさせ侍りしまゝ、かことなき御許には、御めづらしくはおはしますまじけれど、餘寒御見舞のしるしまでにまゐらす。又例の水仙、こぞよりは一しほ心をこめてやしなひ、花もやゝ大きやかなるやう覺え侍れば、二三種御覽ぜさするに、例の花瓶にもいけさせ給はゞ、花もこよなき幸にこそ。かしこ。

佐々有鄰子

硯の海も氷りはてたる此ごろのさえかへりには、如何に御くらしあそばされ候やらん。御老体の御尊父様のおはします御事に候へば、一入此の二月の空もやうにては、御氣づかひ申上候。御まへ様には御孝心厚き御事どもは、姿務のかれて、承知いたし居候て、朝夕弟妹どもに、教示いたし候のみならず、いとゞ御ゆかしく、奉存候まゝ、御様子承伺候。あなかしこ。

森田松子

春は立かへりぬれど、二月の時候なればにや。昨今のしのぎがたきは、例年よりも、殊更におぼえ申候へば、御一同様、御さはりもなく、御くらし遊され候や。當年は、わきて日々風はげしく、雪もたびたび降つもり、越路の御すまひいかにわびしき御事ならんと、はるかに御察し申上候。こなたにも相かはらず、さむさをしのぎ居候まゝ、御心安う思召下され度候。まづは餘寒御見舞まで一筆申上候。かしこ。



月並和歌の撰者に申す

澁谷　菊地芳樹子

女鑑の月並の和歌は、何人の撰みたまひて其のよしあしを定めたまふにや知らねど、抑も和歌は、其の姿の氣高く、調べのうるはしきをよしと聞く。こは眞淵、景樹の兩大家は言ふも更なり、斯道を深く窮めたる大人達の宣ふ處にてあるなり。さるに、月並の和歌の三才の部に撰みたる中には、無下にいやしげなる調べの歌あり、くね〳〵しき讀みざまあり。さて其撰に漏れたる歌の中に、よしと思ふものまことに少なからず。抑も他の和歌を撰みて甲乙を定めんとするには、能く幾度もうち返して吟じ、其言葉のかゝり、句の亂れのありやなしや、上下の掛合の如何にありや、また一首の上の姿のよしあしをも、能く吟味せらるべきなり。女鑑には、極めて歌の達者もおはすべければ、かゝる事素より知りたまはぬにはあらず。然れども、妾が心に落ちぬ撰み振りの多きは何故にや。

例へば、第二百四十二號海邊鶴の撰歌を先づ申すべし。此の題は普通には住吉の松にかけ、田子須磨の浦波につけて讀むものなれど、开は尋常の歌にて、取りわけて賞美するにも及ばじ。かゝる題は、古來の撰集にも幾千萬首となく讀みて、古人の歌多く、その歌の作例は極りたるものと思ふなり。然るに、此歌の天地人と撰みたる、鷹山君の「住の江のきしにしけれる老松に千とせをしめて遊ふ田鶴かな」これを天とせられたるは何故にや。此歌調べ宜しとも見えず。佐藤そう君が「あま人

が綱はすのきの松に來て…………、之を地とせられしもいかゞ。田代きわ君の「二見かたあらふ巌の上にまたむつましげにも遊ぶつるかな」この歌は、前の二首よりは立ちまさりたり。調格はよからねど、作意まづ新らしく聞ゆるあり。甲の歌の大藪、林、山田、武藤、清水、中村、柏木の諸君の歌、みあ平々凡々とやらん申すべく、中に大藪君の眞梶とるが、少しまされるやうにも見ゆ。此七首は、乙の部に撰みたる大石まさ子君が、「君が代の長柄の濱に住みなれて千歳かさぬる鶴の毛衣」には劣りたり。次に此の乙の部にてよろしきは、田村多豆子君の「白雲のかゝるを見しは磯山の松にむれ居る田鶴にさりける」次には、村田たか子君の「明石かたあはし島山はの見えてたちまふ鶴のかけそゆたけき」がよしと思ふ。次には、鶴峯やす君の「わさ日さす濱邊の松にやすらひて君か代いはふあし田鶴の聲」此の四首は甲の部の歌より、姿も作意もよきにあらずや。丙の部に入りたる歌の中にも、甲の部よりもよしと思ふものあり。其は横田秋君の「鹽釜の浦つたひしてあく田鶴は千島の松や塒くらなるらむ」これ面白く讀みたる歌あり。次に丙の部にてよきは、佐藤ひさ君の「打ちよする荒磯波もしづまりて巌の上にねむる田鶴かな」これもよろしき歌なり。次に關口いく君の「あし田鶴の千代よひかはす聲聞けはよる浪さへものとけかりけり」また瀬戸榮君の「わかの浦の松の葉越のあしたつをよせて返らね浪かとそ見る」以上あげたる歌の中にこそ、天地人の三才はあるべけれ。妾をして遠慮あく言はしめば、左の如くにあん。

天　大石まさ子君の乙の歌

地　田村多豆君の乙の歌

人　　横田秋子君の　丙の歌

甲の部へは、田村たみ子君、鶴峯やす君、横田秋君、佐藤ひさ君、關口いく君、瀬戸榮君、言ふまでもなく甲の歌と存じ候ふ。

妾はもとより無學にて候へども、歌の道のことは、廿年余りも研究いたして候ふ。女鑑の記者諸君、希くは妾が思ふ處あしゝと思ひ玉はゞ、敎へを賜はれかし。もし妾の言ふ處あしくば、其由を明らかに示したまへ。妾は前號の撰歌にも心得ぬふしいと〳〵多し。また申上まゐらすべくなん。



雜報

雲のうへ

●紀元節の御祭典と御宴　去る十一日宮中に於いて行はせられたる、紀元節の御祭典と御宴の御有様を記さむに、午前八時式部職員出仕皇靈殿に御饌を供し、雅樂師奏樂の間に祝詞を奏し、午前九時御親祭を行はせられ、岩倉掌典長は、天皇陛下の御代拜を、高辻東宮侍従長は、皇太子殿下の御代拜を、吉見東宮女官は、皇太子妃殿下の御代拜を順次奉仕し、終つて、皇族各大臣以下、親勅任官諸員の拜禮あり。十一時頃御式を擧らせられしが、

天皇陛下には、正午内外群臣五百餘名を召させ給ひ、例年の如く御宴を開かせられ、御正装の上、伏見宮貞愛親王、閑院宮載仁親王、梨本宮守正王各殿下を始め奉り、徳大寺侍從長、田中宮内大臣、岡澤侍從武官以下を隨へさせられ、豐明殿に臨御あらせられ、千種の間及び南溜の間に御立寄の上、同所に參候せる伯子男爵及び有位華族、幷に宮内省奏任官に拜謁仰付けられ、間もなく群臣一同の最敬禮を受けさせられつゝ、豐明殿の玉座に着御遊ばされ、玉音朗らかに左の意味の勅語を賜はりぬ。

朕は、紀元の佳節に當り、内外臣僚と此宴を偕にするを喜ぶ。

此に於て桂内閣總理大臣は、群臣を代表して左の御答の辭を奉る。

紀元節の佳辰に際し、臣等を親しく宮中の餔宴に召させられ、優渥なる勅語を賜ふ。臣等感激の至りに堪へず。此に群臣を代表して、恭しく聖壽の無疆を祝し奉る。

又外國使臣中の古參なる西班牙公使、ド、バレラ氏は、恭しく起つて佛語を以て左の奉答をなしぬ。

外臣等本日の佳節に當り、親しく宮中の御宴に召され、優渥ある聖旨を拜するの榮を得たり。外臣等の感荷何者か之に加へん。茲に外臣一同を代表し、恭しく　陛下の萬歳を祝し、併せて皇室の御繁榮を賀し奉る。

畢つて　陛下には、一同と共に御盃を擧げさせられ、猶皇族殿下幷に外國使臣等には、有難き御諚を賜はり、午後零時四十五分入御遊ばされたりと承りぬ。

●・・・・・・・・

●東宮殿下の御引移　沼津へ行啓遊ばさるゝや、間も無く當地に痲疹病流行したるため、葉山

なる有栖川殿下の御別邸に御滯在あらせられし皇太子殿下には、去る十二日、葉山の御用邸に御引移遊ばされたりとぞ。

●御差遣　英國皇帝皇后兩陛下戴冠式へ參列のため、我が朝廷にては、小松宮殿下彰仁親王を御差遣の旨、去る一日を以つて御沙汰あらせられぬ。隨行仰せ付けられたるは、左の人々なりといふ。

陸軍中將	寺内正毅
式部長男爵	三宮義胤
宮中顧問官侯爵	中山孝麿
調度局長兼式部官	長崎省吾
式部官	丹羽龍之助
陸軍歩兵中佐	黒澤源三郎
式部官子爵	稻葉正繩
東京帝國大學醫科大學教授醫學博士	土肥慶藏
陸軍歩兵少佐	五十君弘太郎

●遭難兵士に聖旨を賜ふ　青森なる第五聯隊第二大隊兵士二百十一名は、去月廿三日、青森市を八甲田山下へ離る五里半の地、田代といふへ行軍を行ひぬ。このあたりは、近年稀なる大雪なりしが、殊にその日は、紛々たる吹雪天地をこめて、面を向けむやうもあらざりつるに、雪中進軍の練習あれば、輕々しく退くべからず、寒苦に寒苦を忍び、辛酸に辛酸を味ひつゝ、ひたすら進行するに、風はます〳〵吹きすさび、雪はいよ〳〵降り積りぬ。氷山高きところ人家とほく、寸前をも辨へざる有様ありしかば、不幸にして路を誤り、つひに谿間に落ち入りにけり。今はせん術なくて、其夜はそこに露營し、翌日田茂木野といふ處まで戻らんとて、こゝに歩を返したるも、雪と吹雪とにて行くべくもあらず、銃臺背嚢を焚いて、尙露營する事三夜、寒さいと嚴しく、骨を透さんずる程なりしかば、山をもぬかむ益荒夫も、いかでかこ

れにてらへ得べき。いたましいかな、軍隊悉く凍死するの悲慘なるに到れり。後搜索隊のために發見され、蘇來りたる者甚だ少く、夫だに悲しくいたはしき事あるを、まして、一二の者を除く外は、或は手を斷ち足を切り、完たき身體に復するものあかるべしといふ。誰かこれをきゝて、同情の涙をそゝがざるものあらむ。事叡聞に達するや　陛下には大御心をなやまさせられ、早速山本侍從武官を遣はして、生存者に御菓子料を下賜せられ、いとも優渥なる御慰問の聖旨を賜はりしかば、兵士等は、何れも感泣せざるはなかりしとぞ。まことに畏れおほき極みならずや。

●古蹟取調會へ御下賜金●●●●●●●

天皇陛下には、先頃御思召をもて、帝國古蹟取調會へ金一千圓御下賜あらせらるゝ旨御沙汰ありたるに付き、去る六日副會長々岡護美子は、宮内省へ出頭して右御下賜金を拜受したりと。

梅のかをり

●小學校生徒の美擧●●●●●●●

日本橋區千代田小學校高等科四年生男子一同は、第五聯隊凍死の事を聞くや、愛らしき眼に同情の涙おさふる能はず、小さき胸に哀痛の念止み難きまゝ、此程四圓の金をあつめ、左の手紙を添へて、東京朝日新聞社に委賴し、弔慰の意を致したりといふ。誠にたのもしき心ばえといふべし。

嗚呼、今回の一大慘事たる靑森第二大隊兵士の凍死は、實に我帝國忠勇の軍人の其任務に斃れしと雖も、其父兄親戚の悲歎果して如何ぞや。我々同胞たるものは、萬感胸に逼り、血涙禁ずる能はず、宜しく之が遺族を慰藉するに努めざるべからず、茲に機敏なる貴社に於いては、已に遭難地へ通信員の迅急派遣せらるゝあり、又遺族へ義捐金送達の勞を執らるゝと、甚に新聞社が社會に盡すべき義務なりとは云へ、又常に他社に率先せらるゝの事は感謝の至りに堪へず。余等少年未だ小學に在つて、身に餘財莫く、其遺族を慰藉するが如きに至つては、

九牛の一毛だにも如かずと雖も、聊か貴社が美擧を賛助し、平素父兄より賜りたる筆墨の料を割つて、送達の勞を乞はんとす。其金額の些々たる實に慚愧の至りに堪へずと雖も、幸に微志を容れらるゝあらば幸甚。

一金四圓也

明治卅五年二月六日

日本橋區千代田小學校高等四年男子部一同

●教員學生の名譽　兩陛下には、毎年女子職業學校の作品を御買上になる例なるが、本年も天覽に供へたる百七十一品の中より、七十一點だけ御買上あらせらるゝ事となりたり。中に最も優れし出來ばえにて、深く　皇后陛下の御意にかなひ、御手許に留め置かるゝ品といふは、同校造花科生徒伊藤つま子、齋藤せい子、江口きん子外十餘名の合作に係る、丈五尺五寸、徑四尺の花盛籠價百五十圓のものと、立山てる子の芍薬の繍と、田川りき子の薔薇の繍と、同校刺繍科教員加納幸子の手になれる、長さ二尺一寸幅一尺八寸のストーヴ前衝立價百五十圓のものとにて、殊に右衝立は、鼠色の琥珀地に、松と牡丹をさしたる花瓶をあらはし、松は緑、牡丹は白に、花瓶は銅色におき、臺は堆朱彫の型をあらはし、なほ其花瓶には青銅色の龍を刺したるものなりといふ。

●裁縫專修教員養成所　女子教育の盛なるにつれて、學校其他さま〴〵の方法を設けて、之が養成に勉むること、雨後の筍のごとしとやいはまし。されどその初めは、おどろ〳〵しきことといふにも肖ず、實行あひ伴はず、遂に孤城落日のありさまとなれるもの少からず、まことに遺憾の限といふべし。こゝに女子專科教員養成所(東京麹町上二番町九番地)にては、實用的學科即ち裁縫教員の欠乏を補ひ、かつは、そが教授法の不完全なるを改めむとすと。其壯擧やよみすべしといへども、他の失敗者流にかんがみ、鋭意熱心、大に其抱負

實現し、女子教育の進歩に多大の貢献あらむことを望むや切なり。

●女子學術講習會　東京府教育會にては、本府小學校教員補充の一方法として、其筋よりも補助を得て、教員傳習所を設け、目下五十餘名の男生徒、三百餘名の女生徒を教養しつゝあるが、更に又女教員たるに必須の學力を補修し、兼ねて一般女子の爲に新智識を啓沃せしむるの目的を以て、この二月より、女子學術講習會なるものを開き、理科(動物生理)家事の二科目に就き、日曜毎に午前九時より三時間づゝ授業し、三ヶ月間にてをはる豫定にて、その間の講習料は金壹圓五拾錢にして、之を二回に分納するも妨げなしと。又、前記本科准教員傳習所は、今回學級數を増加して、ます〳〵盛ならしむるよし。同所學科目は、修身、教育、國語、漢文、歴史、地理、算術、習字、體操、裁縫の諸科にして、修業年限は一ヶ年、授業料は七拾五錢なりといふ。

●愛國婦人會の遊説　愛國婦人會員奥村五百子女史は、頃日地方遊説にいで立ち、鎌倉、横須賀、浦賀、戸塚等に於いて各々所説を演説したるに、去る八日は、相州藤澤なる清淨光寺に於いて、婦人會創立の趣旨を述べられたりといふ。婦人の矯正につとむる本會の赤心こそ、誠に感ずべき極みなれ。

●戰死者遺族救助　奥村夫人等の發起せられたる愛國婦人會より、日清戰役に死亡せし遺族なる、神奈川縣浦賀町鈴木エイ、津久井郡牧野村落合市藏、同郡佐野川村田村ミト、三浦郡田越村長谷川藤次郎の五人へ、救助金として金二圓五十錢宛を送りたき旨、この程同縣赤十字社支部へいひ入れしかば、夫々贈與の手くばりをなしたりとぞ。

いつもかはらぬ美擧、この會のごときを名實あひ伴ふものといふべし。

●●●●●●●

●遞信省女子の雇員　遞信省にては、電話接續又は、爲替貯金の計算に、女子を使用したる處、男子よりは微細の業に堪へ、性質從順なるより、大に好結果を表して、益々員數を加へたる事は、世人の旣に知る處なるが、最近の調査によれば、東京及び各電話交換局に七百八十二人、東京貯金管理所に四十人、大阪貯金管理所に三十二人、通信局に五十三人、都合九百七人の女子雇員ありといふ。

●●●●●

●看護婦の龜鑑　東京慈惠病院に、鈴木菊子と呼ぶ看護婦ありき。三州田原藩の生れにて、祖父は春山と號し勤王家の聲高く、故の勝伯とは交り頗る濃やかなりしと云ふ。菊子はさる末あるからに、さすがに、夙くより身を慈善事業に委せんと志し、去る明治十八年同院の募集に應じて、さて看護婦とはなりたるなりけり。人と成り溫厚篤實、克くその職を盡したるより、程なく取締の位置に進みしが、其患者を看ること、母の實子をはぐくむが如く、慈愛親切到らざるなく、殊に先年尾濃地方に震災ありしの如きは、其爲め入院したる三人の孤兒に對し、憐愍の情切なるあまり、吾が俸給の幾分を割いてまで撫育したる程なれば、人望院の內外に渡り、皆その德をたゝへしも、女史は元來多病の性質にて、間々その任にたへざる事あるより、今回愈々辭職する事となりしを以て、院長いたくこれを惜み、且つ今迄の功勞に報いんため、恩給年俸六十圓を與ふる事に決したりといふ。人たらむものは、すべて誰もかくてこそあらまほしき業なれ。

●●●●●●

●彼理紀年碑と米國人　去年久里濱に建設したる米國水師提督、ペルリ氏上陸紀念碑の寫眞は、曩

に、金子米友協會長より米國公使の手を經て、同國大統領ルースヴェルト氏、海軍卿ロング氏、前大統領マッキンレー夫人、ペルリ氏の令孃テネス夫人等に贈呈せしが、此程その人々より懇篤なる謝意を表し來り、殊にテネス夫人の如きは、實父の爲め建碑の擧ありしは、一家の名擧のみに非ず、之に依りて、益々日米兩國の交誼を厚うするとを得べき旨を附記し、極めて鄭重なる感謝の意を述べありしと云ふ。

●禿頭病の流行　豫防法の行き届きたる爲め、甚しく流行するに至らざりし禿頭病は、近來女髮結、理髮店に於いて、消毒法を怠る結果、又々流行の兆を現すに至れり。其の患者は、男に少なくして女に多く、中には家内中の婦女が盡く、この病に罹れる處さへありと。流行の原因は無論櫛類の不潔にありて、女髮結の髮結用器具携帶を禁じあるにも關らず、花客先に髮結道具の用意無きため、今尚窃に、是を携ふる髮結女少なからざると、又假令通常の家に髮結道具の用意あるも、一家の婦女は共同して之を使用するため、自然病毒の傳播を速かならしむる由なれば、この際、髮結女が所持する器具をさくるは勿論、髮結道具は、一人毎に清潔なるものを用ゐ、一切共用することを廢するが宜しかるべしとぞ。

●流行の生花　眞行草の三つの體を守りてさまざまの形を賞づる生花の道は、ちか頃日ましに流行し、うすばたに懸花生に、さては釣花生の入船出船形など、花衒のゆきゝ絶ゆることなく、植木屋に於いても、郭橐駝の妙を盡して草木の仕たてに思ひをこらし、ことに温室物には一きに重きを置き、四季に不斷の花を咲かせ、その好みに應せしかば、たゞおのれひとり豐かなるのみならで、こ

れをうけ賣りする花屋にても、そが惠の露を受くるもの多しとぞ。かくて店には、芳はしき香常に馥郁として、かの芝蘭の室に入るともかくやと思はるゝばかりにて、中に尤もめで用ゐらるゝは、彼岸櫻、紅白の木蓮、百合の花、川柳、桃、梨、小米櫻を始め、和洋の時節物は、何れも、價一挿三錢より廿五六錢位、紅白の梅、椿、水仙等は既に末となりにけるも、梅は例の水ぐゝりなどいふ生方にし、水仙は、竹の二重切三重切などに、他の花を取りませて用ゐられ、菜の花も賞づる時よそ過ぎたれ、茶席になげ入れとして挿したる、また捨てがたき風情あるより、賣口あかく／＼に惡しからずといへり。

●雛人形の相場　彌生の節句は近付ける事とて、日本橋十軒店、淺草茅町等の人形店は、例によりて美しう飾り、去る十五日より開店したるが、其相場を記さんに、普通上等は、内裏雛尺二寸對(四十五圓位)尺　同(三十七圓位)九寸　同　(三十二圓位)　八寸　同　(二十七圓位)七寸　同　(二十圓位)六寸同(十七圓位)五寸同(十二圓位)三寸同　(六圓五十錢位)にて、極上等品は一對三百圓位なるよし。又附屬人形の官女、五人樂人、五人囃子、仕丁等は、何れも前記内裏雛の價より三割安の直段なり。又三つ折人形は、一圓五十錢より三十圓位まで、啼人形は六十錢より十圓位までなりといふ。

●展覽會　女子美術協會にては、來む四月一日より廿八日まで、下谷區上野公園内第五號館中部に於いて、第二回展覽會を開かるゝよし。その結果いかんは未だト知すべからずといへども、おつて評論することあるべし。

●落葉籠

投稿の規定

一、字体は楷書に限る。但漢字の外は總て平假名にて、變体假名を用ゐるべからず。

二、文体は、投稿者の隨意なれども、一行廿二字詰、七行内外の事。
但、可成は、ツリガナを附けて貰ひたし。

三、誌上の匿名は差支なけれど、便宜の所へ、必らず宿所姓名を明記すべし。

四、記事は隨意題目何にてもよけれど、有益にして興味あるものを望む。

五、一切期限は、目次欄題の歌文と同日の事。用紙は中紙尤もハガキにてもよし。

▲吾々は、諸嬢に有益の事を申しあげるので、決して無禮な事をいふのではありません。それは投稿なさる人の中で、書式によらない方が澤山ある樣見受ますが、爲に屢、編輯上にあやまりを來しまして、御互善くない事であります。國法を守るのも、その循守するといふ點に於いては同じでありますから、以後御注意を願ひます。（記者）

▲皆さんの投書にかゝる作文を見ますと、古語や雅言が澤山あつて、一寸事柄がわかりませず、美文でも讀む樣な氣がします。女だからつて、さうなまめかしく書かなくてはならぬ譯はございますまい。もつと一般に解る讀本體の普通文で書いては如何です。（三わや子投）

▲和歌や作文の選者を示して下さい。（東京きみ子投）

▲私が昨日學校へ行く途中、電話工事の人夫共が寒がつて、道の上へ火を焚かうとして居るけれど、不完全な焚物故、火がつかなくて困つて居ますと、十四五ばかりの男の子は、嘸寒いだらう、焚物を遣るから僕の家へ行けとて、一人の人夫を連れて家の門を入り、炭俵五六俵持つて出たので、人夫共は有難がり、それを焚いてあたりましたが、男の子のその麗はしい心の程には、いたく感心を催しました。（東京吉村靜江子投）

▲女が自轉車へ乘ると、生意氣とか何だとかいふ人がございますが、未だ未開の人があるので困りますね。服裝はさつぱりとし、時間は費えず、あんな重寶なるものはありませぬ、或る雜誌では體育に害が無いとて、女が自轉車へ乘る事をいたく奬勵して居ますよ。(東京山田はや子)

▲外に思があるのも關はず、また間に戀愛の情の成立つて居るか居ないかも關はず、金錢や財產や威權づくで一緒にして、一夫一婦といふ掟を被せ、これを切斷すると直に姦淫と呼ぶ人がある。これを正當といふを得やうかと書いた新聞記者があります。一寸諸媛方の御參考までに。(筑前操子投)

▲私はどんな性質か、記臆力が無くて困りますが、東京日新藥房の記臆增進藥は効驗がありませうか、ありますまいか。皆樣にお尋ね申します。(日向林久江子)

▲私は或會で、梅雨といふ題が出ましたから、「梅雨のために水がさがまさり、谷の埋れ木もあらはれてくる」との意を、一首の歌にまとました、處が、ある一人の靑年から、此歌に感じたとか何だとかとて、樣々な事を書き越して、非常な迷惑を致しました。諸媛も、詠歌はよく〳〵注意なさいよ。(南海某女投)

▲皆樣の文章のお上手には、每々感心の外ありませんが、如何すれば上手になられるものか敎へて下さい。(南海某女投)

▲私は田舍に居りますから、當代女子敎育家の御顏を見ることが出來ませんで、誠に口惜しく思ひ、石見の順子さんと同じく、その御肖像を御掲げ下さる樣記者の君に御願ひ申しましたが、最早待遠しくてありません故、再び御願ひをします。(群馬さう子投)

▲そのことは諸方からいふてきますし、吾々もまた善いことと信じ、まことに同情を表しまして、本號から愈履行しました。ことにその略傳をつけて、肖像と參看する樣にしたれば、一目瞭然たるばかりでなく、大に御參考になる點があるだらうと思ひます。(記者)

▲饗庭先生の小説は、實に面白くよみました。これからは、斯ういふためになるものを御載せ下さいませんか。(廣島よし子投)

▲女の身で出過ぎて居りますが、一寸御存じの諸媛に御伺申します。それはこのごろ、さる女學雜誌の記者の君が、美は、眞善をもかねて居るとやらいふてゐますがいかゞでせう。尤も論理的説明としては文があまり曖昧でありましたが、不審にたへられませぬ。(東京もと子投)

▲學問するには、あまり極端ですが、淺くして廣くするのと、狹くして深くするのは何れが宜しくありませうか。私は今、女學校の四年級であります。(靜岡きよ子投)

▲小兒を育てるには、良習慣を養ふのが尤も大切だといふ御方がありましたが、全くこれが第一の目的でありませう。(東京おと子)

▲ある女學校では、常に生徒に木綿の衣服を着させる定めださうですが、この上なき善い事ではありませんか。處が御正月學校の式に臨むに、絹の衣服をふろしきに包むでゆく御方が多かつたといふ話である。世間の人が絹をきて居る爲に、木綿では耻かしいと用意したのとは、最の事で、世の人人が驕奢に流れて居る罪でせう。兎に角これが動機になつて、世の子女達が質素で、優美端正の風習となる事をいのつて居ます。(東京はま子投)

口繪に就いて

●女子高等師範學校敎授武田錦子刀自●●●●●●●●●●●

刀自は本姓加藤氏、父を淸人と曰ひ、母を民子と曰ふ。文久元年二月東京小石川に生る。幼より故中村敬宇先生に從學、明治十三年御茶水なる女子高等師範學校卒業、同校附屬幼稚園保姆より、同校助敎諭に轉じ、明治十九年一月文部省より普通師範學科及び幼稚園保育科研究の爲め、滿三年間米國セーラム師範學校、及びボストン大學に留學を命ぜられ、二十二年六月歸朝、女子高等師範學校敎授に任じ、同廿三年三月陸軍敎授武田英一氏に嫁し、一男一女を擧ぐ。今職を女子高等師範學校敎授に奉じ、二十餘年間始終一日の如く、現に我が女子敎育の爲めに殫瘁されつゝありといふ。

●東京女學館講師國分操子刀自●●●●●●●●

刀自は信州松本の藩士江崎政國の次女にして、明治元年十月同地北深志町に生る。同七年上京、一度地方にゆき、越えて四年復び上京、落合直文氏に就きて專ら國文學を研究す。廿五年大八洲學校高等科に入學、傍ら池邊義象氏に從ひ、更に國史を專攻し、翌年正月文部省國語科の試驗を受けて撰に入る。同年三月靑崖國分高胤氏に嫁し、明治廿八年十一月東京女學館に職を奉じ、爾來勤續以て今日に至る。この間刀自の薰陶を受けたる子女、實に數千名の多きに及ぶといふ。

●杉田妙法寺内照水梅●●●●●●●

櫻の如く艶ならず、桃の如く阿娜ならざるも、何となう氣高くて、向へばそゞろに襟を正さるゝ如き心地せらるゝは梅花ならずや。みやこのほとりその名所に富み、春の初にさき出でゝ、塵に汚れたる都人の腸に、くしき香りを傳ふるこそ悅ばしけれ。杉田は横濱より二里の地に在りて、村内所々に梅樹多く、百花爛熳

として清香を競ひ、玉簾梅、東漸寺の梅など名あるもの少なからざる中に、妙法寺の照水梅は最も人の稱する處なり。半笑みたる朝ぼらけは、貴女の眠りをさめ出でゝ眠たき眉を東風にさらせる如く、開き滿ちたる曉は、その面を清め衣を正し、端しく座りて徐ろに一日の行を思ひ定むる如き觀あるに、かてゝ加へて六花紛々とその上に積みたる時は、花唇は花唇と品を爭ひ、清き香は粉末と共に散り、淡麗又淡麗、高尚いふべからざるより、詩人墨客の杖をひくもの甚だ多く、賤の田舍もために都の賑ひに及ぶべうありぬるるが、當地は又梅の美觀のみならず、海岸に偏したる地とて、漁村の眺め且つあはれに、海と陸との佳眺を集めし處なり。人力車は横濱より往復八十錢。馬車の便は根岸の半邊より妙法寺前まで。海は八幡橋より屏風が浦の風光をへて、往復するにたより善しといふ。

●●●●●●小村井江東梅　遠山の端の殘んの雪、なほ未だ融けざるに、春水いつしか緑をたゝへ、枯草漸く新たならんとするにわたり、まづ天下の春に魁して清香を放つは梅にして、人のこれにあやからんとするもの多し。墨田川の東梅林いと多かるが中に、ひとり其名を占めつるは、なか〳〵にすぐれたる節のあればなるべし。この梅園は龜井戸臥龍梅をさる僅か數町の地にありて、園内老樹古木多く、何れの枝々も打ちつゞける日頃の陽氣に、あるは淡紅に、あるは純白に、おのがじゞ笑をふくみ、色を爭ひ香を競へるさまは、げに氣だかきはとりの祝ぎの莚にも似たるめり。佐保姫のことさらに精を凝らし、神を盡して鋭き鑿を揮ひたらんかと思はるゝもをかし。ことに將軍上覽の梅と稱し、稀有の名木三株ありて、先つ年までは注連を張りけんが、いまの主は、これを陰氣なりと

て取り除きたれば、心おかざらんには何れをそれと見分け難きのみか、一株はかたよりたる塀の際に、他の二株は料理店に圍まれて、陰を踏むべき術もあらず、さはれ花に團子二つながらの備わりて、料理店馥郁亭といふにては洗鯉や、鯉こくの料理をなし、電話の設けさへおろそかならねば、花の模樣を口づから宅の父君母君にも傳ふべく茶店にては輕便なる辨當を賄へば、空いたる腹を肥すにいと便り善し。あはれ靑春ある昨日けふ、卷頭の圖を見ても心すが〳〵しきに、ひたすらに垂れこめてやくあき日を過さんより、一日を散策に費しなば、いかではれ〴〵しき思あらざらんや。

新刊寄書

兵事雜誌 第一、二、三號 東京 兵事雜誌社
婦人世界 第八、九號 大阪 浪華婦人會
國學院雜誌 第四、五號 東京 國學院
兒童研究 第九、十號 東京 教育研究所
教育公報 第二百五十五號 東京 帝國教育會
山形教育雜誌 第百三十六、七、八號 山形 山形教育社
裏にしき 第百十一號 東京 尙絅社
白虹 第二十一號 東京 白虹社
埼玉教育雜誌 第二百三十六號 埼玉 埼玉教育會
女子之友 第百六、七、號 東京 東洋社
鹿兒島縣教育雜誌 第九十九號 東京 鹿兒島縣教育社
日本婦人 第二十七號 東京 帝國婦人協會
高知教育雜誌 第百十六號 高知 高知縣教育會
教育時論 第六百六號 東京 開發社
大八洲雜誌 第百八十七號 東京 大八洲館
慶應義塾學報 第四十八號 東京 慶應義塾
六合雜誌 第二百五十三號 東京 日本ゆにてりあん協會
婦人と子ども 第一、二號 東京 フレーベル會
紀伊教育 第百六號 和歌山 紀伊教育會
教育 第二十三號 東京 茗溪會
大日本婦人教育會雜誌 第百四十一號 東京 大日本婦人教育會

近日刊行

文學博士西村茂樹君題辭
高等教育會議員湯本武比古君序
東京感化院長高瀨眞卿君著

教育修身一夕話 家庭

學校教育の眞理を解說し家庭薫陶の要領を談論し和漢洋三千年間の英雄豪傑碩儒偉人の事蹟を引證したるものにして後進教育の任に當れる諸學校の敎師職員諸氏は云ふに及ばず苟も子女を敎育して國家將來の良臣民を造成せんとする家庭には必ず一本を備へざるべからざるの珍書なり紙數凡四百五十頁製本美麗にして趣味饒多なる挿畫あり而も定價は僅に金六拾錢郵便稅金八錢なり

發行兼發賣所
東京市京橋區築地二丁目廿一番地
株式會社國光社出版部
（電話新橋二六九三）

●わきが（腋臭症）根治確證藥の新發見！

従來醫療賣藥其他百方手を盡し到底不治の難症と斷念せる腋臭患者は速に當館新發見の根治藥を施し「生きながら地獄」の苦惱を永遠に脱せよ、いか程重き慢性わきがにても本劑を用ゆれば誓つて**根治**することを確證す殊に本劑にて一旦全治せば決して再發或は他病に變ずる患無く生涯再び用藥を要せず是れ他にありふれたる賣藥と異なる處の本劑一種特有の神効なり患者よ速に此根治的新藥を一試して世人の嫌忌する病根を斷絶せよ實に不思議の新發見奇劑なり▲根治的謝狀山の如し來り見よ示す▲（藥價）輕症根治分藥價送料共六拾錢◎重症根治分同上壹圓卅錢◎頑固慢性症根治分同上貳圓卅錢◎爲替は神田局あて取組の事◎切手代用は必ず二割ましの事◎着金即刻送藥す▲（注意）本劑の大盛を羨み近時續々怪しき類似僞藥顯はる用藥者は深く注意ありて「日新館藥房製劑」の名義に着目して購求あらんことを乞ふ

専賣　東京市神田五軒町拾九番地

日新館藥房
（電話本局二五四六）

●慢性胃病患者に告ぐ

慢性胃病に罹り醫療及賣藥を施すも只だ一時凌ぎのみにて根治の見込なく到底不治の難症と斷念せる如き患者あらば最終の試藥として當店專賣の**胃病根治劑**一週分（藥價送料共四拾錢）を服用し見よ忽ち卓絶せる奇効を顯はし大に輕快に趣くことを確證す已に一週分にて藥効を覺りし諸君は引續て三週分（藥價送料共壹圓貳拾錢）を用ゆれば如何なる頑固の慢性胃病にても誓て根治することを確證す、但し最初の試服者へは一週分以上は決して販賣せず故に一週分にして藥効を感ぜざる患者は斷然廢藥し續て服用すること勿れ、是れ當店は他の賣藥者流の如く患者を欺かざる證據なり……乞ふ他の藥療にて治せざる患者は兎に角僅か四拾錢を投じて只一度だけ試み見よ必ず誓て根治せしむ

専賣　東京市神田區五軒町拾九番地

日新館藥房
（電話本局二五四六）

●「女鑑」愛讀者は此廣告を熟讀すべし

北海道教育會編纂

下田歌子先生 家政學講義 附女子教育講話

紙數三百五十頁

菊判洋裝美麗仕立全一冊

定價四拾五錢 郵税八錢

本書は下田華族女學校學監の講述せられたるものにて文章平易總假名附速記体なれば何人にも讀み易く解し易くの先生の講演を其儘聽聞するの感あるべし。先生の學識は古今東西に渉りて該博高遠なるは言を要せず材料豐富、例證適切、雄辯流るゝが如く而も滿腔の熱血溢れて萬丈の氣焰となる。其新日本家政の改良點を道破せられたるまた女子教育及び日本婦人今後の覺悟に就きて主張せられたる等皆是れ適實妥當正鵠に中せざるはなし。世の婦女子たるもの苟も一本を具へて女子の本務を全ふせられ天晴れ新日本の婦人たるの體面を發揮せられんことを希ふ。

發兌元 東京神田裏神保町 合資會社富山房

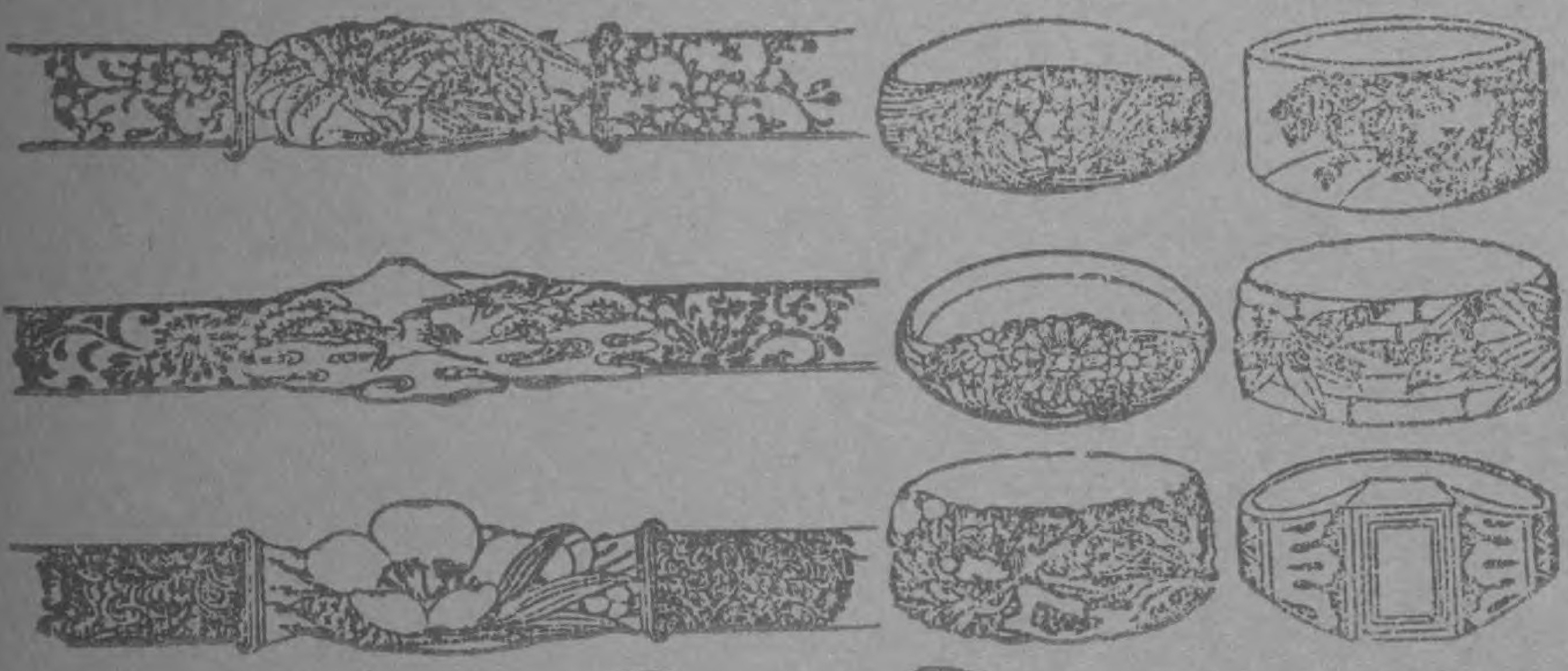
賣捌所 全國各地有名なる書肆に有之候間御購求を乞ふ。

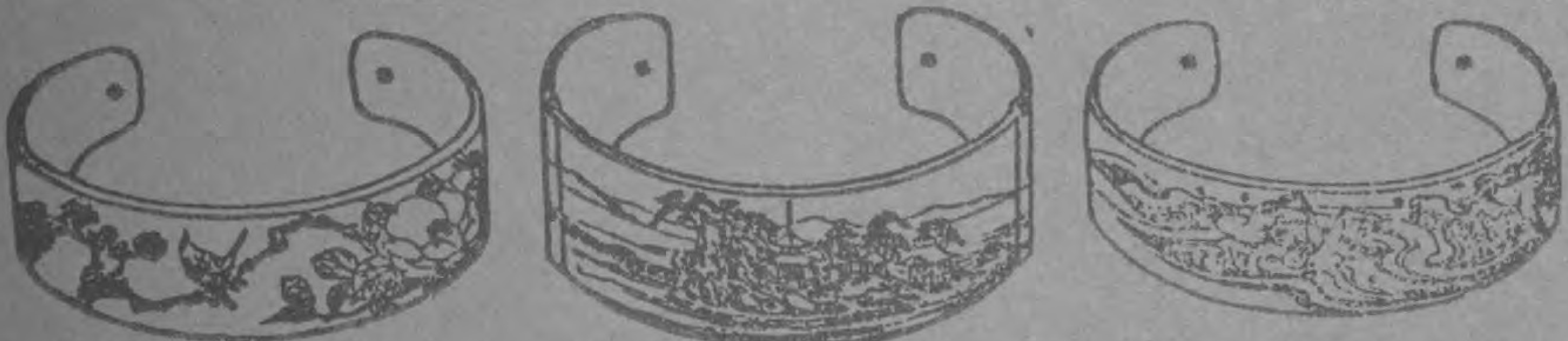
女鑑

明治三十五年二月廿日發行 毎月二回五日廿日發行 明治廿五年三月十二日第三種郵便物認可

第貳百四拾七號

吉沼製作品





金製指環

● 十八金二匁五分付片切彫
甲價 十六圓
乙價 十四圓

● 廿金三匁付平象嵌片切彫
甲價 廿二圓
乙價 十九圓

● 廿金三匁付薄肉彫刻付
甲價 廿六圓
乙價 廿三圓

● 廿二金三匁五分薄肉象嵌
甲價 卅四圓
乙價 廿九圓

● 廿二金三匁五分厚肉彫刻
甲價 卅六圓
乙價 卅一圓

● 廿二金三匁五分厚肉象嵌
甲價 卅八圓
乙價 卅三圓

● 廿二金三匁五分肉彫象嵌 ダイヤモンド入
甲價 二百五十圓
乙價 百八十圓
丙價 百三十圓
丁價 九十圓
戊價 六十五圓
巳價 五十圓

● 廿金三匁付小判形角形無地印
面指環 十五圓七十錢

● 廿二金四匁付小判形角形無地
同 面指環 廿二圓四十錢

● 純金五匁付小判形角形無地印
指環 廿九圓五十錢

外ニ段付模様付形状ノ變ル品ニ依リ價格ニ差アリ

金製帶止

● 十八金製高彫彩色細工付
甲價 卅五圓
乙價 三十一圓
丙價 廿七圓
丁價 廿三圓
戊價 十九圓
巳價 十六圓

金製根掛

● 十八金一匁五分付片切彫刻
甲價 十一圓
乙價 九圓三十錢

● 廿金二匁付片切彫刻
甲價 十四圓五十錢
乙價 十二圓五十錢

● 廿二金二匁五分片切彫刻
甲價 十九
乙價 十七圓

● 十八金三匁付蝶番付三ツ折片切彫刻
甲價 廿圓
乙價 十七圓五十錢

● 廿金三匁付蝶番付三ツ折平象嵌片彫刻付
甲價 廿三圓
乙價 廿圓

◎印材製作篆刻 應貴囑

右の外金地の多少寶石の大小及彫刻の繁簡等により代價に高低の品々あり

東京築地二丁目株式會社國光社印刷部印刷